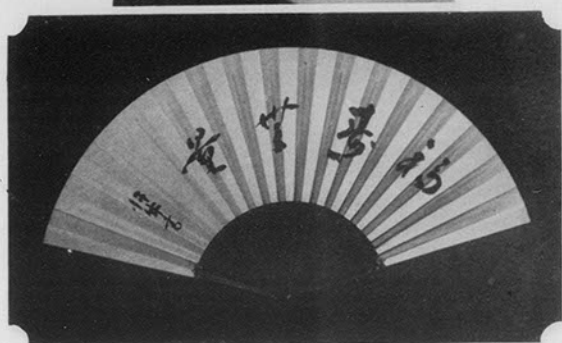


櫻井賢文先生

追悼弔

磐城高等女學校同窓會
磐城高等女學校校友會

櫻井先生御肖像

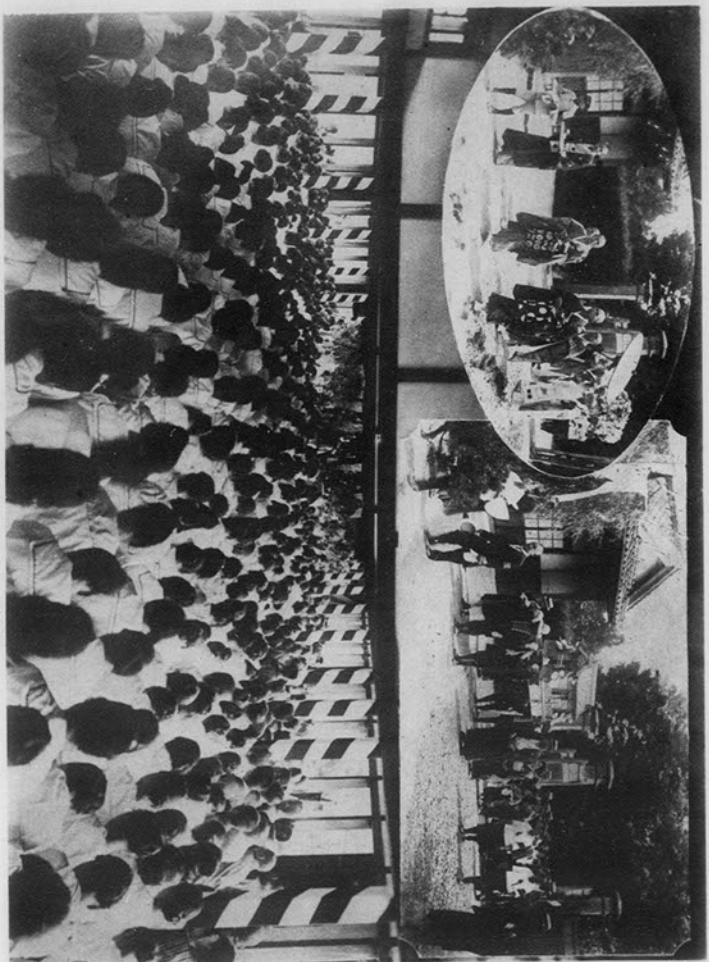


櫻井先生御筆蹟

正六位

故櫻井先生略歴

先生は舊姓稻枝名は賢文（マサブミ）明治十八年九月十五日石川縣金澤市菊川町五十三番地に生る。四高を経て東京帝國大學に入り大正三年七月十日文學科卒業、全年八月二十日熊本縣立球磨農業學校教諭に任ぜられ、後新潟縣立新發田中學校教諭、福島縣立會津中學校教諭等を経て、大正十一年四月二十二日日本縣立磐城高等女學校長に補せられ、在任約六年昭和二年七月二十八日病死せらる。



儀 葬 御 生 先 井 櫻 故

櫻井賢文先生追悼號目次

口 繪

櫻井先生の肖像、筆蹟及び略歴、校葬状況

卷 頭 の 辭

會長 木村實三

發 刊 に 際 し て

中川完一

校 葬 記 事

(五)

校葬の記

記 録 係

弔 詞

葬儀費決算書

文 苑

(一七)

思ひ出の数々

酒井・英吉

涙の三部曲

山口彌一郎

恩師の思ひ出

佐藤與吉郎

The Late Master

K. S. A. T. O

思 出

金子たけの

夏休みの一日

一年 加藤愛子

渚の夕暮

全 安島ツヤ子

校長先生をしのびまつて

全 高瀬タニ

母を偲ぶ	一年
後悔	全
不安な宵	全
夏休み中の一	全
亡き櫻井先生	全
追慕す	全
私の妹	全
夕立	全
秋の或一夜	全
母待つ朝	全
秋の夜	全
贈しかつた事	全
日誌	二年
涙は續く	全
哀愁の思	全
白萩	全
鷗飛ぶ日	全
ほろろみ	全
秋は来つれど	全
哀愁の涙	全
清い祈り	全
たそがれの思ひ	全
秋の夜に	全
悲しき日の思ひ出	全

淵美晴子
 吉野美枝子
 吉田安子
 江尻ナホ
 和田シヅ
 和田露子
 木村フミ子
 根木テ子
 澤井真子
 北郷ヤス子
 清岡孝子
 鯨岡孝子
 櫻井外幾子
 鷗沼キキ子
 益弘盛子
 中村盛子
 石坂テル子
 鈴木木子
 山本清子
 館野清子
 桐谷まさ子
 箱崎子
 中賀喜子
 志賀久子

父を失ひし友に	二年
初秋の夜	全
悲しみの光	全
梧桐の葉	全
晩秋の演風	全
源	三年
櫻井校長の死	全
宵雨を聞きつゝ	全
お別れした先生に	全
櫻井先生を悼みて	全
思出	全
恩師の御靈に	全
思ひのまゝ三片	全
落	全
どこへ出ませう	全
懐しき先生を偲びて	全
逝きし師の君を偲びて	全
悼	全
朝	全
亡き師の君	四年
井先生を偲ぶ	全
櫻井先生を偲ぶ	全
櫻井先生を偲ぶ	全
櫻井校長先生を思ひて	全

馬場千代子
 松本千代子
 草野フミ子
 門馬セキ子
 野木豊枝子
 鍋田美枝子
 伊田房枝子
 大坪常子
 皆川ハル子
 大森千代子
 半石千代子
 八幡正子
 渡邊タ子
 鹽本敏子
 坂本敏子
 山本モト子
 新田俊子
 堀江露子
 星恒子
 緑川子
 菱沼子
 三瓶子
 村上子

櫻井先生を偲びて.....四年 遠藤 伊子
 櫻井先生を憶ふ.....全 新妻 千子
 櫻井先生を憶ふ.....全 千葉 萬子
 櫻井先生を偲びて.....全 永井 八子
 憶！櫻井賢文先生.....全 堀川 重子
 櫻井先生を偲ぶ.....全 大柴 幸子
 櫻井先生を偲ぶ.....全 佐藤 千代
 櫻井先生を偲ぶ.....全 鈴木 野子
 あゝ櫻井先生.....全 草野 富子
 櫻井先生なしのびて.....全 吉田 貞子
 櫻井先生に捧ぐ.....全 菱沼 貞子
 櫻井先生を想ふ.....全 上澤 敏子
 櫻井先生を偲びて.....全 櫻井 生子
 友へのたより.....全 船生 子
 櫻井先生を憶ふ.....全 只野 子
 櫻井先生を偲びて.....全 只野 子
 先生をお偲びして.....全 櫻井 子
 櫻井先生を偲ぶ.....全 馬目 文子
 櫻井先生を偲ぶ.....全 今井 子
 日光見學記.....全 旅 子
 修學旅行通信(關西方面).....全 只野 子
 修學旅行の記.....全 只野 子

詩

華

(一〇五)

櫻井先生の詞藻.....一年 植頭 節
 俳句.....全 高野 美子
 鯉船.....全 和野 露子
 現はしき日.....全 全 伊關 子
 短歌(二首).....全 全 伊關 子
 全(二首).....全 全 伊關 子
 全(三首).....全 全 伊關 子
 全(七首).....四年 大坪 常子
 全(三首).....全 堀川 八子
 土の上に.....全 遠藤 子
 全 織内 子
 櫻井先生を想ふ.....全 織内 子

各部記事

(一〇九)

水泳部だより.....
 庭球コート建設の記事.....
 庭球部近況.....
 縣下女中等學校庭球大會出場の記.....
 圖書部だより.....
 職員送迎.....(一一八)
 第十五回同窓會總集會記事.....(一一八)

大正十五年度經常費決算(同窓會).....(一一九)
全基本金決算.....(一二九)
名簿.....(一二〇)

編輯餘錄.....(一五〇)

櫻井賢文先生追悼號

卷頭の辭

會長 長 木村 寅三

教育といふ作業は個人生活の人道化といふ一の大きな仕事を意識的に、努力的に、また經濟的に營んで、吾人の生命の増進、生活の進化向上を目的とするものであるといふことは何人も異論のない事であらうが、其の手段に到つては、知識技能を主とする教授に重きを置き、或は徳性の涵養を主とする訓育的方面に力を注ぐべきであるといふやうに、随分議論の餘地があると思ふ。或る方面の人々の中には「教授あつて教育なき教育」との評も數々耳にする所ではあるが、これは訓育的方面よりも主知主義に傾きかけて居る現代教育の缺陷を呪ふた聲であらうと思はれるが、其叫びは最もなことであると信ずる。成る程、夫等の人々の言ふ通り、文字から得た知識には魂がない、この目で見、この耳で聞き、この手で觸れ、この足で踏み、そして教養ある氣高い人格者の聲咳に接し、身を以て率ゐて行かれる一種の心靈的體驗によつて始めて「教育ある教育」は達成されるのである。特に濁流滔々たる現代社會を救済するには徹頭徹尾徳性の涵養、人格の確立といふ方面を基調とし、標語として進んで行かねばなるまいと思ふ。予が畏友櫻井君はこの意味に於て、實にさうした大きな仕事をして行くのに最も適當なタイプの人で

あつた。君は偉大な人格、該博の知識、絶倫の精力を以て、廢れたるを興し、迷へるを導き、飽く迄自己の聖職を死守し、萬人の進むべき道へと勇ましい指揮刀を振翳されて逝かれたといふ點に於て大なる敬意を拂ふことに躊躇しないものである。

予は偶然にも乏しきを君の後に承け、君の偉業を親しく目撃するの機會を得た。校舎の増築に、或は奉安庫の建設に、或は運動場の整理に、或は防風林の造成に、或は校友會同窓會の指揮監督に、隨處に新機軸を發見することが出来る。そして幾多の教へ子に護られて終焉せられた君の立派な最後は、實に教育者の手本であり、君の日頃の大きな理想から觀て、君にとつても大なる満足であるばかりではなく本縣教育界の爲めにも大きな影を投じて呉れたことを予は切に嬉しく思ふ。

言ふ迄もなく、君の呼吸の数は甚だ少かつた。けれども、殘された其の偉業は實に大した者である。即ち生きては絢爛たる光彩を發輝し、其の歿後は陸離たる光芒を曳くこと恰も慧星の如きものゝあることを觀て、一層其感を深くせざるを得ないのである。

偶々、君の追悼號出版の計畫あるを聞き、欣んで一言卷頭に題して所感を叙ぶると共に、予の女子教育に對する卑見をものして、自己の立場をはつきりさせて置くことも強ち無益の事でないと思ふ。

予は固より先人の跡を踏み、内自ら修め、外校風を發揚すべきは言ふ迄もないが、改めて事新らしく新主義を樹て、新主張を叫ぶ者ではない。飽く迄、世界の教育思潮を其の根幹となし、從來の所謂知識偏重の弊を除き、出來得るだけ情意陶冶の方面に意を注ぎ、一方に於ては女子の自由性を尊み、他方に於てはその共同性をとし、伸ばして行き、新時代に處すべき良妻たり、賢母たり得る素地を作り、晴

れやかに、明るき家庭の創造者たらしめることに努力したいと思ふ。幸にして予が意の存する所を汲みとつて頂けば大なる幸甚である。

發刊に際して

中 川 完 一

今回同窓會誌と校友會誌とを合冊に致しまして櫻井賢文先生の追悼號として發刊することになつたのです。

御承知の通り櫻井先生は足掛け六ヶ年本校に校長として御在職になり同窓會員の方にも可成り澤山の教へ子がえられる事だし、又先生の御葬儀を校葬として取り行ひましたが、その費用は同窓會校友會兩會員の方々の御熱情の溢れとして醸出された關係もありますので其の模様を兩會員全部にお知らせ致したいしさうなれば従つて會誌を別々に作るにしても同一記事になる部分が多くなつて來る關係上、合冊とした方が利得でもあり又記念として却つて意義あることではないかと云ふ職員多數の意見からしてこんなことになつたのです。

然し全然追悼號としてのみ發刊することも經濟上許しませんので校友會同窓會の情況の記事も取り入れて編纂したので多少そこにおかしな點がありますが、その邊は豫め御諒承を願つて置きます。

櫻井先生の御逝去は御家族の方から見ましても、亦學校から見ましても痛ましい事は今更申し上げる迄もなく分り切つた事柄で、御壯年であり男としてもこれからといふところ、今が暫く蓄を持つた位で

これから花が咲き實が結ばれやうとする時でありまして、あの當時の御子様達の御様子を拜見しまして、も全くなき父の悲しさを感ぜられず、只人の出入りて賑やかなのに紛れて居られる様には見えないう顔はない御子様もあつた位で、まだ先生を生かして置きたかつたと思ひます。

けれどもそんな事を幾らくよくと思つたところで最早致し方がないことで、せめてもの事に御遺族の助力によつて御子様達の健やかにまさしく御成育なさることを祈りするより外ありません。

幸にして御遺族の方には御歸郷の上平和にお過しの御様子でありますから御安神下さい。

また學校としては多年教育界に御遺詣の深い木村寅三先生を校長としてお迎へすることが出来ました。吾々一同は新校長の許に力を合せて御計畫半ばにして逝かれた櫻井先生の御遺業を完成したいと期してをる譯であります。

校 葬 記 事

校 葬 の 記

昭和二年七月二十八日午前、三時小名濱客舎に於て突如逝去せられた故櫻井先生の遺骸は、間もなく平町なる寓居に運ばれ、わが警城高等女學校職員どちと先生の遺族方との手によつて、翌二十九日一先づ茶毘に附せられ、こゑて八月二日學校の作法室に於て、愈々校葬による告別式が行はれたのである。この日朝來雲低く私達の涙の凝つて、雨となりさうな天候、眞白な制服につけられた喪章を見ては、坐に涙をそまれるのであつた。午前十一時一同校庭に集合、各係の先生よりそれぞれ御注意を承つてゐる中も常とは違つて、うなだれの中にも異常の緊張味があふれてゐ、又すゝり泣きの聲は、あたりの空氣をふるはしてゐた。十一時四十分、隊伍肅々として校門を出て、故先生宅へと歩を運ぶのであつた。宅前に著いて待つて

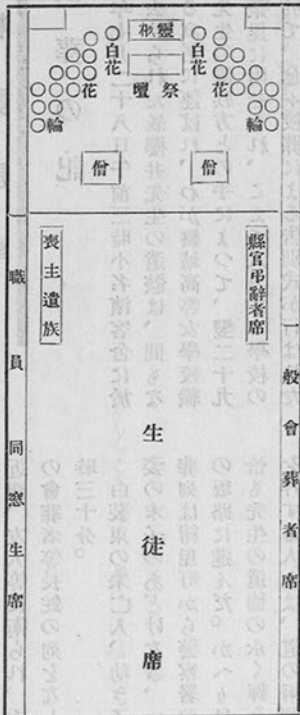
と少時の後、葬列係の方の指圖に従ひ、四年生の一部は花輪を捧げて靈柩の前に並び、靈柩は遺族、近親、友人等に衛られ、次いで七百の生徒、無數の會葬者等長蛇の列をなして進行を始める時に零時三十分。

白装束の未亡人、幼き子女達、とりわけ白無垢姿の末子のあどけなさ、いづれか涙を誘はざる。葬列は紺屋町から警察署前、横越小路を過ぎ、城山の坂路に進んだ。かへり見れば、長き／＼葬列は恰も先生の遺徳の永く輝き残るに似てゐる、靈柩を拜する人々は、道の兩側に山を築き、知るも知らぬも嚴肅な態度に涙ぐんでゐるのであつた。間もなく校門に入り、柩はやがて葬場に安置された。青疊しき詰められ、黒白の幕に飾られた葬場は如何にも莊嚴そのものであつた。金箔の佛具、香爐、燭のかにゆらめき、燭燭の火影もしば／＼まばたき、何事かを語るやうであつた。二時といふに七人の僧侶の口から讀經の聲が洩れた。葬場は水を打つた時のやうにしんとなつて、参列の人々もいと露けく見ゆるのであつたが、中について遺族の

方々の眼には絶えず涙の流れるのが見られた。讀經の聲の間に時々聞えるなみだぶつの聲は、老母堂の肺肝より迸つてわれらの涙をそよめるのであつた。やがて本校職員總代の弔詞を始めとして、次より次へと多數の弔詞が朗讀せられ、参列者一同はそよに涙を催したのであつたが、中についで友人總代の弔詞にはいづれもとどなき泪に袖をうるほしたのであつた。ついで數多き弔電が披

露せられたが、以て先生の御徳の高くみせられたことが推せられる。最後にかたの如く焼香があり、式終るとともに遺骨は嗣子喜文氏に抱かれて、自動車によりて校門を出て佛寺に運ばれたわれらは門外に堵列して謹んで之を送り奉つた。かくてなつかしき櫻井先生、慕ひ奉りし櫻井先生の葬儀が終り、われらは再びその音容に接するの機会を永久に失つたのであつた。

葬場略圖 (作法室及第一、第二裁縫室を充つ)



委員長 中川 完一 副委員長 只野 清

葬場係長 土岐昇 係 鈴木應善、山口彌二郎、叶多らゑ子、松崎マツ子、山崎テル子、猪狩

ツル子、小野ツヤ子

儀式係指揮係

儀式係長 酒井英吉 係 佐藤清、木幡モン

指揮係長 永島磯惣太 係 日野良太郎、菅波セ

キ、平塚ウメ、田村文子、鈴木ミイ

接待係長 山部正勇 係 森運吉、木村ケイ、森

イサミ、皆川マサ、近藤キクヨ、江尻

齋藤トシ子、金成キミ、大和田コト、伊坂ケ

イ、吉田みよ、山崎サト、原八重、佐藤キク、

長 代表 人

員 代表 人

委員 代表 人

親 代表 人

職 代表 人

同 代表 人

校 代表 人

友 代表 人

遺 代表 人

族 代表 人

親 代表 人

戚 代表 人

花 代表 人

弔 代表 人

詞 代表 人

前 代表 人

香 代表 人

供 代表 人

位 代表 人

校葬記事

故磐城高等女學校校長櫻井賢文先生ノ靈前ニ白ス

嗚呼先生ハ圓滿ナル人格ト卓越セル識見トヲ以テ専心生徒教養ノ任ニ當ラレ在職五箇年ノ間ニ

施設セラレタル事業ハ著々効ヲ奏シ而シテツノ
事業タルヤ舊套ヲ破リ女子教育上見ルベキモノ
懋カラザリキ内ニハ三十ノ職員七百餘ノ生徒先
生ヲ中心トシテ悉ク一團トナリ外ニハ父兄ノ信
頼地方人士ノ敬慕亦深ク校風日ニ新ニシテ校連
年ニ盛ナリ先生ノ持論タル體育ノ上ノ知育ノ實
蹟ハ上級學校入學者ノ數ニ於テ各種運動上ノ施
設ニ於テ明ニ現ハレタリ先生年齒猶壯ニシテ百
尺竿頭更ニ歩武ヲ進メントスルノ抱負ヲ有セラ
レタルニ天年ヲ假サズ俄然茲ニ遠逝セラル之ヲ
公ニシテハ本校ノ爲メ乃至本縣教育ノ爲メ誠ニ
痛惜ニ堪ヘズ之ヲ私ニシテハ遺族ノ浩歎甚シキ
モノアリ不肖等日夕先生ノ高風ニ接シソノ慈愛
ニ浴シタル者豈慟哭セザルヲ得ンヤ然リト雖我
等ハ先生ノ遺業ヲ紹ギソノ施設ニ遵ヒ協心戮力
銳意生徒ノ教養ニ當リ益々本校ノ聲譽ヲ揚ゲン
ト期ス冀クハ先生ノ靈安ジテ瞑セラレヨ謹ミテ
弔ス

昭和二年八月二日 職員總代 中川 完一

福島縣立磐城高等女學校

謹ニ申ス 申シマセウ 申シマセウ 申シマセウ
本日君ノ靈前ニ立ツテ君ヲ弔フノ言葉ヲ述ブル
ニ至ルトハ夢想ダモシナイ所デアリマシタ否今
尙夢ノヤウニ思ハレタナリマセウ
七月二十八日ト云フ日ハ如何ナル凶日デアツタ
ラウカ僕ハ出張先福島デ君ガ計ヲ聞イタ時ハ愕
然トシテ異常ノ衝動ニ打タレタノデアリマス小
名濱ニ君ヲ訪スルコトヲ約束シテ出テ行ツタ僕
ニハドウシテ之ガ事實ト思ハレマセウ君ノイッ
モノ温顔ヲ髣髴ト書キナガラ倉皇歸ツテ見レバ
矢張君ハ此ノ世ノ人デハナカツタノデアリマス
何ト果敢ナイ最後デアリマセウ君ハ至誠ノ人デ
アリ温情ニ富ム親切ノ人デアツタ寡黙ニシテ熱
心實行ノ人デアリマシタ君ガ磐城高等女學校長
ニ來任セラレテカラハ校風ノ刷新設備ノ改善内
容ノ充實等著々實蹟ヲ擧ゲラレタノデアアル君ハ
常ニ自ラヲおやぢト呼ンデ居ラレタガ職員生徒
ハ君ヲ慕フコト誠ニ慈父ノ如キモノガアツタノ
デアリマス

昭和二年八月二日 磐城中等學校長 唐 土 齊 治

櫻井君君ト相知ツタノハ大正十一年四月君ハ平
ノ地ニ僕ハ郡山ニ同時ニ高等女學校長ヲ拜命シ
テカラデアル爾來相共ニ携ヘテ施設ヲ語リ經營
ヲ批判シ合ヒ大ニ君ノ指導誘掖ヲ受ケタノデア
ルガ最近磐城中學ニ轉ジテ來タ僕ハ更ニ今後君
ノ援助ニ俟タナケレバナラヌモノガアツタノニ
今ヤ君ハ歸ラヌ旅ニ立タレタノデアアル何ト云フ
残念ナコトデアラウ
君ハ尚秋春ニ富マレ君ノ家庭上ハ勿論縣下中等
教育ノ上ニドウシテモ生キテ居テ貴ハナケレバ
ナラヌ君デアル君逝キシ後ノ老母ノ落膽六人ノ
子女ノ教育ヲ一手ニ引受ケラルハ令閨ノ御心中
更ニ之等ノ人々ヲ遺シテ逝カレタ君ノ心情思ウ
テコトニ至レバ誠ニ同情ノ淚禁ジ得ナイノデア
リマス然シ櫻井君君ハ逝クトモ君ノ功績君ノ感
化ハ永ヘニ朽ツルコトナク君ヲタムヘ君ヲ慕フ
ノデアリマセウ
本日此ノ葬儀ノ盛大ナルモ君ノ在リシ日ノ功績
ヲ物語リ君ノ人格徳望ヲ示スモノデナクテ何デ
アリマセウ

校 葬 記 事

嗚呼君ガ顔容ハ咫尺ニアレドモ幽明已ニ境ヲ異
ニシマス感迫リ復云フトコロヲ知リマセウ在天
ノ靈冀クハ饗ケラレヨ
昭和二年八月二日
君ヲ弔フノ言葉ヲ述ブル
ニ至ルトハ夢想ダモシナイ所デアリマシタ否今
尙夢ノヤウニ思ハレタナリマセウ
七月二十八日ト云フ日ハ如何ナル凶日デアツタ
ラウカ僕ハ出張先福島デ君ガ計ヲ聞イタ時ハ愕
然トシテ異常ノ衝動ニ打タレタノデアリマス小
名濱ニ君ヲ訪スルコトヲ約束シテ出テ行ツタ僕
ニハドウシテ之ガ事實ト思ハレマセウ君ノイッ
モノ温顔ヲ髣髴ト書キナガラ倉皇歸ツテ見レバ
矢張君ハ此ノ世ノ人デハナカツタノデアリマス
何ト果敢ナイ最後デアリマセウ君ハ至誠ノ人デ
アリ温情ニ富ム親切ノ人デアツタ寡黙ニシテ熱
心實行ノ人デアリマシタ君ガ磐城高等女學校長
ニ來任セラレテカラハ校風ノ刷新設備ノ改善内
容ノ充實等著々實蹟ヲ擧ゲラレタノデアアル君ハ
常ニ自ラヲおやぢト呼ンデ居ラレタガ職員生徒
ハ君ヲ慕フコト誠ニ慈父ノ如キモノガアツタノ
デアリマス

昭和二年八月二日 磐城中等學校長 唐 土 齊 治

に堪へないのは多忙な職務の傍、専攻學科の研究を怠らず、伽草子の研究を以てやがて博士論文とする計畫があつたといふ事であり、又女學校長から文學博士是非大成させたいものであり、また然るに今やこの人空し惜しいとも惜しいこととす悲しいとも悲しいこととであり、又六人の子女を遺して逝かれた君の心中を思へば、また涙なきを得せぬし、かし君の精神は多年君が訓育された幾多青年男女の心に永く活きて居ります。君が志を繼ぐ者の必ずあることと信じます。今日君が逝去を弔はんとて來り會したこの多數の人には悉く君が平素の高徳を慕ふ人々であり、又事實に君が積徳のなみ／＼ならぬことを示すものであり、又生徒監督のために出張中に斃れたといふのも教育者の最期として誠にふさはしいものに違ひあり、又せぬ翼くは安らかに眠り給はらんことを。

昭和二年八月二日 福島縣立中等學校長總代 福島縣立安積高等女學校長 松本午次郎

弔 詞

故磐城高等女學校同窓會長櫻井賢文先生のみひつぎの御前に白します。

みまかりませし先生と今幽明境を異にして語らんとは幾度も私達は夢かと思ひ又その幻にあらぬかと疑ひましたけれどもそれは遂にかへし難い現實である事を悲しみます。

先生よこの日は又何といふ悲しい日でありませう行く雲さへ吹く風さへ皆とめどなき私達の涙をさそふばかりであります。日頃御壯健な御姿ばかりを拜した私達は、どうして今かゝる日の來る事を思ひましたらう思へば、まことに測り知れぬは人生のさだめでありましたが、それも長き御いたづきの日とはなく、いたるぬ手ながら御看護申上ぐる事も私達には叶はず、たゞ卒然として御他界なされた事は、そのあまりのはかなさあまりの心残りさと泣くばかりであります。憶へば私達は先生を學びやに迎へ申したのは、はや六年の昔であります。永への平和にはぐまれた私達の學

びやは先生を迎へて又一層の明るさとするこびとをめぐられた私達のすこやかに學びの屋を出て、又慈なき世の道をたどり得るも皆先生の深き御恩を謝して居ります。ことに御慈愛深く御德行高き先生は慈母の如き御教と安らかさとを私達に垂れて居りました。先生を失つたこれからの私達はどんな道を辿り、又今先生のみ胸にいだかれてる教へ子達はどこにそのよるこびを求めて行く事とせう。先生僅に不惑を越ゆるばかりにて幾多の希望と理想とを残してこの世を去り逝かれんとは先生のため世のためにも最もおしまるゝ事であり、又それを思ひこれを思へば私達の胸はたゞふさがるばかりであり、又私達こゝに私達は先生の御教を憶ひ起します。先生は學宇宙を研み識古今に及び夙に流轉の物界を去りて久遠の靈界に悟れる方でありました。故にみまかれる今も尙先生の御精靈はこの世にいまして尙私達教へ子の胸に生き、又先生のなされた御仕事に生きて行く事とせう。だから私達もこれから一層先生の御教訓を守り身を修め世につくす

のが先生の御恩に報ずる一端と思ひます。私達同窓會員も先生の遺された幾多の御仕事の御精神を發揚することに努めます。さらば先生よ永へに御別れを申し上げます。

昭和二年八月二日 磐城高等女學校同窓會總代 金成さみ

弔 辭

人生ニ不可知不可測ノ事アリ突如吾人ノ豫期ニ反シ眞ニ驚愕ヲ禁ジ得ザルモノアルコトハ吾人ノ經驗セザル所ニハ非ズト雖我ガ櫻井副會長ノ逝去ノ如キハ蓋希ナリト云フベシ我等ハ君ノ靈既ニ去リタリトノ悲報ニ接セシモ尙其事ヲ疑ヒテ信ズル能ハズ只切ニ夢寐ノ事象トシテ了ランコトヲ冀ヘリ然レドモ君ノ死ヤ最早現實ナルヲ如何セン嗚呼悲シイ哉恨シキ哉我等兒童研究會同志近時其事業ニ關シ君ト相會スルコト數次君ヤ常ニ慎重周到ナル意見ヲ吐露セラレ克ク會員ヲ満足統制アラシメタリ本會ハ君ノ指導ニヨリテ今後益々發展ヲ期セシニ今ヤ其事遂フノ止ムナキニ至レリ洵ニ遺憾ノ極ミナリ爾今會員相戒

校葬記事

慎シテ研究ヲ積ミ偏ニ君在世ノ意向ニ副ハンコトヲ期セントス
君ハ女子教育家トシテ常ニ熱心劃策ニ努メ校務ノ改善校風ノ刷新殊ニ生徒ノ實力養成ニハ最モ力ヲ致サレ著々其ノ成績ヲ擧ゲラレ見ルベキモノ亦渺カラズ而シテ君ノ熱誠ハ單ニ學校内ニノミ止ラズ進ミテ地方婦人界ノ改善ニ盡サントスル意圖アリ最近ノ如キ余ニ對シテ同窓會其他婦人會ニ於テ其伴ヒ來レル兒童ノタメ適切ナル施設ナクンバ會ノ效果ヲ收ムル能ハザルヲ痛感セラレ之ガ方法ニ關シ意見ヲ求メラレ又具ニ君ノ意見ヲ陳ベラレタルコトアリ之レ蓋シ小事ナルガ如クニシテ實ハ婦人會ノ盛衰消長ニ關スル問題ニシテ常ニ誠意考慮スル人ニアラズンバ想起シ得ザルノ事タリ君ノ事ニ當ルヤ周到懇切之ヲ行フヤ勇剛ナリキ天若シ齡ヲ假サバ婦人界向上ノタメニ大ニ爲スモノアリテ地方教育ノ改善進展ニ貢獻スル所蓋鮮少ナラザリシナランニ今ヤ不幸ニシテ數多教養期ニアル可憐ナル愛兒サヘ遺シ忽然トシテ去リ給ヘリ悲シトモ悲シク眞ニ

遺憾ノ極ミナリ冀クバ我等ノ誠意ヲ享ケ給ヘ

昭和二年八月二日

石城兒童研究會々長 桐谷 文平

弔

辭

昭和二年六月二十八日ノ早曉松嶺悲シキ小名濱灣頭ノ宿舍突如トシテ永遠ノ眠ニ就カレシ櫻井賢文君ノ英靈ニ告グ
願レバ大正十一年君ガ磐城高等女學校長トシテ就任以來其ノ深遠該博ナル蘊蓄ヲ悉クシテ子女ノ教養ニ任ジ嚴格ナル一面極メテ感激的純情ノ所有者トシテ内下僚生徒ノ敬慕ヲ受ケ外父兄ノ信賴ヲ鍾メ拮据經營以テ子女教育ノ刷新改善ニ努メ傍十五日會長トシテ會員相互ノ親和輯睦ヲ圖リ品性ノ陶冶ニ知識ノ向上ニ克ク之ガ誘掖指導ニ力メ常ニ地方一般ノ文教ニ寄與貢獻シタル功績擧ゲテ數フベカラザルモノアリ而モ年齒漸ク不惑ヲ出デソノ經綸抱負一段ノ燃犀圓熟ヲ加ヘ來ラントスル時ニ當リ忽焉トシテ君ノ玉碎ニ逢フハマサニ堪ヘザル悲ニシテマタ國家教育界ノ價フベカラザル一大損失タルヲ失ハズ天人共

ニソノ長逝ヲ悲シム處ナリ今ヤ北邙一片ノ煙トナラントシ君ノ死ハ斯クシテ吾人ニ大ナル悲ヲ殘シ東岱ノ雲深ク君ヲ思慕シテ泣ク君ノ遺孤ヲ念ヒ惻々焉トシテ萬斛ノ淚ヲ禁ジ得ザルモノアリ吁々人生何ゾ涕淚シゲキ

然リト雖モ過去ノ生涯ヲ通ジ一貫シテ正義人道ヲ愆ラズソノ踐ムベキヲ踐ミ行フベキヲ行ヒ終始渾身ノ努力ヲ致シテ國家文教ノ興隆發展ニ資シタル君ノ逝去ハマタ以テ戰場ニ易質シタル光輝アル死ニヨリ永ク名ヲ竹帛ニ垂ルハヲ本懷トスル武人ノ終焉ニ比スベクマタ死シテ餘榮アリト云フベキナリ冀クバ來リ饗ケヨ

昭和二年八月二日

十五日會員 草野 順平

弔

詞

日本赤十字社正社員正六位櫻井賢文君小名濱臨海學校ニ出張中突如トシテ逝カル噫悲シイ哉君資性溫厚ニシテ德望頗ル高ク子女教養ノコトニ從フ事多年現ニ縣立磐城高等女學校長トシテ夙ニ令名アリ將來君ニ俟ツ處ノモノ頗ル大ナルモ

校葬記事

ノアリシニ今ヤ幽明境ヲ異ニス洵ニ哀悼ニ堪ヘズ仍テ茲ニ平町社員一同ヲ代表シ恭シク弔詞ヲ呈ス

昭和二年八月二日

日本赤十字社福島支部

平分区長

伏見

彦衛

弔

詞

縣立磐城高等女學校長櫻井賢文君ノ靈ニ告グ
君ハ石川縣出身東大國文科ヲ出デ前ニ新潟縣立長岡中學校並ニ本縣立會津中學校等ノ教諭ニ歷任シ次デ大正十一年中本校長ニ就任シタリ爾來六ケ年ノ星霜ヲ女子教育ニ心血ヲ注ギ君ノ蘊蓄セル學殖ト崇高ナル人格トヲ以テ幾多ノ才媛ヲ教化シ邦家ニ貢獻シタルノ功績蓋甚大ナルモノアリ偶々同校生小名濱近海ニ水泳ノ練習アリ是ガ監督ニ出張中卒然病發シテ客死スルニ逢フ噫悲イ哉現代ノ教育界ハ君ノ如キ直情ニシテ剛毅篤ニ見ル人材ヲ求ムルヤ切ナリ斯ノ秋ニ當リ君去リテ茶毘一片ノ煙ト化シ再ビ君ノ溫容ニ接スルノ機ヲ失フ痛惜何ゾ堪ヘン今爰ニ校葬ヲ以テ

校 葬 記 事

嚴肅ナル告別式ヲ舉グルニ際シ敢テ敬仰慕ノ
情ヲ叙ベ度ミテ弔詞ヲ呈ス

昭和二年八月二日

石城郡選出縣會議員惣代 井上 茂作

弔 詞

故磐城高等女學校長正六位櫻井賢文先生ノ靈ニ
告グ「生者必滅會者定離」トカヤ先生俄ニ逝去セ
ラル痛惜措ク能ハズ生前ノ尊顏目前ニ彷彿シ感
慨無量只々暗涙ノ滂沱タルヲ覺ユルノミ
先生夙ニ育英ニ志シ學ヲ最高學府ニ修メ業ヲ卒
フルヤ稀有ノ學識ヲ以テ中等學生ノ教導ニ任ジ
到ル處好評ヲ博シ嚆望セララル大正十一年四月磐
城高等女學校長トシテ赴任以來茲ニ六星霜其間
精勵恪勤常ニ天職ニ殉ズルノ意極メテ固ク校ノ
内外ヲ問ハズ銳意改善進歩ニ努メテ毫モ倦マズ
其效蹟ノ甚大ナルニ至リテハ上下一般ノ認ムル
處吾人等モ亦深く感謝セザル可カラザル所ナリ
先生性廉節且ツ高潔人ニ接スルニ温情其言ヲ聞
ク者覺エズシテ枉ヲ正ス夫レ自ラ人ヲ化スルノ
風アリキ故ニ學生ヲ始メ吾人ハ常ニ先生ニ對シ

一四

欽慕渴仰ノ念去ラズ恰モ幼兒ノ慈母ニ於ケルガ
如シ斯ノ如キ眞ノ育英家タリ亦稀ニ見ル名校長
タリ
加フルニ諸種ノ懸案未ダ解決セザルアリテ益々
其手腕ニ待タザル可カラザル今日先生ノ生ヲ奪
フトハ天ノ無情將恨ムベシ嗚呼悲シイ哉
我ガ父兄會ハ先生ノ指導ニ基キ漸ク其域ニ達セ
ントスル際ニ臨ミ先生ト永別セントハ如何デ期
セン今後ハ一層先生ノ遺志ヲ繼承シ以テ有終ノ
美ヲ濟サンコトヲ誓フ茲ニ本會ヲ代表シ惜別ノ
詞ヲ呈ス先生以テ瞑スベク在天ノ靈庶幾クハ亦
來リ享ケヨ

昭和二年八月二日

植田方部父兄會々長

從六位勳五等 齋藤 治尾

弔 詞

本校ハ尋常科第六學年生櫻井文雄ノ父櫻井賢文
氏ノ遠逝ヲ聞キ哀悼ノ情ニ堪ヘズ依テ職員生徒
一同ニ代リ恭シク弔詞ヲ呈ス

昭和二年八月二日

平第一尋常高等小學校長 曾我 直治

弔 詞

日々慈父の如く慕ひした校長先生の御逝去を
これは私達幾百の幼い心への何といふ痛手でご
さいましたでせう校長先生あゝ想へばほんとうに
幸ひそのものとやうな方でした光明は恰も先生
から出づるが如くその御心にふると誰もが幸福
にいひしれぬ豊かな喜びに満たされるのが常だ
つたのでございませうあの幸福がどうしてこれか
ぎり失はれたと信ずることが出来ませうけれど
も矢張八百の子達がこんなにお慕ひする先生の
靈とともに久遠の空に翔り去つた幸福でござい
ます今は常のみさとしとあのなつかしい佛を心
の中にくりかへしつゝ悲壯に奮ひ立つ私とはな
りました先生のおよろこびになるよい子である
事ばかり私達が先生への御恩返してございませ
う今は今は静かな安らかな眠りにお入り下さいま
せ先生の永遠の眠を美しく守るべく私達の心は
より集つて靈をば暖めませう

昭和二年八月二日

磐城高等女學校生徒惣代 吉田 富子

校 葬 記 事

弔 詞

櫻井賢文先生遽ニ逝去セラレマシタ洵ニ痛恨ノ
至リニ堪ヘマセヌ
先生ニハ大正十一年四月常任幹事トシテ十三日
會ノ爲常ニ多大ノ御盡力ヲ賜ツタノデアリマス
殊ニ先生ハ本會ニ一定ノ基本財源ナキヲ憂ヒラ
レマシテ維持會員組織ヲ目論マレ一切ヲ御擔任
下サレテ大正十五年三月遂ニ其目的ヲ達成セラ
レタノデアリマス爾來本會ハ回ヲ重スルゴトニ
隆盛ニ向フノデアリマス之レ偏ニ先生ノ御力ノ
致ス處ニシテ深く感謝スル次第デアリマス將來
我等同人ハ先生ノ遺志ヲ體シ相偕ニ力ヲ戮セ十
三日會本來ノ使命ヲ完ウシ以テ先生在天ノ英靈
ニ酬ユル考デアリマス茲ニ告別ニ臨ミ會員一同
ヲ代表シ虔デ哀悼ノ意ヲ表シマス

昭和二年八月二日

十三日會常任幹事 大嶺 庫

弔 辭

我が畏敬スル先輩ノ靈ヲ送りテ僅ニ數閱月哀愁
ノ涙未ダ乾カザルニ圖ラザリキ今復忽焉トシテ

親愛ナル兄が葬送ニ會セントハ思ヘバ昨日マデハ互ニ手ヲ握リ膝ヲ交ヘテ過去ヲ語り將來ヲ談シタルノ吾ガ友花々月ノソレニ反イテ永ヘニ其ノ温容ニ接スル能ハズ噫殊ニ兄ハ夙ニ最高ノ府ニ學ビ國文ノ造詣最モ深ク公職ノ餘暇研鑽之レ努メ其ノ功愈々大ニ業績將ニ達成セントスルノ時不幸此ノ事ニ遭フ誰カ敬慕哀悼切ニ情ナカラシヤ茲ニ謹ンデ燕言ヲ進メ英靈ヲ弔フ

昭和二年八月二日

石城郡小學校長代表 曾我 直治

弔 詞

謹んで先生の靈に申す先生は年齒漸く四十三而も公職の傍「古事記」の新研究に孜々汲々として居られたことは世間に周知されて居る來春を期し愈々その博士論文を提出する爲め目下起草中と聞いてゐた然るに何事ぞ突如小名濱海頭に於て病魔に襲はれ終に起たず長に現實と別れてしまつた噫

我今茲に先生がすべてに熱誠であつた生前を思ひ偲びて慟哭の限りを竭せど天再び前途有爲の

學究者を戻さぬ私は哀しみの極みを盡せど萬事空である噫私の郷土磐城は何故に先生の尊き魂を奪つたかされど先生の遺された殉教の死は我郷土永遠の教育功績に代へられたのである此偉大な恩は何に誓つて之に酬いよう

昭和二年八月二日

磐城共濟會長 賀澤 忠治

弔 辭

學士會ハ會員文學士櫻井賢文君ノ遠逝ヲ哀悼シ恭シク茲ニ弔詞ヲ呈ス

昭和二年八月二日

學 士 會

本校ハ尋常科第三學年生櫻井須賀ノ父賢文氏ノ遠逝ヲ聞キ哀悼ノ情ニ不堪茲ニ職員生徒一同ヲ代表シ謹ンデ弔詞ヲ述ブ

昭和二年八月二日

平第二尋常高等小學校長 原田 兼次

弔 詞

日本赤十字社福島支部ハ正社員正六位櫻井賢文氏ノ遠逝ヲ聞キ哀悼ノ情ニ堪ヘズ仍テ部内社員

四萬七千有餘人ニ代リ恭シク弔詞ヲ呈ス

昭和二年八月二日

日本赤十字社福島支部長

從四位勳三等 伊東 喜八郎

葬 儀 費 決 算 書

收 入 之 部

一金九百參拾貳圓五拾錢 一般 香 奠
 一金百圓 職員助手給仕香奠
 一金百圓 職員助手給仕遺族へ餞別
 一金五百五圓九拾參錢 同窓會員 香 奠
 一金六百貳拾貳圓四拾錢 生徒香奠校葬費餞別
 一金百五拾圓 校友會 校 葬 費
 計金貳千四百拾圓八拾參錢

支 出 之 部

一金千百參圓六錢 校 葬 費 總 額
 差引殘金千參百七圓七拾七錢 遺 族 ニ 渡 ス



思ひ出の數々

酒 井 英 吉



○我々の敬慕して居る櫻井先生は七月廿八日午前三時突如腦溢血の爲め幽明界を異にして黃泉の路に旅立たれ幾度號哭すとも現實にはゐるまゝぬとなつたのです。生あるものは遂に滅すといふことは吾人のよくいふてゐるところ又急病急死などのことも例のあることですしかしそのあたりその臨終に接した時あまりの變り果てさに一種の人生觀を懷かずに居られなくなり且つ驚愕せざるを得なかつた程です、その報知人の間に知れ渡つた時人々は愕然として色を失ひ噓だらうといふ程でした先生の教へ子で現新潟中學の高木といふ先生などは「デンミタマコトカ」と反問した位又遠い親族の方々も電報を見られてその死因について察し得な

かつたといふ程先生の生なからだは壯健そのものゝ如しといふ風であつたのでした。

七月二十七日のことども

(一)小名濱町内有志訪問 朝から天氣はよかつたのです。今日も水泳に好日和だとな先生は起きられるといはれた。庭球部の方にも御出てにならねばならんてせうしつては町の有志の家をお訪ねになられてはと私が申しましたらそうしよう早速仕度されて八時半頃宿舍を出てすぐ隣家の佐藤町長のお宅、次は小學校を訪ね、西山校長と面談され、次は岡山様、次は中村醫院中村様では上がられてお茶を戴かれ十分許り談ぜられた後から考へて見るとこの日先生のお面色は決して勝れて居られなかつたのです。二十五日見えられと肩が凝る／＼と仰せられて毎夜便丁をはじめ皆にもんで貰つてあられども不思議だといはれたので風邪でせうと軽く申してゐた。こんなことにならぬならこんな時健康問題のことでも出て血壓でも診て頂いたならと氣のつかなかつた自分の甲斐なさを悔んでゐるのです。それから會津高女宿舍、

次は小野縣會議員のお家、水野技藝學校と訪問され歸路小濱消防組頭を訪ね、そして宿舍に歸つたのでした。

(二)珍魚に興ずる宿舍に歸られた先生は水着にかけられた少々寒いからといはれて私の大タオルを肩に掛けて生徒の後を追ふて濱邊へと急がれた。私もその後から急ぎ足で追ひついた築港のところへ來ると大漁だと思えて小鯛だの、海賊だのが一杯小舟で岸につけられ多くの漁夫が之を擔いで市場に上げてゐた。するとお珍らしい下山田氏の勇姿があらはれた先生と、私と、氏と三人との間に一別以來の親しい挨拶が交はされた。生徒は何人……六十三人……今生々した海賊が澤山とれたからお持ちなさい……とどのさり贈られたので突嗟のことゝて入物も無し、そこで先生は折角だからと着てゐたタオルを取つてそれに入れられたそれから傍に一寸した入物に面白い魚があるから見よといふ之は鯛と珍らしい小判頂とであつた。先生は之に興ぜられ例の笑ひを顔に浮められてじつと見つめて居られたが、酒井君之は珍ら

しい面白い魚でないか頭に吸盤があるなんてそして鰭など失せてゐる、之は大魚に喰つゝいて何十里つて旅行するんだ何も苦のない魚さなど、て頂戴していつて菅波さんに標本にして頂き、そして生徒に見せようなどいはいはれ、そこでこれまで頂くこととした途に江尻さんに會ふ、之から當番の生徒と一足先に參つて晝食の仕度といふ魚類を頼んで水邊に急いだ。先生は初級生を入念に指導された……之が先生の一番快とせられてゐたのである。(珍魚は標本にした之を見る度に思ひ出すことであらう)

(三)友人半谷さんと快談 一同は晝食にと宿舍に歸る海賊が菅波先生、江尻さん方の手によつて馬鈴薯とうま／＼しく煮られてゐた、恰度國民新聞支局の半谷さんが來て居られた、之は珍らし先生一流の歡待振りてようこそ入來と喜んで迎へられた、やがて食膳に向はれた日野先生の姪といはるゝ一高生も加はつてゐたので大へん賑かな會食で早速ビールを五本許り皆して頂き、随分上機嫌で食事すませた。先生の御話は二高ストライキ

問題の真相と芥川氏の自殺問題批判等て討議に花が咲いたのであつた。それから別室で先生は半谷さんと色々のお話をされてゐた。私等は始めの程之を聞いてゐたが知らず眠つてしまつた。ふと眼を醒ますと先生も生徒も居らぬ、早や午後二時過ぎである。それから急ぎ仕度して水泳場にと駆けた海邊で目下部爺さんに會ふ曰く今日は魚が市場にさつぱり無いといふ、それは何だといふと校長先生に言ひつけられたんだといふ、先生は半谷さんとゆるりと飲み且つ談ぜられるわけであつたのだがこの前用があるからともぎ取るやうにして歸平せられたのであつた。半谷さんは一生この日のこのことを遺憾とされて居ることとせう。

(四)最後の指導と記念撮影 私が急いで參つた時は先生には淺瀬で初級生を相手に御親切な素振りで一々手を取つて指導されてゐた所であつた。けれども間もなく空がかげつて來て夕寒さへ感ぜられたので一同は水からあがつて山崎先生の命で歸宅することゝなつた。岩の一角を背景として約十人許り永島先生に撮影を頼んで今將にといふとこ

ろであつた。見ると校長先生も先生の長女さんも居る待つて……自分もは入りたいからと急いで私も割り入つた之がまさか最後の寫眞にならんとは……。

(五)生徒に對する眞の愛 先生は全く生徒を可愛いがられたのです。あの大正十四年度の日光旅行の遭難事件の際の先生の御苦心は周知の事です。生徒や卒業生等に對されては眞に御面倒見られました。先生は息子さん幾人あらせられますかと問はれると親爺……今は八百人の子供を持つてゐるがといはれた。御自分の子供は一切奥様に委せて置かれた觀があつた。一意生徒の爲めに多幸を希はれて居られ、校風樹立の外には何物も無かつたのでした。時も二十七日の夕先は宿所へ歸れると今日は一丁御馳走してやるといはれて私、菅波先生、江尻さん、生徒の二三を相手に水着のまゝ鯉の刺身をつくられたのでした。少しでもうまう少しくしても愉快にと常に念頭にあられたのです。一庖丁それが生徒に對する眞の愛の結晶でありましたことは母親がいとし兒の爲めに疲れも見せず

に一針々々と晴衣を縫はれて居る心情と同じであつたのです。土岐君は料理はうまい今年居らないのは寂しいなどいはれ仕事を了へられて一番後にお風呂に入られ、私が山崎先生に御馳走をすゝめて居つた時着がへられて食膳に向はれたのです。六人で五本の酒、決して多量ではありません後から考へるとどうも先生の飲み振りが悪かつたやうでした。我々は先生の幾分の幾つてもよいから學校否生徒に力をそゝぎたいものです。(六)終焉の金言 この酒飲みの時先生は「なぜ新聞などを取つたのだらう。そんなものを見るから芥川さんの死など知り、知つては考へる様になるんだ。こんな所に來てはそんな世の中の出來事からは離れ切つて、そしてナチュラリズムとして、自然そのものにひたつての生活を續けたらいいではないか、それがこゝろいふ所に來て生きるに最もいい生き方だ。そして茲て八日なり、十日なりの日を過して家に歸り柔らかな床に身を横たへて翌朝目ざめた時に、そこに夢からでも醒めたやうなボーッとした氣持を味ふことが出来るのだ。

その時の氣持は何とも言ふことが出来ないものだ家だと思ふと更に責任からのがれて安らかな安心し切つた氣持があるからな。あなた方はまだ若いからだけど一度まあ味つて御覽」その時は私は別に心に止めなかつたのでしたがこの言實に終焉の言たらんとは神ならぬ身の知る由もなかつたのです。鳥の死なんとする時その聲かなし、人の死なんとするやその言よし。先生がこの哲學じみたことを言はれたのは已に死を豫知して居られたのであるか。

(七)水入らずの會合 食膳から退かれた先生は三年生の國語の日課を見て下され、私と永島先生とは二階で童謡など歌つて笑つてゐました。やゝ過ぎて私は海へでも出やうとして行くと後ろの室で先生は卒業生を相手とされて(菅波先生、石阪さん、刈谷さん)親しくお話を交へられて居られた、永島先生もそこに居られてビール二本許りとサイダ三本許りとを飾つて置かれてあつた。實に長閑な水入らずの快なる會合でした。私も之の中に加はりビールを二杯程頂いた日野先生の平素がまことに

悠長であつたのでふと先生は之に氣づかれ自ら眞似られて興じて居られ、今夜に限り非常に爆いて居られた。如何に今夜を愉快に思はれたか。

(八)臨終 酒井先生……酒井先生……と外で日下部爺さんの呼ぶ聲それにつゞいて校長先生が變だといふ。私は何校長先生がとやをら起き裸體のまゝ下駄も穿かず駆けつけた「呼ばれた時の瞬間の直感が腦溢血ではないかと」この夜私が當番で菅波先生や江尻さんは二階に私は下に寢裏座敷には先生と永島先生とが一つ蚊帳にいね傍に日下部便丁がねてゐたのであつた。私は戸口に入らうとした忽ちにしてきこゆる異様の聲……之は正しく溢血であるとしてとつた私は、直ぐに菅波先生を起して中村醫院に駆けさせた。飛び上つて先生の身體を抱くと油汗でべた／＼してゐる、口鼻に顔をあてゑ見たが何だか呼吸は無いらしい思はず校長先生……先生と呼んだが何のお答へもなかつた日下部爺さんも枕元で校長さん／＼と高らかに呼んでゐる。永島先生は左手を心臟のところにあてて右手で手の脈を診たが脈搏は淡れ行く許り駢

も無く呼吸がちつともない、やゝ時間を経ても呼吸らしいものがない、あゝ之は駄目だ。萬事窮すと思はれた體は足の先まで温かであるでも醫者が來られたら何とかならぬものとも限らんとそののみ頼りとしてゐたが、どう考へても覺えない。呼吸が無いんだもの悲しみよりは寧ろなげなく感ぜられ涙などは出ませんでした。直ぐと長女外幾子さんを起して枕頭に侍らせたのであつたが父さん／＼と呼ぶその聲も通じなかつたのでした四圍は寂としてシク／＼と三人のすみ泣の音のみであつた時に午前三時……菅波先生お一人では心もとないと永島先生も駆け出したやゝ過ぎると中村院長さんが駆けつけられたこの場合醫者さんは意外に早く来て下されたのでした。白々と夜は明け初めた。先生のお體はまだ温かである醫者さんは先生の眼珠を診て居られたが駄目だと憂ひのお顔つきて我々を見られた。頼みの綱も切れた哀愁一室に満ち一同の落膽は何と申したらよいかは夜は明け渡つた無邪氣な生徒等の起きる喚きかきこえる(生徒には秘してゐた)今は全く諦めねば

ならないことゝなつた。あまりのことに魂も消える譯であつたが自分が主任役である以上そう力を落してはなるまいと事のすみまては涙を見せまいと傍なる永島先生と約した。

七月二十八日のことども

(一)朝の光景 急事起るや直ちに平のお宅及び學校へ電話及び電報でお知らせした、中村様の御心配で郵便局でも非常に氣の毒に考へすべて特別にお計り下された。午前四時といふに電話が通じたその御好意に對しては今更ながら感謝せずには居られん。夜の白々と明け渡るにつれて先生のお顔がはつきりと判る様になつた。何物のお苦しみもなげに眠るが如くさゝやかな蒲團の上に横はれてある夢かと思へば之は正しく現實である。悲しく涙は自然と滲み出て眞に世の無常を感じた。午前六時半私が待つてゐた奥様始めお子様を乗せた自動車は眼前に止つた。皆様の御心中をお察すると先立つものは涙許り何と申し上げてよいやらそれからお慰め申上げてよいやら、しかし奥様は私に向はれてもう駄目であつたでせう。私は出立の

時覺悟をさめて來たのですと申された。そして涙を固く飲んで居られた御様子で、私はなほ／＼すまないようなつれない様な氣が致しました。長男喜文さんに簡単に逐一話致しましたらぼんやりして居られました。すぐと皆さんは先生の枕元に侍られた頑足ない末の静ちゃん先生を指して「ウー」といふて居られた。それから皆様は一先づ濱邊へ出られた多分奥様は長男様始め皆さんに言ひ聞かせられたこととせう。私は中川先生、永島先生と相計り早速引上げの用意を急ぎ別に菅波先生は生徒を一室に集めて變事の事を知らしめた。知友山崎與三郎様や、藤田様、曾我様、本校の松浦先生、山部先生、田中先生などお出でになられた。中村院長様や、岡山様などの御心配によつて色々のよい工夫が割合に早く出来て、すべて準備が調ふた一方生徒には水泳中止引上げの非常準備を命じ、日野先生、菅波先生は生徒を監し、私等は調へたトラックに乗つて先生のお亡軀を守り家族は一步遅れて自動車で静々と出たのであつた。生徒は皆わつと許りに泣き伏して顔を上げるもの

はなかつた。かくして門口で告別した會津高女、安積高女、白河高女等の水泳中この地に宿泊の先生並に生徒も皆この時送られた。その光景はむしろ悲愴の場面でしたことは女に書けないのです。三里餘の行程平坦或は山道を静かに走つて平の先生郎についたのは午前十一時過ぎであつた。(二)かなしき通夜と茶毘の夜 まだ喪を發しなかつたが變事をさいて吊問の客繼るが如く、一方學校としては職員會議、同窓會議等が開かれ、滿場一致で校葬の儀が成立したのであつた。近親の方は遠し夫々電報で知らせたもの一兩日ならではこちらへ到着なされまいし、夏の熱い時分とて亡軀は時々刻々と變化するのみ、かくてはと思ひましたものですから奥様方と相談して夕暮僧侶の方の見えられるを待つて入棺の式を行ひ、そして先生の御書齋に東面して安置致したのであつた。總て御經はあげられた。職員、同窓生、知友有志の方々と故先生のぬきせし時の事ども話しあつて蕭然な二十八日の通夜を過ごした先生の御靈は何處の空を彷徨してゐいてやら六人の子女を残されて若

死されたのに如何にして安んぜらるゝや夜は白々と明け初めた昨朝の事などまざ／＼と思ひ浮べた時、夢のやうであつて眞とは思はれなかつたのでした。二十九日中は校葬儀のことで多忙に送つた茶毘に附す午後七時の時間は來た日長の夏でも電氣がついた行列で火葬場へと向つた。この夜は曇り日で眞の暗人々の面も見えなかつた。途中蕭々としてかすかにささえる悲しい啜泣の音のみであつた。火葬場の山道は一町許りしかない登り坂であつたが今日に限つて非常に遠く感ぜられた。先生の事とも思ひ浮べると涙が先に立つて幾度か氣を取り直したが、なほ／＼せき込んで來た御棺は遂に竈の中に入れられた火を點ぜられた。南無阿彌陀佛の唱名もあはれに去り難き足を歸路についた一步遅れて庭球部選手の一行が手に／＼花を持つて暗路を冒して急ぎ坂路を上つて來るに遭ふ色々事情を話してやつたが仲々さかず遂に火葬場に進みあはれにも何事かを誓つた様子であつた。

その他の事ども

(一)新發田中學在職中の先生 自分が雪の北國新

發田中學に赴任したのは大正七年一月のことであつた。そして同心町といふところ一寸した素人下宿屋に下宿したのでした。その時向へ側に一戸を構へて居られたのが櫻井先生であつた。先生はその時はこの學校に赴任されて二年一寸餘、學校の方では國語科の主任株舎監長を勤めて居られ第三學年生の級主任であられた。私が先生のことを耳にしたのは非常に左手の方が得意だといふことであつたが宴會などで同席してなる程と思はれた。四月になつて私等は家族全部を集めやはり同心町に住むことゝなつた。之から先生の宅と交際が醸された。私は間もなく父親を喪つたのであつたが先生との親密の度はこの機會から一層加はつたのです。私は間もなく舎監の一人としてぬかれ、同じ鍋の飯を味ふ様になつたのでした。之で先生の御性格が悉皆判つたのです。佐藤與吉郎先生などは其時の上級生であつたが、随分先生に世話を焼かせた事に覺えてゐる。随分先生は寛大でした。そして生徒可愛いて生徒の幸福増進のことより外何も考へて居られなかつた様でした。又先生は無口で

した。當時舎の後庭に三畝許りの畑があつたが、先生は自ら畑を打つて色々の野菜を作られ、この丹誠の収穫物を舎生に御馳走された……之でもいくらか經濟になればなど言はれて喜こんで居られた。それから随分面倒見がよくあらはれた。舎生が病氣でもあるものなら一里もある處を夜でも夜中でも舍に參られて看護されたものです。學資などに窮して居る生徒などあると他の先生の知らぬ間に面倒見られた事もあつた。年功加俸などは皆密かに之に用ゐられた様でした。先生はほんとに謙讓で經驗ある方を尊まれた。國語の先生に當時塾人といはれた久代といふ先生と、早稲田出て造詣深い野本といふ先生と二人あられたが先生はこの兩方を杖とも柱とも頼んで居られて久代先生を主任として推して居られた。先生は誠に淡泊な御性質の方でした。金錢にかけてはなほそうでした。であるから金は一文ももつて居られなかつた。先生と水泳之は離れませんでした。新發田中學に居られた時も毎夏百名程の生徒をつれて藤塚濱といふところに行かれるものでした。ある水泳

宿泊中の事惡戯盛りの生徒は西瓜畑を荒し海岸に持つていつて食べてしまつたのである。明日の晝頃先生は留守居をして會計事務をやつて居られたところ畑主が眞赤になつて怒つて來たのである。温厚な先生は早速金包みを作つて御詫言に出られた生徒はちつともこの由を知らずうまいつたと思つてゐた。先生はすべてのことを握りつぶしにされた。それが他の人より苦勞の多かつた點と思はれる。然るところこのどがいつとはなしに生徒に判つて悪い生徒は眞に恐縮早速自分の不心得を平あやまりに詫つたのであつたが、先生は何せんなことはといふ御態度に至極寛大であつた。この先生はこの生徒あり。教育の極意はこうでなければならぬと思ひます。之等は今なほ挿話としてあの地に残つてゐる。先生の生徒を導かれるに萬事がこうであつたのでした。先生は私と同勤すること三年にして會津中學校に轉ぜられたのであつた。が其時は留任運動さへ起すに至つた程であつた。(二)先生の印象の数々 細かて大きいのは先生、温和で眞の強いのは先生、むそつとして悠々たる

は先生、仕事は急いでならぬとよくいはれた。職員や生徒の出世を我がものゝ如く喜ばれた。静かなところに滑稽なところがあつた。勢力家でも徹夜などされた。趣味豊富何でも一通り精通して居られた。裁縫、料理の如きものまで器用なものでした。美術、音楽（二絃琴）、考古學など明かであつた。専門研究は古事記、日本書紀の如き古學、童話研究を大成せられんとして居られた。方言蒐集など有名、酒も煙草も嗜まれた。態度は實に貴公子見るからに高尚、お心も外面通りなり。決して驕らず粗衣粗服にて間に合せられる。客を迎へらるに眞に歡待どんな方にも眞情を吐露せらる故に先生には敵なし。抱擁力ある先生、先生は頼まれていやだといはれたことなし。慈悲心深き先生自分より先づ人を……。先生の訓話は何時も高遠一種の哲學じみてゐる點が多かつた。御酒は斗酒なほ辭せず、飲めば飲む程愉快となり、話題が多くて夜の更くるを知らずといふ風。御風呂好きで先生どんな忙しい時でもまあ一杯浴びて来るからと實に綺麗好きで、心中の潔白さと相

照す。金錢には殊の外淡泊、何にでも一丁といふ言葉をつけらる。刺身一丁つくるかな、一丁つけようかと。親しき友人を呼ぶに大人といはれる。飲んで上機嫌の時は必ずクマで一掃のクマ節、オバコアの秋田のオバコ節をうたふ先生の銀瓶を思ひ出す。獨逸に憧がれ一度は是非ドイツにといはれてゐた不意に冗談など文學口調で言はれてそれが眞を穿たる。寛大なる御性格、自分の妻を私の子供の母と言はれた。

(三)北陸御視察。當地二三年來の非常の發達には驚かれ申候昨晩は野本氏、小川大入と深更まで話し合ふ故久代大人の御墓に詣て、奥つ城にむかへばそぞろ悲しかりうま酒くみ／＼むかししのびて七月十六日附にて先生からあたよりを受けたこの歌は先生が七月の山形、新潟方面視察の際前々地新發田に着かれて舊情を温められ故人久代先生(新發田中學同職の時國語科の主任)のお墓を訪れられた時の懷舊のお歌で、之が最後のお歌にならんとは、一体死といふものに暗示といふものがあるでせうか。若しもあるとしたらこの御

視察の如きは眞の暗示でせう。

うま酒をひとりさびしくむ

君がかたみの白菊匂ふ

君逝きてはや百日の忌日なり

白菊手向けてさびしく祈る

繪絹などのぶれば君のまぼろしに

思出深く筆はにぶりぬ

涙の三部曲

山口彌一郎

驚愕か 失神か
さうぢやない。

それは冷酷な裁斷である。

危篤の報ではせつた自分であるのに

よもやと！その中に強い頼み 願ひ 祈り

をもつて來た自分であるのに

入口で。先生の宅の入口で。中の様子の冷たいざ

はめきをみた時に

獨りてうなづいた自分なのだ。

涙か。まなこの底にこびりついた涙なのだ。

行列は續く。

教へ子供の行列だ。

残された教へ子供の行列だ。

元氣で毎朝通られた校門であるのに

元氣で温たかに語られた御作法室なのに

生徒の弔詞。

教へ子の可憐な弔詞だ。

限らない涙がにじみ出る。

涙！涙！熱い涙だ。

勝つたよ。

静かな言葉だつたが、よろこびのあふれた言葉だ。

友人に停車場で聞いた知らせだ。

テニスに勝つた。福島で勝つた。

あれ程校長先生の應援された試合だつた。

幾度か破れて先生と共に泣いた試合だつた。

勝つた。

優勝旗！校長室に飾られた優勝旗！

先生のみにぬかついた選手！

言葉があらうか。

涙！涙！これ程涙のこぼれた事がまたとあらうか。

感激の涙か。愛惜の涙か。

あゝ校長先生はいまさないのだ。

(昭和二、一〇、一六)

恩師の思ひ出

佐藤興吉郎

思ひ出せば八年の昔故校長が新發田中學校の舎監長として御活動時代の事です。

インフルエンザ流行のため舍生殆んど枕を並べ全滅の状態の時しも縣下中等學校の聯合發火演習が寄居濱で施行される事になりました。誰しもが睡眠の浅しい前夜でした。その時同室のA君は日頃の経過思はしくなく殊に此の夜は高熱に冒されて危篤の状態でした。

同室のものや小使が氷よ薬よとさわざその事を櫻井先生に告げましたとき先生は「君達は明日疲れるといけんから早うねたまへ、病人は僕が引受

けた」と早まめ／＼して氷碎きにとりかゝられた。それでも誰もがねる様子が無いのをみられてあの特徵ある御聲で叱るやうに「休め！大丈夫だから」と仰言つた御聲が今も耳底に残つてゐる。御自分も明日は演習に御参加の筈なのに先生は黙々として一睡もなしに朝まで看護しつゞけられたのでした。

明けてみれば折悪しくも雨でした。我々は師範學校の校庭についた時櫻井先生の御顔は生色がなかつたガタン／＼ふるへてゐられる。しかしなんと仰言らず黙々としてゐられるのを見たとき自分達はだまつてゐられなかつた。先生昨夜の徹夜がわるかつたんでせう。お休みなさい先生！と躍氣となつて外套を皆から集めて焚火にあたるやうにお勧めしたら先生は「お腹が苦しい」といふのでした。「先生何かわるいものを召しあがつたんですか。」とのぞきこむ生徒の顔は不安に満ち満ちてゐた。「いや何も食へぬ」寝不足は食慾を起させなかつたのです。「先生何かたべて下さい」と用意されたのは冷い御握り生徒の一心は遂に先生にその御飯

を食べました。先生は相變らず蒼白な御顔をしてゐられたがやがて昨夜の疲れに今日の行軍疲れの手傳てまどろまれた。柱に凭りて露營の夢をたどられつゝある師の君の疲れた面持ちを焚火ごしに見たとき腕白盛りであつた我々も涙なしてはゐられませんでした。辛い發火演習中の涙ぐましい思ひ出として又忘れ得ぬ事實として永く自分の脳裡に刻まれて居ます。

誰かは先生を評して「朴訥な尊い實行者だ」とは眞を穿つに近い言葉だ。評だ。眞に先生は實行の人、誠實の人、奥行の深い人、謙讓の人でした。「沈黙の活動」といふ言葉を考へたと仰言つた先生でした。まことに沈黙の活動をあつゞけになつた御生涯でした。自己の現在の境遇に何んの不満も不平もなく献身的に教育のために生徒薫陶のため

に尊い先生の御生涯は献げられたのです。嗚呼七月二十八日午前三時小名濱町の宿舍に最期まで教へ子の事を考へつゞけられた先生は、遂に逝かれたのだ。幾多の生徒に見まもられて静かにねむるが如く逝かれたのだ。老少不常とは申せ

あまりにも急に逝かれし師の君。忘れ得ぬ面影。そして物静かにあの熱のある御態度。何時もにこやかなあの面持ち。凡てが心の奥深く印象づけられた朝に夕に師の君のうつし繪の前にぬかつくとき、たゞ涙ぐみつゝ感慨無量の感にうたれる自分を見出すばかりです。(二二、一〇、一六)

The late Master

O our beloved Master died suddenly.
When we heard his death we trembled
With grief, and wept, wept, bitterly.
Kneeling down the altar we cried loud.

O
Ah! our Master, why did you die
So early, our benefactor, why?
Your family, your friends wait you for.
But, would you leave them for ever?

K. Sato.

思 出

金子たけの

眞紅な夕焼を背に浴びて先生は薪割に餘念がない。寒い西風がビュととうなる。バカッ、さつくりと割れる。今日切りたほされた松が見事に割られて行く。

「骨があるんだ、勿論、たゞは割れない。」と先生は特徴のありな齒をのぞかせて興深かげに私のよりあげた鋏の行方をみつめていらつしやる。「グザッ」見事にはづれて土にくひ入る。そらどうです。仲々うまくゆかないでせう。意地地な自分は二度五度とよりあげる。バカリ、的中、大よるこび。漸く一つ割る。

「どれかしなさい。女には無理だ。諭々如としてまた同じ調子でバカッ、バカリ、ととはじめになる先生。

「あなたもうおそい。お歸り。」かういはれて相變らず御自分は鋏から手をおはなしにならない。何時もあたりが見えぬやうになるまで作業をなすつた。そして決して他の人に強ひなさらず黙々として働く先生の御影は尊いものであつた。

一日毎に整理されてゆく校庭なり、校舎なりを

眺めてはよろこんでいらつしやつた。雨天のときはようピンポンをなさつた。「お父様の玉は随分きつい。お父さん野心をもたれては駄目です。」などいつては心からおもしろく時を過ぎたのも過去だ。

「オヤデ」と自らよばれ八百の生徒の「オヤデ」と任じてゐられた。

「オヤデ」「オヤデ」と仰言るその言葉の蔭にはいひ知れぬ親しみが溢れてゐた。いひ知れぬなつかしさが流れてゐた。「櫻井先生」などおよびしてはどつかしつくりしないところがあつた。

「お父さん」かうおよびしてこそほんとに先生の御人格にふれ得たやうに思ふ。生徒もただだけか親しみどんなにかお慕ひしてゐた先生だ。

関井井嶽に今日も眞赤な夕陽が落ちてゆく。美しい落日だ。あせらずに落ちてゆく太陽だ。落ちてゆく刻々にあたりを眞紅に染めながら……

「あゝしかしもはや「お父様」先生は逝かれたのだ。あまりにあはたしく……」

うつろな目で何時までも何時までも夕陽をながめてゐる自分にはたゞ目の裡のあつくなるのを覚えるばかり。

——一九二七、一〇——

夏休みの一日

一年 加藤愛子

あゝ、思出深い廿八日、私等は悲しい。そして夢の様な知らせを受けた。それは校長先生の死去なさつた事であります。昨日まで私等の手を取つて御熱心に水泳をおしへて下さつた先生は、静かに静かに、あの世へ行かれたとは、夢の様である。昨日のあのおやさしい言葉が身にしみて、頭からはなれない。「又明日しませうね」あゝ其御言葉が最後の言葉であつたのかと思ふと、なんとも言へない感じがします。海の中で、校長先生、山崎先生と、それから、水泳にゐらしやつた諸先生方や、私達も加はつて、鬼事などをした時に先生は、大分ふるへて、顔色は青くいらしたけれど、大へん御元氣ですうつと泳いで行つてはぼつくりと、お顔をお出しになる其の泳は、本當に巧

みなものであつた。其の先生の泳ぎは永久に見る事が出来なくなつてしまつたのですもの。私等の驚きは勿論です。先生はまだ若く前途有望なお身でありながら、何といふ皮肉な因縁でせう。私等の胸は不安がみなぎつて居た。ともかく、先生の居られる宿へ行つて、見ようと思つて別荘を出た。宿に行くともう皆は歸へる仕度をしてゐた。本當にお亡りになつたのだ。私等は、此の時始めてあきらめた。自動車がつくと、校長先生の骸は運ばれた。昔の目にはつゆがやどつてゐた。私の目からも熱いものがぼとぼとつた。おさへることの出来ない涙であつた。その場に居合せた人は皆泣いてゐた。せめても最後の別れにと、骸を拜んだ時はもう自動車の上だつた。白いされて顔がおぼはれて居る。自動車は去つた。はかない運命を乗せて。お父様をお亡くしになつた御子様のいぢらしさ。私は祈つた。「御遺族に幸あるやうに」と。

渚の夕暮

一年 安島ツヤ

眞赤に染めた夕焼雲の間から太陽はバツと光線を波間に投げた。波は金色に輝いた。あたりは静寂で聞えるものは波の音ばかり。波はあまりおだやかでない。物すごい鳴りと共に波の山が今まさに崩れんとした瞬間我もろとも波にまき込まれてしまふやうな気がして總毛立つ。日は西山に没してあたりは薄墨色に暮れて行く。沖を通る船であらう。波上に篝火がポツ／＼と輝いた。波は次第に物すごく鳴り出す。冷やかなすんだ空気が磯の香を持ち顔を撫でたと同時にその景色に酔うて茫然として砂丘に足を投げ出して居る自分を見出した。始めて氣づいてあたりを見ると今にも魔物が出さうな暗がり。我が家と思ふ所のあたりが一つぼんやり光つた。あかり目當に一散に渚を走る。氣を消失した如く自分自ら何處を歩いてゐるかも覺えない。やつと家の門前につく。妹等の大きな笑聲が聞えて來た。その瞬間夢から覺めた様に自分

も微笑した。

校長先生をしのびまつりて

一年 高瀬タニ

秋らしい喜びと希望の總ては失望のどん底に沈んでしまひました。春は四月！入學の喜びに小さい胸を躍らせながら女學生と言ふほまれを荷負ふ事の出來た最初の日講堂に集つた私達に向つて校長先生には澄んだ晴々としたお聲で申された「努力は天才なり」と……………このみ訓を第一歩として日に毎に私達は校長先生の御徳を慕ひ御人格にあらがれてゐたのでございます。それと同時にかうした校長先生をいたゞく事の出來る私達は世にもまれな幸福者と誇りを感謝してゐたのでございませう。それなのにあゝ何んと言ふ運命のいたづらでございませう。七月二十八日の朝校長先生には、はかなくも小名濱の宿舎にあつて客死なされたと言ふ報をきいた時のおどろきと悲しみ!! あゝそれは文字にも文にも表す事が出來ません。日頃から御丈夫で御やさしくゐらせられた先生でしたのに

今かうしてなきみたまを御まつりしやうとは誰が思ひ期した事か？殊に承るところによりますと博士論文とやらも御起稿中であらせられたとか、先生の御心残りは何はかりでございませう。又小さくてお父様を失つたお子供様方のお歎けさ更に今は未亡人として先生亡きあとの忘れがたみを抱きながら朝に夕に涙にくれてゐられるであらう奥様の事共を考へると又新しい涙が頬をぬらします。

私達はひたすらに先生のみたまのやすらかにみ佛の守りの中に静かに御ねむりあそばされん事をのみ祈つて止まないのてでございます。

コスモス

一年 渥美晴子

乙女のくちびるを想はせるやうな花びらしなやかな莖みどりの葉、それ／＼に強い魅力で以つて私の心を引きつけずにはゐかない、可憐なコスモス！ある時は其の葉かげを小蟲のすみかとする優しくそして美しいコスモス！

文苑

母を偲ぶ

一年 吉野美枝子

どことなく氣品のうかゞはれる、その様は古の殿上人を聯想させるに十分だ。丁度去年の今頃だつた。圖書棚の整理の折、みはる様から戴いた一ひらを詩集の間に見えだしたのは——もう色はあせ、香はかすかになつてゐたつけ。あゝ仄かに残る花の香は何を語つたであらう。桔梗、紫苑、をみなへしとり／＼に美しい。けれどもそのどれよりもコスモスが好きな自分である。

「あゝもういやだ、つさらぬ事はかり思ふのいやになつちやうわ。獨り言を言ひながら夜の總ての精に守られながらお勝手に來た。水も精ある物か近くの池で何事かさゝやく如く漣を打つて居た。格子を明ければもう大分遅いらしい邊はしん／＼としづまりかへつて居た。湯殿のまはし戸が「カタツコトコト」と薄氣味の悪い音を立た。おう寒いんだかばかに陰氣な氣味のわるい晩だ。あゝいやだなあと思ひつゝ寢間に近よつた。寢間から

1111

はかすかに小供のいびきより聞えなかつた。なんだか背中が魔物にでもさすられて居る如くひどくひや／＼としておそろしさのあまりどうも動けない。春中が寒い、ふとんを背中に高く重み上げて寒氣立つ身を落着かせた。よつぽど氣がどうかして居る。「寝ようもう寝よう。」といくら思つても眠られなかつた。一時間程立た時少しとろ／＼とした。「美枝子美枝子お母さんです起きなさい、姉ちゃんも居るよ、兄ちゃんも居るよ、綺麗なお所！綺麗なお所！」と呼ぶ「はつ」。白き着物に美しき御光清きお顔には肉身の情がこもつてゐた。私の血はむら／＼と心臓を破るのでした。母！？走馬燈の如く私の頭をかけ過ぎるのでした。

嗚呼！貴女はお母様、お母様！

今のは？今のは夢だつたのか。汗を一杯にぎりしめてゐた。腕はぶる／＼と戦うのでした。姉さん、兄さん懐しの母様！くやしさのあまり涙さへ出なかつた。私も一緒に。けれどうれしかつた。未だかつて見た事のない母様のお顔を見たのでした。

後 悔

一年 吉田 安子

或雨の夜でありました。

私は妹二人と陰氣な家の中でオハジキをして居りました。

「安子マルトモへ行つてゐて。」と勝手から父の聲がします。「はい。」そう返事をしたものゝ面倒

くさい顔をした私は其のまゝオハジキ取を續けました。

「居ないのか安子は返事ばかりして腰が重い」と怒りを帯びた二度目の父の聲にはつとして立上りました。

「だつて明日は試験があるのだから。」

「お前は郵便となると言譯を一番先にするもうお前には頼まない泰子姉ちゃんのかはりに行つてゐて。」

こんな問答が私と父との間に見出されました。泰子とは妹の名前です。いつもよくお使が分るとほめられてゐる妹は愛想よく出て行きました。

私は癪にさはつて癪にさはつてなりません。其のまゝ二階に上り本を開けて見て居りました。

其の中にだん／＼心が落ち着て來ました。同時に後悔といふ二文字がま／＼と胸に浮んで來ます。「あゝあの時行けばよかつたこんな雨の中を妹に歩かせてはすまない。お父さん許して下さい。」と心の中でわびをして泣きました。

雨の中をてく／＼と歩いてゐる妹のいじらしい

姿を想像しながら……。

不安な宵

一年 江尻 ナホ

真赤な夕焼の色もあせて四邊は段々薄暗くなつて來た。庭の草叢からは涼しい虫の音さへ聞えてくる。それなのに未だ電燈はつかなかつた。家の内はぼんやりして真白い物だけが薄明るく見えるだけであつた。唯ゐる／＼の「べろ／＼」と燃え上る火が闇の世の女王様の如くに其の上に掛けてあるなべから出る水蒸氣さへ薄赤く見える。家人は皆不安の色をたゞよはせて誰一人口を開かうとする者もない。やがて臺所にいらつしやつた母が「隣家へ行つてもう一度聞いて來な。」誰に言ふともなく言はれた言葉は森閑とした家の中に響く。「そんなら行つて來るよ。」弟が起つた。「ぐちゃ／＼。」下駄の音。一分！二分！未だ來ない。「ぐちゃ／＼。」漸く弟の顔が現はれた。皆は望に満ちた瞳を輝かせて一齊に返事を待つた。どうだつた。「あのね未だつかないの。」又もとの静けさに返つた。「はつ。」

「おや」と二十の眼が一度に電燈に注がれた。其の後からは續いて喜びの叫びが響く。「ばつ」「あら」又二十の眼がみはられて落膽の聲が洩れた。じつとして座敷に居た弟「あら山火事々々」ととなりたてた。この急の叫びに此所に居た者も彼處に居た者も一齊に「どきどきどき」と足音荒らげて縁へ出た。誠に弟の言ふ如く松の木の間から見える真赤なもの。皆の目はこの珍景にみはられた。そしてめい／＼感想に耽つてゐるのか一口の言葉もない。やがて祖父が「違ふ、あれはお月様だ。」成程言はれて見ればさう見える「おきよかつた。」と元の場所へ散つた。間もなく「ばつ」家人の顔が急に輝やいた。「おきよかつた。」おきよかつた。」家の者揃つて始めて安堵の胸を撫で下した。

夏休み中の一日 便り書く夜

一年 和田 シヅ子

私は見つめた。しつかりとペン持つ手を……兄さんの吹いてゐた尺八の音もいつしかやみ、あたりはひとつそりとして、聞こえるものは、只淋

しい山鳩の鳴き聲のみ。他に聞こえるものとてもない。此の山里の夕、私は暗いランプの下で母への便りを書いてゐた。さら／＼と、ペンの走る音は、いつまでも續く。かうする中に静寂さは益々加はり、しん／＼として夜は更けて行く。私はペン持つ手を、しばし、休めた時、ふと微妙な笛の音が耳に入つた。私は妙に心をひかれて、竊に戸をはづして縁に出て見れば、無数の星は、燦爛として輝き、何處とも知れず、笛の音はりやう／＼として聞こえて来る。見ゆるかぎりの、田の面には、夜露がかかり、さながら銀の玉を、置いたやう……。

此の神秘的な光景に、思はず讃歎の聲をあげた。私は、いつの間にか、縁側に佇み、其の神秘的な光景に見とれてゐた、未だかつて、経験した事のない、感にうたれつ……、霊室の燈が、戸のすき間を洩れて、ぼんやりと見える。

すべてが、安き眠りについた、山里の夜は、平和に静かに、更けて行く。

亡き櫻井先生を追慕す

一年 和田 露子

今や深緑の夏も、酣にならんとする七月二十八日の曉、私達の尊敬措かざる櫻井先生は、海邊の宿の一室で、永劫の眠りにつかれたのでした。あゝ呪はしき日よ、此の日さへなかつたなら、私達は今かうして、悲しい追憶に耽けらずともすんだでせうものを、今は遠い金澤の御郷里にゐてになる御遺族の方も、此の懐しい平の地をお離れにならずともすんだことでせう。あの日十時頃父は歸宅して、先生の御死去を報じて下さいました。其の瞬間どうしてそれを信じられませんでしたらう。つい五日前まであの御健やかな御体を、或は校庭に、或は教室に、御見かけしてゐた先生、その先生がおなくなつたとは私は自分の耳を疑ひました。然しそれが實際と知つた時は餘りの事に茫然として、涙すら出ませんでした。先生はおひまさへあれば校庭の整理をやつてをられました。私達は作業の時間にはいつも、先生の御姿に無言の教訓を

示されたのでした。又先生は細かい所まで氣がつかよく髪の手まで心配して下さいました。今想へば先生にお習ひした最後の日、それは七月二十二日でした。あの日先生は音楽についてお話して下さい、又我が校にも校歌が出来ると、お喜びになつていらしやいました。でも其れも其嬉しさうにお話して下さいた先生は、もう此の世の方ではないんですもの、ほんとに悲しう御座います。私は八月二日の日吉田さん及び他の方々のお読みになつた弔詞を、一種云ひ得ぬ想ひで聞いて居ました。亡き先生はどういふお心持で、お聞き遊ばしたことでせう。私達生徒は今でも先生の御逝去が信じられません。でも朝禮の時御姿が見えぬので悲しいあきらめを感じてゐます。

もはや秋も深くなります。草はうち枯れ、木の葉もはら／＼と散つてゆきます。

私の妹

一年 木村 フミ子

ハナちゃん私は私より四番目の妹で今年五つです。

私はハナちゃんを妹達の中で一番好きです。ハナちゃんも私を一番好きやうです。寝るにも起きるにも一緒です。ハナちゃんは本當に従順な子で、そして恥しがりやです。父や母の言ふ事にさからうやうなことはありません。四つ頃は、私達が何かしたい遊びがあつて彼女に話すと、一も二もなく「いゝな／＼」と賛意を表します。それがとても可愛いのです。それでも自分の欲する事となると、誰がなんともだとしても決してきかず、ねち／＼と遂に自分の思ふ事を通します。私はそれも可愛ゆう御座います。

末の妹の友子の方がさかなくて時々里親と来ては、へうさんに犬の泣真似などして四つ這になつて追ひかけます。ハナちゃんも恥しがつて箆筒の蔭などに隠れてしまひます。

ハナちゃんも小さい時から唱歌が大好きで鳴物ならばむづかしいのでも、自然に調子をとつてゐます。昨日もきめつとして、隅の方でうつ伏して泣いて居りました時、蓄音器を掛けましたら、うつ伏しながら拍子をとつて居りました。

ハナちゃんも痛いと言ふのが嫌ひになりました。それは彼女が咽喉が悪くて母と寝て居るところを突然注射された事がありました。それからほんな時にも、又此の間のやうに庖丁で指を切つた時さへも「ハアたん痛くないわ、もうしないわ。」と自分から先に申します。あの時から、男の客様を見ると「合津先生け」と隠れてしまひます。母とも寝なくなりました。母の懷にあつて安心しきつてゐたところを思ひ掛けなく、痛い思ひをしたのが忘れられないのでせう。

私は、私の愛する妹が、これからも益々忍耐強く従順にしかも正しく伸び／＼と育ちますやうに願つて居ります。

夕立

一年 根本 テル

向ふの家の軒先を赤々と照して居た夕日は、波形の西山へ沈んでしまつたが、晝の暑さが残つたか蒸苦しい様な氣がする。風音もせず庭の木の葉も動かず、大空ばかりがあらはてたやうに走つて行

く。やがて俄かに風が吹きあろして来た。木々の蟬は鳴きやみ、蜘蛛はちぢまつて巢の真中にぶらさがる。雷の音があし出すやうに南から西へととなり渡つて行く。いなびかりが激しく閃き雷の音はだん／＼と近くなつて来ると、銀の矢のやうな雨が模様様に飛んで来て、雨戸を立てる間もなく縁をうち屋根を打つ。雨の音、雷の音、暫くは其の外の聲は何も聞えない。古い屋根の其處此處からは、雨がもり出した。それ鹽よ、それ桶よと呼ぶ聲、笑ふ聲、やかましく臺所の板の間に足音が騒がしい。雨が大分小降りになつたが、縁先の手拭ひかけはまだだ／＼と窓を打つて居る。濕つた障子の紙は風の出入する毎にばたり／＼となつて居る。雨が全くはれた。窓を明ければ、木々の青葉も屋根の瓦も見限りのものは皆さつぱりして居る。蜘蛛は巢をつくり始め、蟬の聲も又聞え始めた。庭は掃いた様に綺麗である。村の空には夕食炊ぐ煙がスーと北へ流れて行く。初夏の生温い風が若葉の上を渡つて吹いて来る。其の度にほつれ毛がふ／＼と顔を馴てる。お隣の子供等が棒

切れを差上げながら「夕焼小焼明日天氣になあれ」と大聲に歌ひ續けて居る。手拭ひを姉さんかむりにした娘、鍬をかついだ爺さん、一日の稼を終へて疲れた足取て家路を急ぐ。何時しか美しい色の夕焼も消え失せて、淡白い半月が空にかゝる頃ゴウ／＼と静けき夕べの空氣を揺つて、上りの貨物列車が黒い煙を緑の濃い杉の森に残して、村を通り過ぎる。次第に薄れ行く煙に見取れて居ると、バツト電燈が一齊についた。

秋の或一夜

一年 澤井 良子

午後から降り出したしぐれに、路はもうすつかりぬかつてゐる。自動車や自轉車はどろをはねかへしながらかなたへさつた。路行く人は皆いそがしうだ。闇がせまつて来る。電燈がばつとついた。私は窓にもたれてそれらの景色に見とれてゐた。ふと、空を見上げた。灰色につままれてる中から陰々としきりに雨は落ちてゐる。さつと一盞の風がふいて私のほかに雨があたる。その時、

六時をしらせるお城山の鐘の音が韻々と、降りそそぐ雨の間をぬつて、静かに／＼になりひびいて来たほんとにさびしい晩でした。私は、尋常五年生になつたばかりの、まだうすら寒い春の或日、大好の陸子さんとおわかれしなければならなかつたのです。そのおわかれする日に、私は、學校からおひまをいたゞいて、二三人の友達と一緒に、見送りに行きました。もうブラットホームには澤山の見送人が来てゐて、陸子さんのお父さんと、色々にお話していらつしやいます。私は陸子さんに、二三人の友達と、おたよりを下さいね。御機嫌ようなどいひながら、とう／＼かなしいおわかれをいたしました。その後、度々お手紙を下さいました。今はもうそのおたよりもないのです。そんなことを考へてゐるうちに、雨は、一しきり強く降り出して、闇はますます／＼こくなつて来ました。

母待つ朝

一年 北郷 ヲス

「リリリオン」の音に楽しい夢路をたどつて居た兩の瞳は同時にぼつと見開られた。四邊は急にざわめき渡りそして寄宿舎の日曜日の朝は次第々々に明けはなれて行く。
「あゝそうだった今日は母が来る筈の嬉しい嬉しい日だったわけ。」
そう思ふ瞬間私はもう眠い目をこすりもせず、がばとふとんの上に起き上つて居た。
腕に巻いてある小さな時計を見るとまだ五時を一寸廻つた許りである。
「まだ早いんだが。」そう思ひながらも氣がせいして仕方なく立ち上つてがら／＼と雨戸を繰ると大空は高く／＼コバルト色に澄んで晴々とした朝の大氣に満ち満ちて居る。時折うすら寒い秋の朝風が面をかすめる。其の度に「ざわ／＼」と言ひ知れぬ寒さを感じた。
その後幾時間を経た事でせう。何でも随分長い長い時間を過した様に思はれるが。
其の時であるバタ／＼とスリッパで走る音がし

て「北郷さん面會に——」と叫ぶ聲が強く鼓膜を射た。玄關へ向つて進む足どりも次第に早めになつて行く。

久し振りで顔を合はせる母の笑顔を胸の中に思ひ浮べながら……………

秋の夜

一年 清 ナホ

鉛筆取る手を休めてぼんやり考へこんでしまつた。外は静かたまたに天井のねづみがさわ／＼ばかりて何の音もしない。

遠くて犬の遠吠が聞える。ふと考へて見ると弟が死んでからもう三年餘過ぎてゐるであらう思へば夢の様だつた。

東京の病院から歸つて来た時はまるで半死の状態ていくら呼んでも返事さへしないで静に目をとぢてゐた。私はこれまで考へると思はず涙ぐんだ。それから一週間ばかりは不安のうちに事なくすぎた。ある夜女中がとんできて「あゝちやんがあぶないから」といつた。

文苑

私達はどんなに驚いた事だつたらう。いそいで弟のそばにとんでゐつて見ればもうだん／＼と冷たくなつて行くのであつた。私はわつとうつぶしてしまつた。お母さんも泣いた、お父さんも手の甲で涙をぬぐつてゐた。兄さんや姉さんは隣室へとびこんでしまつた。

その時のありさまが目により／＼と残つてゐる。ぼんやりそんな事を考へてゐると後に人のけはいがしたのでふりむくとお母さんが立つてゐて「もう寝たらどうだい。」と云つた。私は「あゝそうだろうねよう。」と獨言をいひながら本や筆入をかたづけて居ると十時をつげる鐘が静かな夜をやぶつて聞えて來た。

嬉しかつた事

一年 鯨岡 孝子

「さうだ、もう『少女の友』きたらうな。」かうつぶやきながら立上つた。
道々「今日のは懸賞の當選者が發表になつてゐるのだな。」こんな事を考へながら歩いて行つた。

本屋へ着くなり「御免なさい。」ともいはないでく
る。と本の置いてある所を見廻した。キン
グ、少女俱樂部、少年俱樂部、少女の友こゝまで
私の目は、はしつていつてびたつと止つた。「あゝ
あつたうれしい！」と私はもう少して口にする所
だつた。いきなりつかんで、向ふの方にゐた番頭
さんにはなるなり本屋を飛び出した。私の心は
あせつてゐる。

家へ着くのが待ちきれず途中で「バラ」
と本の頁を繰つて當選者發表の所を開いた。福島
縣々々と夢中でさがしやつと見附かつた。「パス
したかどうか。」と心配な心をぬさへ大きな目を一
そう大きくしてじつと見つめた。

その眼、鯨という字に續いて岡孝子といふ文字が目に入つた。「うまいっ―あつたあつたしかも一等だ。」と心の中で叫んだ。今まで投書した中初めての當選しかも一等なので私の心の中は嬉しくて一ぱいだつた。途中で友達にあつた。あのね懸賞あたつたの。」といつたなり走り出したので、皆んななにがなにやらわからないやうな顔をし

て後を見送くつてゐた。これはあとで想像したこ
とだけだ。

ほんたうにあの時はいれしくて、心の中は
ばいだつたのだもの。

家へかへつてからもいつもは直に續き物を讀み出すのだがあの時は鯨岡孝子と一等といふ字を眺めてはにつこり／＼してゐた。

今になつてどのくらゐ嬉しかつたのだらうと想像のつかぬ程あの時は嬉しかつたのだものほんとうに……。

七月二十六日日誌

櫻井外幾子

「ドッッ」と寄せ返す波の音に夢路を破られたボン／＼と四時を告ぐる時計の音が私達を起きよと言はぬばかりに私の耳に響いた。寝返りを打つ体もびつしよりと汗ばんで居る。どうせ一舉に起き様と思ひバツト床の上に起き上つた。寝巻を着換へて海へと向つた。今は雨上りと見えて砂の上は濡れて居る。その中を私達は一步步々波

打際に近づいて行く。

鯉船が二三艘、他の船が五六艘青々として居る。水平線の邊を矢の様に走つて居る。空と水とが互に相接して居る。「ドドドツ」と打ち返す波は朝日に輝いて黄色の波だ。私達はボチャ／＼と入つて行つて蛤を取り始めた。面白いやうにコロリ／＼と出て来る。十位取つて合宿所に歸つた。空もスツカリ晴れて皆はせつせとお炊事に精を出して居る。

晝寝の時間に皆は寝るか本を読むかする。私は本を読んで過した。私が可哀そうな所を読んで居る時「あんた泣いて居るのね。」と言はれて見ると本は涙に濡れて居た。

午後どうしても横泳ぎを覚えなければならぬと覺悟して行つたが浮くは浮くがどうしても満足に泳げずに本當に惜しかつた。

夕方まあちゃんと外出した。寢床に入つてから鼻をつまみ、てはつと目が醒めた。菅波先生とまあちゃんと大坪さんが笑つて居る。私が泳ぎの様なダンスをしたのだそうだ。

涙は續く

二年 鶉沼キク斗

赤、紫……灰色……刻々に變り行く空に向ふの山は淡い輪廓を残して靜かに夢路を辿つてゐる。陰曆十四日の月は沖天にかゝつて、いよ／＼牙を木々の影は班々として庭に憩うてゐる。讀書に飽いた私は、何物かに引きつけられる様に縁へ出た。取り残された机には第十二號の校友會誌の何ページかぞ繰られて、燈下に小さな活字が悲しく印されてゐる。

ドドッド……ドッ眞砂を洗ふ波は淋しさに
く私を限りない悲しみの淵に誘ふ。

お！校長先生、校長先生は逝かれた。

あの寄せては返す大波小波の邊のかり宿に、永

へに歸りまされぬ人となられた先生。

私達は先生の、み優しいお言葉をどんなにお慕ひしてゐることゝ御座いませう……………。

併し、「生さる此の世。」ではどうしても再び戴けない先生の御言葉……………」。

夜露に濡れながらコロ／＼とされ／＼に消入るばかりに鳴く虫の調は、こみ上げてくる私の悲しさを一層唆つて、私の心は千々に亂れ、鼓膜の底がジ／＼と熱くなつて滲み出た涙はハラ／＼と止め度もなく頬を傳はる。

月より流れ来る風は、颯と庭に眠る樹影を靡かせ、葉末よりは月を宿した白玉が、月光おどる庭にチラ／＼とこぼれて、微かに／＼吸り泣いてゐる。

哀愁の思出

二年 益弘 花子

美しく色どつた、夕やけの名残に、薄く細く、山際に棚引いた空を、あどけない幼な子は紅葉の様な小さな手を叩いて、さも嬉しげに成らぬ歌を口吟んで跳ね廻つてゐた。

夕食すんで氣なぐさみに、庭に出た私は、ホロ／＼と淋しい虫の音に夢見る様な氣持で虫と露との間に佇んだ。

じつと聞いてゐると心の隅まで透徹る様な、

その音。酔えるが如きその音。

私は、何時しか、ありし日の櫻井校長先生の、御懐かしき思ひ出に歩を入れてゐた。

お晝休みには、かならず鐵を肩にかけて竹のお手入などをなされて、疲れた後などは、きつと、鐵によりかゝつて、若き先生方や、生徒達が思ひ／＼の運動に嬉々として、楽しく遊んで居る様子を慈愛に満ちた、御顔を微笑まれながら、何時も／＼眺めてゐられたのであつた。

かく思ふと急に臉が熱くなつて恥づかしい程涙が頬を傳はつた。

ふと我にかへると流れる様な虫の音は、はたとやんで、白萩の葉末に宿る露の玉は、ほろ／＼と地に落ちた。

いつしか薄墨色に色彩られた四邊は一段と哀愁の佗しさを増した。

白萩

二年 中村 盛子

忍びやかに夕暮はせまり、沈靜な空氣は淡く匂

ひ渡るやうに、玉蟲色の薄絹にひろがつて、彼方の地平線に沈み行く日輪の姿をほんのりと包んで行つた。

つめたい秋風に白露を宿した萩の花が、はらはらと散つて、うす甘い香りが、す／＼と流れた。

青白いまでに純白な花は、夕霧の中に柔く曲線を形づくつて居た。

渚に波のむらがるやうに咲きそろつた中から清らかな香りは優しくこぼれて、人の眠を誘ふやうにも、靜かに涙をさそう様にも——仄な匂を感じる。

黄昏の風に足下の小草は、さや／＼と、さ／＼と、さ／＼と居る。

秋の夜の深み行くにつれて、悲しい思ひ出は強く／＼胸にひらめいて来る。

あ／＼なつかしくも寂しき此の思ひ出——死の蔭に眠れる櫻井先生の其の儼！

あの御やさしかつた校長先生は、夏草の茂る七月——先生は櫻ヶ丘に八百の少女を残して、永遠に歸らぬ人となられたのだつた。

想へば、ほんとに、七月二十三日の終業式の日、壇上にお立ちになつたのが先生の最後の御姿であつたらうとは——。

夏來れば緑したる青葉は此の學び舎を訪れるであらう。しかし遠く去られた師の君の、おなつかしい面影を再び此の學び舎に——それは、幾度夏はめぐり來るとも、永久に空しき願ひでせうものを——。

鷗飛ぶ日

二年 石坂 聰子

夏の日が始まりました。

赤々と輝ける太陽も恵に満ちた光を下界に浴びせた。木々の色もいや増しに濃く、其の美姿を水の面に投げた時樹々の色は、私等に、初夏らしい感じを一層與へて呉れました。

あ／＼、此の清々しい時、どうしてあの悲しい出来事の起るのを豫想した人があつたらう、神ならぬ身のどうしてそれを知ることが出来やう。

忘れもしないあの日、それは何と呪はしい日て

あつたのだらう。其の日は良い日で、海の水は碧々として水平線がくつきりと際立つて見え、空には點々とちぎれ雲さへあつて、其の蒼い空に身も軽々と舞ひ上り、或は波のうねりの間にふわりと身を憩ひ、魅惑の眼を見張らせた鷗さへゐたのでした。

先生は大層な御元氣で始めての海中の鬼ごっこに潜り等さへなさつたのでした。そして夕飯には楽しく打語らひながら、先生の御手によつたお刺身に舌鼓をうち、間もなく私等は、平和な夢路へと就いたのでした。

けれども、どうしてそれを平和な眠と云ひ切る事が出来やう。犬の遠吠えに目を見張り、又慌しい人の呼聲に目を覺した私は、何となく恐ろしさに胸の高なりを覺えた。

そして何も知らずに静な野を立てゑゐる皆の姿（階下）を見やりながら、眞暗な庭に下りたつた。胸は一層早まり、頭の中まで込み込んでくる様な感じがした。でもやつとお部屋の入りを覗き込んだ。そして何かを認めやうとつとめなければならぬ。

ねぼけた目には何もうつらなかつた。唯空には星が淋しく瞬きながら、薄い光を投げ、浪の岸邊に戯れる音が耳につくばかり。私はほつとして、又蚊張の中へもどつた。

翌る朝、皆の心は何となく不安だつたが一人として先生の大事を知るものはなかつた。私はまだ先生は瀕死の状態であるのを聞き、ひたすらに其の御回復を祈つた。

けれども、天はそれを許しては下さらなかつた。昨日まで慈父と仰ぎしたつてゐた先生の御聲は、永遠に下界の空氣を振はすことがなくなつたのだ。あゝ、嘆いても／＼とりかへしはつかない。

もうあの忌はしい日から二ヶ月以上にもなるのだ。

今日の日も、もう終りを告げやうとして、向ふの空が紅、紫、灰色と刻々に變りながら、夜の帷はあろされました。

空には寶石を鑲めたやうな星がいつぱい瞬きをしてゐる。あの中にもきつと、先生の御魂の星があるのだ。先生は未永く私等をお守り下さるのだ。

う。

前栽の木の葉が夜露に月の光を浴びて靜に揺れてゐる。

ほ　ほ　ふ　み

二年　鈴木テル子

夕やけこやけて日が暮れる

山のお寺の鐘が鳴る

お手々つないで皆かへろ

五つ位な子供が手をつないで細路へきえて行つた。

美しい夕やけに色どられた空に金色に光る稻の實がさら／＼と重げに夕風に吹かれて夕やけに向つて微笑むてゐる。

私はうつとりとして思ひに耽つた。何時もにこやかであいてになつた故先生の匂がすうつと眼の前に立になつて微笑まれた。面影――

それは丁度私達の地理の時間の時先生が教室をお遊びになつて五號室の方から戻つてお出でになつて私達の方をお向きになつて微笑されたお姿――

が幻となつて私の眼前にお立になつた。

夕やけは猶も赤く／＼輝いて今日も靜に暮れやうとしてゐる。

秋は來つれど

二年　山本徳子

薄の穂の白波のうねりに赤蜻蛉の群が飛び交ふ邊、デリケートな秋風の肌に觸るゝ頃になつても、櫻ヶ丘に學ぶ八百の少女達の胸の傷手はまだ消えやらない。

校舎内の總てのもの、校庭の北隅の防風林、テニスコートなど、見るにつけても、少女達の胸には、若くして逝かれた、校長先生の傍が、幻のやうに浮んで心から、悼しの情に堪へないのであつた。――去年の今頃は、いかにも健康に在して、群れ集ふ少女達を相手に、元氣でお過しになつたのに、今は、遠い／＼泉下に永久にお眠り遊ばしていらつしやる。

が、思ひもかけぬ御逝去にショックを受けた少女達は悼んで止まなかつた。

あゝ、小鳥よ、風よ、蟲の音よ、過ぐる日と同様に――少女達の悲しみをも知らず、主なき學び舎を訪れて少女達の暖い息がはりに觸れたが、お前達を喜んでは迎へて呉れなかつたらう、そして悲しい、傷しい瞳でお前達を見つめたであつたらう。

哀愁の涙

ゆら／＼と蠟燭の火が風に煽られる。
細く／＼幾筋ものお線香の煙がスーッと天井に消えて行く。

白い布に被はれた顔。

つと、どなたかの手で白布は取られた。

あゝ、目前に見る先生の死顔。

神々しいまでに青白い御顔。

私はこみあげてくる涙を噛みしめて、そつと顔をそむけた。

これがあの御丈夫だった先生だらうかしら。

あの優しかつた先生だらうかしら。

こけた頬、紫色に變つた唇。

清い祈りを

其の御口からは、もう決して決してあの力のあ
る落ちついた言葉は漏れぬのだ。
あまりにお傷しい御姿。
四日ばかり前のにやかな先生。
あのやさしい先生の御魂は何處を彷徨うて居ら
れるのだらう。
授業時間の時。朝禮の時。いつも微笑んで私達
を導いて下さつた先生は今ほもう語らぬ人となら
れたのか。
愉快に勇んで行かれたであらう、あの水泳へも
お歸りは何といふお變りかた。
皆の涙に送られて永遠に覺めぬ永い／＼眠りに
つかれやうとは、誰が豫想し得られよう。
追憶より覺めた私の眼に純白の水蓮の花が物淋
しげに寫つた。

二年 桐谷まさ子

緑滴る校庭の墨染の櫻もはた／＼と打寄せる秋
風に其の綠蔭もホロ／＼とこぼれる許り……。

赫々たる炎熱の空にひねもす蟬の恣に聲を絞つ
て居た頃、一年前から一小さな胸ををどらせて居
た私達の本望の日はグリーンのカーテンを押し上
げる様に訪れました。

其の日は本當に何と幸ある様な又は不運の様な
日であつたのでせう。お友達に一足おくれた私は
今日こそはと思つた天氣に雨上りの道をどんより
曇つた四邊を思ひやりながら白い洋傘にバスケッ
トをさげ如何にも旅行気分になつてホームに歩み
を寄せた時、小さつぱりした鼠色の洋服、さも配
合のよいネクタイを袴の間からのぞかせて優しく
／＼ほゝ笑まれた先生は今更言ふまでもなく櫻ヶ
丘の慈父校長先生でございました。

先生もやはり私達と同じやうに楽しい我が家と
も言はまほしい濱邊の臨海學校に向はせらるゝ時
でした。

濱邊の景色……、本當に美しき大海……。
月明き濱邊にザブリ又ザブリと大波小波は絶え
ず千萬年も變らない天然の美を奏してゐました。
波を洗ふた涼しい濱風は頬をかすめて山の彼方に

吹き去りました。
ふと、我に歸つて振りむいた時、皆の足跡は判
然と月光に輝いて居りました。そして進む歩みと
共に誰の口からも次から次へと晴れやかな天使の
様な笑がこぼれるのでした。
明くれば一點の雲もなさ純蒼なピロードに蔽は
れたコバルトの空、月見草のほの匂ふ砂丘に泡と
碎ける小波と戯れ、銀砂の様な廣やかな濱邊をサ
ク／＼と潔よく波靜かな築港内へと急ぐのでした
波と鷗の囁きも聞えさうな大海原に、白熱化し
た銀砂の上に始終餘念なく御指導下さいませし師
の君は恐ろしき運命の手の偉大な力にもはや遠い
／＼天國に逝きませしを櫻ヶ丘に群れ學ぶ八百の
乙女は「先生……御健やかにお眠り遊ばしませ。」と
小さき胸に清い祈をささげて居ります。
淡い黄昏の帳は山越え谷を満たし滑るが如く綠
蔭の巷に流れて幻の様な人影が暗闇の中に吸ひ込
まれて行く時、千草にすだく蟲の音の悲哀の調は
いつしか私達を其の中に浸らせて堪へきれない悲
しみの淵に沈ませて行くことを知りました。

たそがれの思ひ

二年 箱崎 新徳

釣瓶おとしの秋の日とやら、傾きかけた陽は忽ち
に落ち込んでしまつた。あとには、オレンジ色の
雲が一しきり華やかに燃え盛つた火の海も、や
がて薄れてビワ色になつた。そこから遙か東の果
まで、少しのむらもなく美しく刷かれた空。――
清浄な天國の帷の様に思はれてならぬ。叢の中に
すだく蟋蟀も、何かしら物思ひに吸ひ込む様に、
私には響いて来る。

七月二十八日、永遠に美しい國へと逝きませし校長先生。人の命の果敢なきを、餘りにはつきりと思はせられ、只々胸の霽さのみ高なる許りだつた。嘆いても、わめいても、八百の乙女の崇敬の目標として仰いだ師の君の御魂は、静寂な彼方に在すのだ。よく靜かな口調でお教へ下された御聲が、今更に神の御聲の如く懐かしまれる。先生が逝かれても私達八百の乙女の魂には、何時でも／＼生きていらつしやる。そして、私は思ひ出す毎に、

ようと決して御見えにならないのだ。

かう思ふと、涙はあふれ出る。

「そりやち優しい先生だつたわ。」と、皆んな後に残る悲しい話……………。

一年間は何んと早く過ぎたんだらう……………。

でも私達は幸福。先生のお優しい温い御手の許に一年間育つたと思ふとほんとに幸福だつた。順序もなく先生の御姿が偲ばれる。

先生はいつも笑つておられた。

水着にタホルをちよつとかけて誰かと語らつて
渚を歩いて居られた。その後から二三人で笑つて
ついて行つた事もあつた。今更のやうに思ひうか
べば皆んな悲しい。

ボツと煙る眼には……………いつかは、歟を持つた御姿や壇に御上りになる師の御姿又はニツコリ笑まれる御顔……………。

涙と共に強くしぼり上げられる。

机上のコップがペン先の動くにつれて細かく揺れて居る。

うるんだ目を上げれば暗い夜に咲く秋花草は鈴

何時でも私達の心に師の君の御魂が甦つて来る。
今日は御彼岸。若し悼しき御逝去なくば、二日にわたる縣下の乙女達のテニス大會に、あのなごやかな御顔に笑みを湛へられて、何かと御世話下されたであらうに……。などミいろの追想に浸つた。そして、最後に師の御魂に永遠に幸あるやうに、と心から願つた。

秋の夜に

二年 中村俊子

静かな秋の夜……机に向へば過古の思出がボ
ーッと机上に浮ぶ。

海！海！かう叫べば夏を連想し、夏を思へば悲しい。秋の虫が叢の中になさかはす音。すまの野にゆれ、語り合つてゐる時……………。

それからそれへと心は小車の如うにめぐつて、夏の夢はさめたけれど、ひよつとすれば夏の眞夢は呼び起される。この淋しい秋に……。

秋深み行く校内にも、校庭にも、まだ櫻井先生の御姿は御見えにならない。いえ／＼秋が幾度來

かと思ふ虫の音も今宵は何となく哀愁に満ちて居る。

あとこれからが、虫の音もだん／＼落ちて緑葉の黄ばんだ物悲しい日が重なるかと思ふと一層淋しさが身に迫つて来る。

悲しき日の思ひ出

二年志賀喜久

ひらくと飛び散る梧桐の葉に秋の淋しさが一層深く感じられます。

庭の植込みの中にコロ／＼と鳴きずさむ蟲の音に誘はれて縁側に出た。

思出多き秋の空を仰げば千里はてなき碧瑠璃――

冷たく瞬く綺羅星の中に満月は清く／＼草木にた
まる眞珠とまがふ露の上に照つて居る。思ひ出せ
ば七月二十八日なんと私達の胸に深く／＼刻まれ
て居る悲しい日であつたらう……。此の世に在
はさぬ先生の報せを聞えた時、私達は本當に信ず
る事は出来なかつた。

けれどそれは夢でも幻でもなかつた。先生は俄

かに二度と歸らぬ旅に逝つてしまはれた。去年の今頃、暖い秋の日の午後作業の時に先生は手傳ひ下さつた。高い／＼青空に照つて居る秋の日は先生の丈夫さうな腕に輝いて居た。御冗談をあつしやつて皆んなを笑はせられた御姿、暑い暑い夏の日に校庭の雑木林で木をお切りになつて居た先生の御姿、それも今はたゞ思ひ出の種となつてしまつた。

ふと見ると軒の蜘蛛の巣に白い蝶が寒い秋の夜風に動いて居る。

蝶の魂は既に冷たくはかなく死んで居る。

嗚呼！はかなきは蝶ばかりではありません。私達の慈父とも仰がれた先生は、一夜の嵐に消えた花の様に此の世には亡き人となつてしまつた。

運命の神の偉大な力には私達はどうする事も出来ません。

月は風呂場の上まで上つて來た。先生の在ます所か、一ツの星がきら／＼と物哀はれげに輝いて居る。

父を失ひし友に

外幾子様

貴方の悲しいお便り只今拜見致しました。そして遠い金澤の貴方を思ひましたの。

七月二十八日！！

あゝ……あの日は本當に私達にとつて忘れ得ぬ悲しい日でございましたわね。

貴方にとつては慈愛深きお父様。私達にとつては、慈父のやうにお慕ひ申して居つた校長先生に恐しい死の運命が下された日でございました。おなくなりになる前夜まで、御冗談など仰られていっつになく御元氣の先生が、僅か五六時間の後に冷たい骸となつて横つて居られやうとは……誰が豫期しませう。

あの日、先生のお報せを聞いて、一散に海岸づたへに銀と輝く白砂を踏んで駆けつけた時、私はどんなに夢であれ、幻であれと祈つた事でせう。けれども、あゝそれは餘りにはつきりしすぎた事

實だつたのでございました。

自動車で運ばれやうとしてゐる先生のあまりに傷しい變り果てたお姿を拜し、又無心なすがちやん達の笑顔を見た時私は堪り兼ねてどんなに泣いたか知れませんでしたの。

外幾子様

ほんとうにお察し致しましたわ。私はなんと云つてお淋しい貴方のお心をお慰めしてよいのか全くお慰めの言葉に窮しますの、でも此方にお出になつた時よく木村先生に讀んでいたいたバレーナの事を思ひ出して下さいませ。そして『自分は姉妹の中で一番幸福だつた。』とお考へにならなければなりませんわ。

だつて貴方はお父様と共に毎日楽しく水泳をなすつたり。又御臨終の際もお會する事が出来たてはございませんか。でもあの御優しいお身體に重い／＼責任を持たれて貴方より以上悲しんでゐられるであらう。お母様を少しでもお慰めして上げる事が只今の貴方の務ではないでせうか。そしてすがちやん達の優しいお姉様であつて下さい

ませ。

外幾子様

秋も深くなりましたわね。心無い者もそろに哀愁の情をそそぐ時でございます。

まして悲しい過去を持つて居られる貴方にとつてはどんなに感慨深い事でございませう。私達も貴方の事を何時も思つて居りますの、あの校庭の梧桐の樹の下で校長先生や金澤の貴方がたの事を話し合つて居られる上級生もよく見懸けます。小學校時代からの親しいお友達であつた貴方に突然お別れしなければならなかつた事は私達にとつて、どんなに淋しい事でしたらう。でもいくら遠いと云つても同じ本國の中ですから、再びお會ひする機会もございませう。拙ない文でございますが、すこしでも貴方のお心をお慰め出来るならば、私はどんなに嬉しい事でございませう。ではくれぐれも御身體を御大切に……。

あこい子

外幾子様

初秋の夜

二年 松本 千代

静かな宵だ。秋蟲がそろそろ千種にすだく宵だ。周囲はだん／＼としめやかなベールに包まれて行く。秋蟲が朝顔の根本で美しい聲を張り上げてゐる。リリリン／＼、コロ／＼。今宵もやつぱり澄んだ美しい聲で鳴きつゞけてゐる。コバルトに澄んだみ空に淋しく寶石がまたゐてゐる。人通の絶えた路はひとつそりとして潤んだ息づかひ。

芋の葉露がはらりと落ちた。あゝ遺潮ない吐息をそつと吐いた。私は何時しかコスモスの側に佇んでゐた。スーッと流れ星が飛んだ一瞬。私の胸に新に湧く哀愁の涙、父も逝つた。黄泉の旅へ。校長先生も去つた。永遠の國へ父の逝かれた痛手の癒えぬ中先生の悲しい報せを聞かねばならなかつたとは。あゝ人生は淋しい。そして果敢ない、芋の葉露の如くに。うすら冷たい秋風は肌身を通して去る。終業式の日が最後のお別れであらうと

は…………。

人生の不可思議。私の小さな心は謎で一ぱいだ。運命の支配には人力で如何ともする事が出来ないのだらうか。私のせつない胸は千々に亂れた。今少し／＼先生を此の世にあらしめたかつた。そしてあの慈愛溢れた御顔を拜してゐたかつた。あゝしかし今は詮のない望み。あゝ思はず抱きしむ我と我が胸。コロ／＼と淋しく鳴く蟋蟀の聲と共に悲哀の涙に咽ぶ小さき少女を残して秋の夜はしめやかに更けてゆく。

悲しみの光

二年 草野 フジ

空はこげると色に澄み渡つて、秋の陽は大氣を透して淋しく中庭に射し込んでゐる。

梧桐の梢は折からの秋風にさや／＼と戦いて、人の心を限りない淋しみへと誘ふのであつた。

悲しみに亂れる私の心はたゞ譯もなく泣きたかつた。そして静かな庭の木蔭に佇む私の胸には何が觸れてゐるのでせう。亡き師の君の幻を追ふて。

そして静かに眼を閉ぢて亂れる胸の悲しみを沈め様と焦れば焦せるだけあの呪はしい夏の一日を思ひ浮べられてならない。

噫、あの慈愛深い先生、もう私達は再び温かな先生のお言葉に接する事は、自分達が此の世にある限は望めない願であると思つた時、私は堪へられない悲しみに聲を忍んで泣いた。

そして、ありし日の先生のお姿が新しく眼の底の方に蘇生つて來た。太陽は雲間に隠れた、梧桐の葉が一ツ音もなく散つた。底を留め雲の行方さへも分る程に澄んだ池水は俄かに大きな波紋が起つて淋しい／＼微笑みをするのであつた。私は先生のお顔をもう一度拜しやうとした時、太陽は再び輝いて、先生の面影を消して終つた。私は氣を失つた人、その様に、暫らくは黙つて悄然としてゐた。

淡い夢見る心地から自分にかへつた時、風は何かを探し求める様に、梢から梢を衝いて、果てしない青空に行方を隠して終つた。

暗がりの路地に續く草間からは、蟋蟀のとぎれ

／＼に鳴く聲が一層私を淋しい遺潮ないものにさせた。噫、此の蟲も雖も霜深い晩秋の頃になると「また來年の秋を……………」と此の世から姿を消すであらう。併し人間は一度此の世を去れば、どんなに秋は戀しいからと叫んでも、天の恵は人間を再び華かに戻しては呉れない。

蟲の果敢ない運命の裡には幸福の影は何時もついてゐるではないでせうか。私達は逝れた先生をいくら神様にお願いしても、先生は私達に聲あるお言葉を下されない……………。だが先生の魂はさつと／＼私達の心に力強い沈黙の何者かを教へ下さつてゐるに違ひない。私は悲しい諦をすると共に、先生の冥福を神佛に祈らう。あゝ永劫に此の世を去られた校長先生を私達は、何時迄も／＼忘れられない先生として心の奥に刻みつけて置かう。

太陽は淡い悲しみの光に沈み草叢にすだく蟲の聲の或は低く、或は高く、悲哀の曲を奏で、無限を思はせながら黄昏の裡に續いてゐる。

梧桐の葉

二年門馬セキ

暗い庭に枯れた落葉の香が漂ふて居る。

心地よい重くしめつぽい香が……バサリバサ

リ庭の隅に……落葉だ。

病葉のひびきが生れます……秋の寂しさが。

老いた、梧桐の葉がバサリ……バサリ……

やはり淋しい音を立て、散り敷きます。

非常に身が顫へます。暗い庭はそして静かだつ

た。時に急ぐ三つ四つ二つの鳥が西の空に消え去

つた。ふと私の胸にこだまして深い悲しみに沈ま

せてゆく、或る物を感じた。

それは永久に私の胸より消え得ない校長先生の

俯でした。思へばほんとうに薄命の御人でした。

作業に何時もいそしんで鎌を肩に梧桐を見て微

笑んで居られた先生は、私達を今日より明日、明

日より次の日と教へ導かれたこと一年八ヶ月で愛

しい教へ子を殘して黄泉の客にならうとは……。

おう夢ではないでせうか。

先生は私達の爲に熱心に修身と國語とを教へて

下さいました。修身の時間にはよく面白いお話を

して下さいました。

あ……先生の突然の死を知つた時、私達は

言ひ知れぬ一脈の黒い影をどうすることも出来ま

せんでした。

私達は友のBさんと先生のお宅に参りました。

先生のお宅は大分取り込んで居られました。そし

て先生は最早や私達を何時ものやうに迎へては下

さいませんでした。

「よくいらつしやいました。」と外幾子さんは真

赤に目を脹していらしやいました。

おさないお子様方は「死」それは人生の最大の悲

哀それを眼前に控へながら死といふものは單に遠

い所に旅立つて、二、三年も経れば再び歸つて來

るやうな單純な考へて居られるらしい。幼いその

お子様達はお母様の泣きじやくりするのをさも不

思議をうに眺めて居られる。

そして時々思ひ出したやうに「父ちゃんは……」

殘の黄金の沫が散らされてゐる。

銀と碎け黄金に靜む波の面を一羽の海鳥が高く

低くいと面白げに飛交つてゐる。

妖艶な天と地を夢の國か、詩の國かと思つて、

輕やかに華やかに時々丘の静けさを目に觸れては

又も面白げに飛交はつてゐる。

キツキツ……

海鳥の舞ふ間にも晩秋の夕はすぎて行く、海鳥

の白い翅の影も一羽へり、二羽へり今は影一つな

い。

闇の中から總べての感情を語る様な秋の夕がう

つとり紫の靄を乗せて白い手で追つて來た。

縷々たる漁村の煙も風なき空へと立昇り、靄氣

て見るからに夢の國を思はす様な渚を歩む人影も

今は唯冷たい風が白い波の上をさらりと逃げて

行く。

かすかに望む向ふの燈臺の燈が神秘的な夜の海

邊を一層靜寂にして、千々に碎ける光！赤くきら

めく光！

あたりは一層暗い。

とお慕ひ泣きなされるので、お母様は餘儀なく「父

ちゃん達は遠い所に行つて澤山お土産を持つて來る

の。」と云へば嬉しさうにお父様の事など忘れたや

うに集まつて來る人々を物珍らしさうに打眺めて

キツ／＼と喜んで居られる御様子がほんとうに

お傷はしい。

あ……先生は愛しい我子を殘して逝つたの

だ。あれから幾日か過ぎた。でもあの梧桐の葉を

見上げると慈愛に満ちたあの面影が餘りにはつき

りと浮んでくる。そして毎日梧桐の葉を見上げて

は望み多い身のはかなく逝ける先生のありし日を

偲んでは只泪するばかり。

久遠の彼方に去つてしまはれた先生。安らかに

お眠り下さるやう。そして櫻ヶ丘の教へ子は毎日

先生の事を偲びつゝ心から優しい聖い祈を捧げて

居るいづらしい心根をどうぞ快くお受け下さい。

晩秋の濱風

二年野木豐子

寄せては碎け寄せては碎ける大波小波には最早名

私は只獨り波のちよろ／＼と迫る渚を俯きがちに歩いて居た。足の動くにまかせて歩を進めながら……。

静かに海にかうした淋しさを目に觸れては一層物悲しい暗い心に沈ませられる。

波の音は一段と哀調を合せて私の胸の中までひしひしと迫つた来る。どうしたのか私の瞳は泪で一杯である。

露の命の如くに果敢なく去られた櫻井先生。

私共の愛慕してやまない先生は遠い／＼バラダイスへ行かれた。夏の蟬の音と共に永遠にこの世から去られた。

再び夏は訪づれ蟬の音を聞くとあの慕しい先生にはもう再びお目にかゝる事が出来ないのだ！
桐の葉がガサツと地上にすはれる様に先生の御魂は永遠に昇天された。

七月最後の日に梧桐の下で教壇に静かに立たれたお姿が最後とは……。

七月卅日その夜はあまりに悲しい夜であつた。ギシギシとお棺の音も氣味わるく、合歎の花も静

かに眠る夏の夕と共に先生のお姿は消え去つた。思ふまい思ふまい。止めやう／＼と思ふ涙も後から湧いて私の心は本當に暗い。

あゝあの夜の事をどうして忘れることが出来やう。あまりに悲しい音私の耳の底にギシギシと常に響く音！

「花に開落のある如く人生も亦生死あり」一度此の世に生を享け會見しものは去る事を免れないのか！先生は去られた清らかに玲瓏の如く静かに……あゝ星が飛ぶ。沖のはての遠い彼方に赤く尾引いて……。自分ははつと驚いた先生ではあるまいか。あとは暗い。

静寂の夜はすた／＼と更けて行く。

先生はたとへ永遠に去られても先生の教は私共の胸にいつまでも残つてゐるであらう。清い／＼空に美しい光を放つて輝く星の様にいつまでも先生は私共を守つてくださるでせう。

先生！大きな聲でもう一度呼んで見たい。けれどそれは憐ない望で空しい事、悲しい思ひを心一杯に漲らせてしまつた。たまらなく寂しい。

沖の方からぼつかり／＼と漁船が浮いて來た。目の痛む程見つめてゐたい。私の魂は消えて行きさうだ。あゝ妙に悲しい。

弦月は虚空によろめき青白き頬を涙と變へて冷たく／＼輝いてゐる。もう考へまい。私は決して淋しくない、悲しくもないんだ。

「姉ちゃん」……其の折夢は破られて妹の可愛い、聲が風を縫つて起つて來た。時の歩も知らずして晩秋の海に思ひし数々も幼ない妹に破られて何處からか吹く濱風の寒く頬にあたる折迎へに來る妹の歌聲が晩秋の情緒を深刻に私の胸にきざみつける様な氣がした。

涙

三年 鍋田美枝

静なる天地、静なる天地よ。
そなたは静止してジツト眸をすゑて何を見つゐる、あまりに冷たい瞳で自然は人の子をあやつる何かを暗示しつゝ。

もがくとも抜け出られない永劫の死へ、弱いあ

まりに弱い人の子はむくろとなる、土塊となる。とき得ない神祕をこめてオリオン星座が、宇宙の謎を奏でる。静かな夜過ぎし日を思ふ、儚い淋しさの大自然の一時を思ふ、その刹那の心のうごめき。凋落の秋の夜半に病葉は散る嘆く心に愛の結末、生の結末哀れ淋しき人の子の別れ。そして過ぎし日にかたどられた死の印象、胸に焼きつけられた印象はあそろしかつた、淋しかつた。

相見れば別れるのは世の掟とは云ふものゝ、誰も平和の日の永久であることを祈つたのに、静にも忍びよる死の悪魔、やがては來る人のさだめは、私達の幸福の殿堂を見のがしはしなかつた。懐しい慈父の様にやさしみそのものゝ様な私達の先生を、セコンドと共に流れくるタイムはあまりに淋しかつた。春は淡紅の櫻の下を、夏は緑のアカシヤの、秋はいてふのちりしく下を、幸を胸にいだきつゝ平和の日のこの櫻ヶ丘に永しへにつゞく様にと、どんなに祈つたらうに。

それはあまり儚なかつた眞晝の夢のやうに、夜明の消えゆく星のやうに、淋しく一人先生は消逝

きになつた。私達の胸の淋しさへ黒色のアンダーラインをひきつゝ、平和の日はいつか失せることは知つてゐても、こんなに早く破滅の日の来ることを誰が豫期したらう。果敢なく破れた幸福の夢の、あまりに短かまつたことを歎かず居られようか。御霊の静に眠ります奥都城の邊に若草は萌えるとも、苔は蒸すとも、おなづかしい先生の御心おやさしい先生の御顔は私達の胸からどうして失せよう。私達はされどあつて涙を死にそぐことをやめよう。そして御霊にこたへることに精進しよう。

櫻井校長の死

三年 伊 關 房子

生より死。一個の人の子が晴れがましき産聲と共に、人の世に送り出されて、神の如く氣高い無心の境より、一個の人として五體が完全に發育し、人の智慧と幼き折の心が、前者は科學的に後者は宗教的に人の世の謎を解かうと努力しつゝ、遂に多くは果されず、永遠に死の床に身を横へるま

でを考へた時、私達はあまりに淺薄な行動を取り過ぎた。あまりに利己的享樂に耽り過ぎたことを痛感せずには居られない。

櫻井先生の死の知せを齎した耳は腦に疑はれずした。腦は常に忠實に勤務する彼を思つて見たけれど、けれどどうしてこれが信じられよう。私の頭の中で忠實な耳と温順な腦とは、性質に似げなく口論をさへした程でした。けれど悲しいことには、私の頭の中を征服せしめたのは耳の報じた知せてした。

そこで私は自分自身に對してあまり無頓着だつた死といふことに就いて考へました。

私は何時の間にか壯嚴な建物の中に居りました。そこはすべてが静りかへつてゐて、ほんとに靜寂そのものでした。そして薄い神秘的な月光がそこで唯一の光でした。

一番青白い光のある所には真白いベットに横つて美しい少女が居りました。彼女の女の肌が玲瓏と玉のやうですが蠟細工の人形のやうに、少しの生氣もありません。金髪は房々と波うつて居り、そ

こには永久にしばらくこの出来ない造花が飾つてありました。それはマールブルの像の如く冷かなものでした。これは人の世で亡き骸といはれる、最も具體化した死に對する説明であります。これからの事は大きな疑問として、少くも生あるものとして之を考へて憂鬱にならない者はないでせう。

佛教の説く所によれば、死といつてそれで斷ち切られたのではない。死は産聲をあげる一の道程で、死は再生するに精神轉換をする一の道程に外ならない。故に前世惡事をした者は、罪業消滅の爲め現世に於て苦まねばならぬと、之を信じて之を考へた時、誰しも未來永劫盡くる所のない宇宙の偉大な神祕に對して、慄然として肌を粟を生ぜしむるでせう。兎まれ私風情には到底知ることは能はざる事なのでありませう。私のこれまで人々の死に對して何等考へなかつたといふことはその事に對して冷淡であつたかも知れませぬ。櫻井先生の死には以前になく種々と考へさせられました。

宵雨を聞きつゝ

三年 蛭 田 ハル

あゝ今年の夏休も亦、白熱の炎天下で籠城か。でも之も精神修養の一つでよいだらうなどといひとり咬きながら水泳に行かれた諸先生方や、お友達の皆様を羨みつゝ四五日は過した。

二十八日のあの日突然意外の凶報を手にした私、あゝその時を思ひ出すのは随分つらいものでありました。そして餘りの驚きのため暫しは我を忘れましたが、やがて冷靜にかへつては、只生前の一つ一つがはつきりと目にうつり、骨の髓心を刺衝される思ひでした。

どうして逝かれたのだらう、何と考へても今頃此の世を去られるとは思はず、きつと何かの間違だらうと、一人元氣をつけては居るものゝやうばりその反面には恐しさが自分を暗くして行くのでした。いかに悲めばとて致方がないとは思ふても、どうして安々とあきらめられよう。あの國語の時間、ビンボンのお遊び、はてはすべての御有様を聯想しては、たまたま先生が懐しくなり、浮世の無情はひし／＼と感ぜられてしまひます。

夢の間に九月一日も来れば、校長先生のお出ない私等の學校は何と淋しいこととせう。あはれ秋の一日も夕づく頃になれば、様々の哀音はすべて私の心をあのかせます。かうして黄昏時より宵の静けさに入つては淋しい秋雨の音を聞きつゝ、親のない子の悲しさのやうにいと寂しく夜を過します。あゝ先生は逝つてしまつた。文明の世にも、死に對しては何の抵抗も出来ぬかと思ふと世は味氣なく思はれてなりません。いくら悲しんでも最早先生は無常生滅の郷土に旅立つてしまはれました。取残された私達七百餘名はよりよく強い生徒となり、本校の美風を輝し、光明な世界へ一歩でも早く近づき、地下の英靈をお慰め致すより外はありません。

軒より落つる玉水の音、静かな淋しい情のある波紋、かうしてゐる中に誘はれて――

過去の追憶――水泳に行かれた時も、かうした淋しい雨が庭に降り注いでゐたせう。

お別れた先生に

三年 大坪 常子

お懐しい先生。私は先生の喜んで下さるお顔を思ひながら筆を執りました。それはカーンカーンと春空に響く鐘の音なんです。その音この響こそ此間先生にお習ひしてゐた學校の先生には思ひ出深い學校の歡喜の叫びです。どうして胸の躍らない者がありませう。この堂々たる校舎をもう一度先生にお見せしたい。いたづらつ子でよく先生を困らしたMさんが、こんな事をいつてゐました。今日も先生とともによく遊んだ。櫻の下に皆が集つた時「心の駒に鞭うちて」と言はれたお別れの日

幻の中に

「あゝ先生」「あゝ貴方は何某か、久しく逢はなかつたな。」「あなつかしき先生の御言葉。あゝ意外又意外――。突然に亡くなられた等の先生が今私のそばで言葉をおかけになるとは。全く夢の様に楽しくお待ち下さい。

ある。頭髮は綺麗に刈取り、著物はさつぱりとしてゐる。顔は以前と變つてゐない。どうしてもそれは先生である。あまりのうれしさ懷しさに先生の體にさはらうとしたその刹那、今迄いらつしやつた先生は幻の如くすうと何處かへ消え失せた。あつと叫んだ時始めて氣がついた。それは夢であつた。私の胸はどきどき波を打つてゐる、噫今のは事實であればよかつたのに。

櫻井先生を悼みて

三年 皆川 ハル

恩師櫻井先生の逝去。何といふ無情の世であらう。沈黙の活動」を最後の言葉として逝かれた先生は、圓滿な人格と、卓絶した見識とを以て常に私達生徒を導き下さつた。私達は慈父とお慕ひ申したのであつた先生は、趣味が豊富で校庭の作業もよく一人でなさつたり、又他の先生と一緒になさつたりして、いつもよく働いていらつしやる。ラケットを取つては選手をはげまされ、よく運動精神を鼓吹された。先生は不幸にも突然の病魔に

襲はれ給ひ、われらはその恢復を祈願する暇もなく、白玉樓中の人となられました。私は此の時どんなに哭き悲しんだ事とせう。只茫然として天の彼方に思を馳せて、北斗七星の淡い光の下に氣も心も滅入るやうな哀愁に襲はれました。二學期になつた、にこやかであるべき始業式も各々愁の色を秘めて、沈痛そのものでありました。その後は壇上に温和な風雨を見ることが出来なければ、勇ましい容姿はまた校庭に見出す事も叶ひません。先生の葬儀の行はれる日は前日までの雨も晴れて、太陽の光は静かに流れ、風さへなく天も俱に悲しむかのやうでありました。萬感胸に迫つて追懷の情切に涙潜然として下り、筆をとつても文を成せません。噫人生のつれなさ。今は白蓮の花に圃まれ楽しい淨土に静かに眠り給ふであらう。哀悼の鐘の聲遠く幽に漂ひ、餘韻坐に今尚哀感に堪へません。

思 出

三年 大森 千代子

防風林。あはれいつも思出す先生の面影。我等が愉快に遊んでゐる時、熱心に校庭で體操をして居る時。木々を愛して手入をしていらつしやる御姿。人間に變らぬ親切さですべての植物を慈み下さつた面影。今は永劫に見ることが出来ない。校庭に生ひ茂つてゐる幾多の植物、どんなに今まで幸福に生を保つてゐたであらう、さても今は師の逝けるを惜みつゝ、ありし日の幸を夢みてゐるであらうか。

恩師の御靈に

三年 零 石 千 代

呪はしき日よ、と永久に私の記憶の中に残る筈のその日の夕方。何事も知らずに一人文机に向つて、課題の國語に一心にペンを走らせて居る時、お使からかへつて来た妹より突如悲しい知らせを聞いた。初は夢かと思つたが夢ではない現實なのであつた。あんなに御丈夫だつた先生が俄に御逝去なされた事は眞實なのだ。それはちやうど燦々と惠深い光を海原遠く投げかけて、舟乗人に大きな

安堵を與へて居た燈臺の光が俄の故障で突如消え失せ、舟乗人は方向を失つて淺處に乘上げ難破して、助を天に呼べども逆捲く波の音ばかり、あはれ海の藻屑となる事實のやうにあまりにもそれは悲惨な例ではあるけれども、後に残された私達は彼の難破船のやうに、天に訴へ地に叫んでも、先生の御姿は最早現し世にては見られない。想起せば先生の恩澤を受けて茲に二年と數ヶ月。けれどもその最も高い徳の薫陶に浴した私達は、一生の名譽幸福といはねばならない。先生の限りなき徳を偲べば懐しの現し御姿は、何處にも幻となつてあらはれる。朝禮の際の氣高き温顔、教室に於て國語尊重論などをお説きになる御容姿、ピンポンを生徒とともになさる御有様、乃至ヴォレーボールに嬉々たる御風丰等走馬燈の如く浮び来る。私達先生の御恩澤を受けたるもの、先生の御旨趣に従ひ、以て御恩の萬一だにも酬い申さず止むべきか。先生の靈よ、願くは諒とせられ給へや。

思ひのまゝ三片

三年 八 幡 正 子

先生!!と私は飛びつきたい、お胸にすがりたい。あゝあまつたれもして見たい。

先生が廊下をお歩きになる靴の音がコツ／＼と聞えてくる。

國語の時間そして修身の時間、私はあの蟲のお話を三度と、お友達だの、夢、先生の勉學時代のお話を又又なんて思ひながらも喜んでお聞きたものだったけど。

お机に兩腕をおつきになつて短い鉛筆を指の先でくる／＼動かしてゐられた先生、お優しい私達のお父様。

先生が!! うそだ!! うそだ。信じられない。いまはしい報知が狂はしく暗に渦を捲いた。あの燈臺の光が瞋夜を掠める時、井には桐の葉が一二葉はら／＼と散つていつた。はつとして見上げる空間には慈父のやうに信じお慕ひする先生が笑をお含みになつてくつきり浮かんでゐた。いやないや

な夢でないのかしら。先生はお丈夫なんじやあな

いかしら。あゝ今私の心は父ともお呼びしよう先生を失つた色々の感情の衝突戦場。

秋になつた今。眞晝の光の物足りなさに近よる墓場。墓守のない野邊の一隅の荒れ果てたそこには、氣味わるくかぶる雜草と曼珠華とがあるばかり。

とぎれど／＼に蟲の思つかひが空虚な秋に鳴咽するばかり。

今更ながらに先生の面影を、ここに得ようとあせる時、冷かな大氣はそれを退けてしまふはかなさ。けど一体私は何を書かうとするのか。あゝたゞ一途に先生、先生、先生と書き連ねるのが私の心のすべてはあるまいか。

落日

三年 渡 邊 タ イ
天も黙し地も黙してゐる。嗚呼なんと靜寂な夕

暮だらう。夕陽は沈まんとしてゐる、遙か地平線の彼方に瑠璃色に輝く空、紫に映える連山、次第に金色を帯ぶる、静かな入日は別れ行く世をかへりみごとに悠々と落ち、西空忽ち黄色に彩らる。偉人の死を思はせる如く、秋の日はや暮れてしまつた。時よ何故にもつと／＼ゆるやかに流れてくれなかつた。そして誰に與へんとして櫻ヶ丘より、おゝお慕はしい先生の生命を奪ひ去つたか、あまりにもそれは無情ではないか。」と天に怒り地に叫ばずには居られない。秋の日の如く先生の御生涯は短くこそあれ、御影は入日に似た平和な人生の末路だといはなかつたなら何といひませう。夕映の美しさも時の過ぐるにつれて金色は朱となり藍となり、遂に灰色の夕雲に包まれ、萬象は眠るが如く消えて行く宵を目して。けれども尊い先生の御霊は長に吾等に光明を與へて下さるだらう。春の陽の如く温き御心、聡明な御頭脳は水晶の如く、ひきしまつた御姿、皆過去の追憶となつて目前に髣髴と映じ、危く先生と口走らうとし、我にかへた時はちやうど木の葉の一輪が、はら／＼と散

つて秋が來たことを思はせる様な淋しい心持になつた。足下にては豈は挽歌でも奏する如く、寂寥たる夕の中にいてゐる。

あゝ静寥たる日は沈み尊き先生の御姿も永劫の旅へ落ち、二つの落ちし影がはら／＼と散り行く、木の葉に埋れ深み行く秋の彼方に消え去ります。主なき廣き校庭には今晚もきつと赤蜻蛉が闇に迷つてゐるだらう。

でも秋なのに一隅にある木々は餘光に浴してまだ枯れもせず綠榮えてゐます。

すべての破滅たる秋!!は深み行く。あゝ先生のみたまよ長に幸多かれ。

どこへ出ませう

三年 鹽 ツルヨ

先生。み空は高く高く澄み渡つて、そして風もだん／＼冷くなつて参りました。何を先に書いたらいゝのか胸が一杯でございます。思へばあの七月二十八日は何といふ呪はし日だつたでございます。あの日に先生にお別れしやうなどと、は神な

らぬ吾等にどうして知る事ができませう。どう考へても先生が逝かれたとは思はれません。たゞたゞ夢見てゐるやうでございます。どうかの御空で私達を見ていらつしやるやうな氣がしてなりません。もう一度國語の御講義をしていただきたくございませう。左の御手に出席簿をかゝへて教室にはいつていらつしやる御姿がちらつて瞳のうらに熱いものが滲み出て参ります。毎日先生がにっこりほゝゑまれて、教壇にお立ちになる様な氣持で本を開きます。でもやつぱり先生は逝かれました。夢ならば覺めての後はどんな恐ろしい事でも、悲しい事でもほゝゑみもて消されませうけど、燒きつけられたうつみの痛手はいつまでも／＼癒える時がないことでございます。あゝ神様はなぜ先生を天國にお召しになつたのでせう。弱い／＼人の子達は定てふものに打勝つことが出来ません。もう先生が逝かれてから二ヶ月、時は絶え間なく流れ去りますのに悲みは更に薄らぎません。先生このお便りはいつどこにポストしたら讀んで頂けるのでございませう。運動會も近づきました。今

懐しき先生を偲びて

三年 坂本 敬子

軒端に下げられた風鈴は木の葉の落ちる度毎に長閑にちり／＼と鳴つてゐます。静かなをとして思ひ深き秋の夕、獨り淋しく窓邊にもたれ、亡き先生の思出に耽つてゐた私の瞳は、何時しか曇つてゐました。眞夏の朝それは何といふ呪はしい日でありましたらう。私等のあこがれ慕つてゐた先生は永久の旅に立たれました。元氣なそして微笑に充ちた御顔で有益な話などして下さつた懐しき先生の御姿が幻の如く朦朧と思ひ浮べれます。私はこみ上げて來る感情を打ち押へながら、安らかにそして永へに眠りつゞけられます様に、黄昏の御空にほのかに浮ぶ十字架にお祈りいたします。

逝きし師の君を偲びて

三年 山野邊 モトヨ

師の君が昔の下露とお消えになつてから最早一月餘りになりました。先生！。あゝ師の君よ。今日は何だか春雨のやうな秋雨がこまかく静に降り注いで居ります。かうした雨が全生徒のみなしみの雨とも言ひませうか。この廣い／＼校庭に降り注いでゐるのを、只一人體操場の窓から悵然として私はその雨をみつめて居ります。何だか目の前をすーと落ちた。見上げると桐の葉から銀のやうな雨だれが落ちかゝつてゐます。デッとしてゐるとボトリその廣葉を離れて目の前をスーと通つて大地に落ちてしまふ。そして下の方でボチャンといふ音がした。その刹那私はハッと思つて振返つた。しかしそこには誰もゐませんでした。そしてそれは幻であつたのでした。デッと胸をしづめてゐると何處からか鐵板を打つ音が聞えて来る。私は先生！一聲呼んで見たくなつたのでした。あゝあの生前に此の廣い／＼學び舎の庭で眞黒な足を素

はだして歩きながら「後世に於ての百姓だ。」などゝにこやかなお顔をなさつたあの面影が、目のあたりにちらつき着物の袖をしぼりました。この自分の淋しい／＼心の底を誰に語りませう。七月二十八日は何といふ呪はしい日でしたらう。先生デニスの試合も近づきました。選手は悉く先生のみたまに手向ける爲めに必死になつて練習をしてゐます。又運動會も近づきました。先生の現身の見えないのが残念です。されど必ず／＼よい成績を収めて先生のみたまを安んぜさせ申すでせう。さらば安らげく眠りませ。

悼

三年 新田 目 俊子

その前後である。電燈の光は田舎めいて鈍い、でも若やいだ笑聲を包む宿舎の空気がさすがに明るい。時々どつと二階から拍手が笑聲に混つて聞えて来る。永島先生が遊戯でもお始めになつて居るらしく、一ぱい涙を……の歌詞がときれながら響く、二階の賑ひにかはつて下では校長先生を中

心に幾らか眞面目なまどひがひろがる。長い机によつて宿題のページ繰る人、明日歸らうとは知らず家への便りにペンを走らせる人。先生駕籠訴つて何ですか。どれ駕籠訴、うん——うん、さうなあ駕籠訴つて云ふのは直訴見たいな事と思ふが後でよく調べてやらう。先生の周りを國語の質問が取圍む、自分も此の中にまじつてひととき。

×

×

×

夕御飯のお酒に、御機嫌よく冗談等交へて元氣は、はつは……と笑つていらした先生。その夜のお姿を想ひ起して、あれから早二月と思ふとたへられぬやうに悲しみに胸もつまる思ひがする。

朝

三年 堀 江 露 子

静に／＼臉が開いた。あや。もう夜明だ、細い白い光が私の枕元まで流れ込んでゐる。短い夜だこと、まだねむくて／＼ならないのに、でもやがて私の心は白い光の掬になつてしまつた。蒲團を抜け出て雨戸をあけた。さつと吹いて来る朝風。あ

文

苑

くれ毛のふり飜れた寝ざめの顔をちよつとなで、通りすぎる。あゝ氣持のよいこと。思はず口からすべり出た。だん／＼あたりが明るくなつて來た。谷川瀬山は朝霧を破つて生れ出ようとしてゐる。がら／＼がら／＼彼方の家此方の家から雨戸を開く音が聞えてくる。人の聲が耳につく、晴れ晴れとした喜びの溢れた聲だ。附近の竈の煙突から威勢のよい煙が眞直に無限の空へ……、朝の空へ高く／＼伸びて行く。私の身體はまぶしい光で覆はれ心は歡喜に躍つてゐる。朝の光は輝かしい今に宇宙のあらゆるものが動き出すのだ。朝、朝の光！何て生氣のこもつた言葉だらう。喜びの満ちた言葉だらう。この瞬間だけはこの地球の何處にも、不幸な人を見出す事が出来ないだらう。皆が一樣に希望と喜びと願とを持つて居ようもの、そして同じ朝の光の中に抱擁されて居ようもの、そこには徒な運命の神の氣まぐれな操なんか絶體に行はれて居ないと私は信じる、かたく信じる。朝よ……、喜びの朝よ。私の願を聞いておくれ、少しの間だけでも朝そのものの姿であつてお

六九

くれ。そして世の悲しみやむ人の胸に朝の喜びをあつくておくれ。さう／＼私は今の中に朝の空気を胸一杯に吸込んでおかう、そして更に今日の日を感謝しよう。

亡き師の君

四年 星 恒 代

おゝ、櫻井先生。歸りませぬ先生なれども、そして過去帳深く秘められた先生の御名でございすけれど、私達生徒は先生の御名を呼んで止まなうてございす。

先生のありし日の御姿、愛撫の眼を小さい私達に御向けなされ、につこりほゝ多む笑ひ顔、優しい腕は私達を温かに抱いて下さいました。この中にはぐゝまれた私達は幸福の絶頂に酔ひつゞけて居りました。御聲の一節々々、ほんとうに愛情をのまゝの御聲でございました。でも／＼、今は歸りませぬ師の君でいらつしやいます。「樂の後の苦」此の言葉は私達に取つてあまりに知り過ぎた言葉でございしました。けれどこんなに早く温かい樂園が

冷たい嵐に荒されようとは露思はぬのでございしました。幸福の絶頂から悲みの極端に落されて私共は思ふ存分自然の悪戯に悩まされました。そして呼びつゞけた聲はむごい自然の前には何の効果もございせんてした。白布に包まれた先生の骨が私達の前に出された時、あまりに變りすぎた先生の御姿にたゞ瞑目する許りでございしました。かつて修身の時間に、先生は苦心談を御話しなされ、缺け損じた齒を力なげにお示しになされました。しかし先生御自身すら死を豫想なされていらつしやいましたでせうか。終業式の御言葉。御姿。あれが最後の御言葉で、そして御姿であつたらうとは誰が知りませう。先生なき後の私達は、親のない子畜でなければ味はれない淋しさでございす。庭の草花も先生の温き御手を待つてか、それとも主なき身の悲しさか、秋風になぶられてほろ／＼と散つてしまひました。でも先生、御安らかに御眠り下さい。私達小さきものも諸先生と共に、御優しい先生よりたまはつた尊い芽を益々成長させて固い／＼蕾をつけませう。どうぞ私達を御守り下

さいませ。

櫻井先生を偲ぶ

四年 緑 川 操

死……何と不可解なそして銀線のひらめきにも似た鋭光をおびた片言だらう……。

あゝけれど如何なる文明の威力でも精神的、物質的權威を以てしても、生きとし生ける物より到底除外する事の不可能な運命、最後の衝路である。古今の大聖釋尊でさへ絶對心理の奥を悟り、涅槃の大境地に到達する事が出来たとはいへ、遂には死の陰におゝはれる事を免かれなかつたのだから……。

……。一世の哲人ソクラテスだつて同様だつた。死は神が我々を試す一つの手段であるのだ。それを凡人は知ること出来ない。否釋尊はそれを豫知し得た。けれど眼前に見えてゐても打破する事は出来得なかつた。生あると直ちに生ずる生の結果は死である。であるから先生の死も偶然ではなかつた。しかしさういつて斷念してしまへばあの時に——先生を……我らの慈父を……私達か

ことか。

きけば先生には論文起草中の由その中に織込まれた章句訓話の數々は多年の努力が名譽と歡喜との二つの結晶となつて先生及び私達の眼前に待ちわびてゐたことだらう……。

よろこびの御出世、我が校の名譽を一寸先に横たへ永遠の思ひ出として七百の少女の胸につきぬ涙の泉をのこして……。

二十九日―新聞を持つ手はあやしくふるへてゐた。錦様の手も異様にふるへてゐるのを私は直感し得た。私は錦様の言を信じやうとはしなかつた。殆ど信じられないあまりにも急なけしき言葉だつたから……。

けれども眞實はどこまでも打消しは出来なかつた。私は自己の眼も耳も疑つた。穴のあく程記事を見つめた翌日が待ちどろしかつたが、運命はどこまでも皮肉なのだらう……。再び眼前に展開された記事はあさらかに事實を證明してゐた。極端なあどろきは次第になげきにうつていつた。終業式の日の先生のどことなく沈鬱なみ姿、あり

し日のボン／＼と玉をうつピンボンのひびきと共にすいた齒並を合してほく笑ひあふるゝばかりの慈父の容顏は走馬燈の如く私の小さき脳裏に廻轉し始めた。日ならずして事實を證明する日は來た。四日朝から一般のたむけし涙の雨はし／＼と大地にふりそそぎ、私達の喪服の袖をしとどにうるほしてゐた。莊嚴な校葬に三千の人の涙に送られ最愛なる嗣子のかひなに抱擁されつゝ師の君の英靈は永久に昇天したまふた。

あゝ……壯大な追悼も天國の樂園よりも趣味多き現世こそ眞の樂園であらねばならぬ。私達はたゞ今はなき師の君の幸福をいのると共に今後ますます奮勵努力して先生の高恩の萬分の一の報ともなるべきやう自覺すべきではあるまいか。

私は先生が未だに現在のいづこかにゐまして私達をみちびきたまふてゐるやうに思はれてならない。否私はさう信じてやまないのである。日月はとどこふることなく流れるけれど私達の胸にきざまれた印象は現在の事實としていつまでも――私達の胸中を流れてつぎない事と思ふ。

櫻井先生を偲ぶ

四年 菱沼 壽子

白い眞晝の夢に酔ひながら、そして酔ひくづれる夏草が日毎土地を領して延びて行つた炎天の頃、葉末に宿る白露にも似て、はかなくも逝きませし師の君よ。

去にし日の夢も忘れやらぬ故へ子は、今また先生の靈前に、露新たなる追憶の涙を捧げようとしてゐるのです。思ひ出の日はなやましい。先生!! 七月二十八日は私達にとつて思ひ出深い日となりました。悲しい、恐ろしい、報を耳にした忘はしい日故に。夏の日の空は、あくまで潤れ切つて、陽の光は矢のやうに鋭く地上のものを射て白かつた。そうして路上の雜草に、木々の綠葉に、夏は口づけたまゝ、深遠の淵に歩を進めて行つた。海に、山に、涼味を求めて、とめどない幻想を追つて居た休暇がやつて來た時、學び舎にある小鳥達は、どんなに嬉しさと樂しさに、胸をちどらせた事だらう。

だが、突如として起つた悲風の聲よ。忌はしい現實の風は、あまりに急激に黒い影をもたらし吹き過ぎた。

あの時の驚き……、悲しみ……、忘れやうとして忘れ得ぬあのさきの中に暮れた思ひ出の日よ。悲しみを求むべく、私達はあの休暇を、かくまで待ちこがれはしなかつたものを。

運命の神は、あまりにいたづら過ぎる。あまりに皮肉な奔浪ではなかつたらうか。けれどこんなうらみ言も今になつて何のかひがあらう。あの二十九日の午後、ひそやかに忍び寄る薄紫の香の煙にうちしめつた空氣の中で、私は不思議な氣持で先生の靈前に一まつ香をたいた。危げな白蠟の灯のゆらぎを見つめながら、ぼんやりした意識の中に私は病されるやうな印象も持得なかつた。只飾られた先生のうつしゑのみが生前のあの優しい頬笑となつて心に残つた丈。……たつたこれ丈で、どうして校長先生が逝いたなど信じられやう。信じやうとして信じ得ぬ心に浮び來るもの……それは在りし日の先生の、あのかどやかしい面

影のみ……。けれど、夏の日、悲しい想ひをのせたまゝ、どことなく流れて行つた。そうして私達は、再び學び舎の人となつた時、待てど歸らぬ事とは知りながら、どんなに先生を心待ちにして居たであらう。けれど、あの慈父のやうな、慈愛に充ちた先生をいつに求むすべくなくて、白け渡つた重苦しい空氣の中に私達は物足りない始業式を終へたのだつた。その日から、朝禮にも、一週に一度の修身の時間にも、先生は決して壇上に立たうとはなさらない。底力のある先生の御聲は、まじりだしの底に残つてはゐるけれど、だが永遠に見えまじりだしの先生と知つた時、かぎりない淋しさがひし／＼と胸を襲つて来る。

朝な／＼生徒達が、かつての日の先生の室をのぞき込んで、先生のみうつしゑに、胸をつまらせて居るのを、先生は、今いづこに、それを見て在すやら。心ひそかに擗ける朝の挨拶にて、かへりがけ、奉安所の前の道から其の日の別れを惜んでも只一點を凝視して、先生は決してあの優しい頬笑を見せてはくれない。

「逝いたのだもの。……心の底に、こんな叫びはあるけれど、なぜかこうした縁言に勝ち得ない淋しさをどうしやう。」

先生!!

學び舎にも秋の色が深くなつて來ました。風もないのに萩が咲いては、ほろ／＼と散つて行きます。校庭の紫苑もこんなに大きくなりました。そして可憐な薄紫の花匂ふ窓邊に、日毎秋冷を送つて、秋が――秋が更けて行くのです。白い露にぬれそぼちながら。先生のみたまの前にも、今頃は、虫がどんなに悲しく鳴きつゞけて居る事でせう。残された小鳥の悲しい訴へにも似た虫の音を、先生、どうぞ聞いてやつて下さい。

今は幽明境を異にした故に、私達は只、「みやすらけくねむりませ。」と祈るよりすべを知りません。さらば校長先生、みやすらけく眠りませ。

櫻井先生を憶ふ

四年 三 瓶 ヨ テ

四邊はもう夜の帳がゑろされて、物淋しい秋蟲が

櫻井校長先生を思ひて

四年 村上百合子

周圍にゑろされた黒い帳の中に、私の果しない悲しい追憶は續きます。

先生――先生――

呼べど答のない人の名を黃泉の國とやらへ逝かれてしまつた師の君の名を、慈愛に満ちた顔を、御姿を思ひ出し、幾度呼んでは現實にかへり、灰色にゑろはれた空氣の中で涙したてせう。あまりといへばあまりに急激であつた魔の手。

修身の御講義のとき、かけた齒をのぞかせては「私の子供の母が」と言つて私達を笑はせ、はては御自分も笑ひになつた。そして耳の病氣を病氣になさつては、耳で命をなくするかも知れないと、御心配になつていらつしやつた先生。それなのに、……、海邊の町にとる赤い灯の陰に、死の影の刻々に迫り來つたとも知り給はて、御機嫌よく御酒を召上つて湯あみなどして御やすみになつたとか。あゝ。あまりにいたはしい先生の最後。

肉親の手にも抱かれず僅かの人々に守られて、あまりにあへなくなり給うた先生。再び御聲を聞きたうございます。悠長な足音を聞きたうございます。校門を入つてふと見やる、校長室の窓におろされた白いカーテン、廊下を通る時鐘に映る先生の肖像額、御愛用のグリーンの文庫は、誰によつて開かれるのでせう。主のない室はあまりに淋しうございます。お慕はしさの餘りつい縁言を申しました御霊よ安らかに眠りませ。

櫻井先生を憶びて

四年 遠藤 イチ

校長室の前を通る度に櫻井先生を思ひ出す。大きな椅子に腰をすゑられて何時も文を繕かれておられたことが、幻になつて眼前に浮んでくる。脊の高い何時も質素な御身なりでいらつしやつて、にこ／＼あそばしてゐられた。あの先生が思ひもよらぬ死出の旅に立たれたことはほんとに惜しくてたまらない。それに卒業近い私共は先生の御名による卒業證書を頂けなくなつたのが殊更残念で

たまらない。しかし先生の御精神は我が學校に漲つてゐる、私等はそれを體して、先生の教子として恥しからぬものとなつて卒業しやうと思ふ。みたまよ幸に静けく眠りませ。

櫻井先生を憶ふ

四年 新妻 チウ子

私が三年の時櫻井校長先生の修身の時間に、「先生本を忘れて來ました。」と先生のお机の傍で云ひますと、何ともおつしやらないで先生が御自分の頭を二度人指しゆびで軽くお突きになりました。そして仕方がないといふわけでせうか「はい」とおつしやつて頭をおまげになつたので席に着きました。たが、さて今先生が頭をお突きになつたのは、何の譯だらうな、私の頭が悪いから氣をつけなさいといふ意味なんだ、う等と時間中の半分はその事ばかりを考へ、先生のお話はさつぱりわかりませんでした。この事が思出されて仕方がないので、それから授業時間中に前齒の一本缺けた口をお開きになつて「あゝたがた」がと語出される聲が今て

も思ひ起せば、すぐ耳元に聞えて来る。それに今は天國へ旅立たれたとはどうしても思はれません全く夢です。

櫻井先生を憶ふ

四年 千葉 とし

人生はほんとうにはかないとは何時も聞いて居ることではありますけれども、この度櫻井先生のおなくなりについて、一層はかなさを感じました。二三日前迄はあんなに御元氣で水泳までなされた先生が、突然黄泉の客となられようとは、誰が信じませうか。たゞ夢とばかりに思はれました。けれどもそれはほんとうなのでした。何時も御教授下さる時など、修身の本と出席簿とを脇に挟み、じつと下をお向きになつてお出でになり、短いけれども二年といふ間、私達をお教へ下さいました。今私達がかうして勉強してゐるのも、悉く先生のお導きであると深く感謝して居ります。先生は非常に御勤勉でいらつしやつて、いつも校庭のあらこちらにお見えになり、松を切つたり、櫻の枝

をおろしたり、或は草花の手入まで、一生懸命なされました。或時などは雑巾までおとりになり、そして私達に範を指示下さいました。私達は少しの御恩もおかへしすることが出来なくてお別れしたことをほんとうに残念に思ひます。今はみたまの永久に安らかに眠りになることを祈ります。

櫻井先生を憶びて

四年 永井 萬龜

校長先生今私達が、御呼び致しても、もう二度と御元氣なあの御顔を拜し、御元氣なあの御聲を聞く事はできないのでございます。七月二十三日、噫へば此の一學期の最後の日夏休みに於ける御注意をして下さいました時の御姿、御聲それは私達にとつて最後の御姿であり、御聲であつたのでございます。私達が入學試験に此の學校の入學式に蒞んだのを初め数々の御式の時のあのいかめしいフロックコートの御様子の中にも何となく慈しみ深くそして親しみやすい所がございました。常に黒い服を召して首をまげて校長室から出ていらつ

しやつた御姿もあの頃は格別氣にもとめませんでした。したが、今思ひ出せば何となく淋しい氣持になるのでございます。七月二十八日、此の日は何と意味深い恐ろしい日なのでございませう。校長先生は此の日小名濱の水泳講習の宿舎に於て夜中より急に苦しみだされ各附添の先生方、長女の外幾様、その他講習生の方々の看護も空しく、これらの方々に護られて、静かにあの世へと旅立たれたのでございます。若し晝間からでも御加減が悪かつたならば御家族の方々もその枕邊に侍する事が出来たのでございませう。然し夜中そして急の事として、只外幾子様のみどなたも先生の御最後を御送りする事はできなかつたので御座います。御家族の方々は何程かその御最後を御看護なさりたかつた事でございませう。先生の身とされても、どんなにか奥様はじめ御子様方を御覽になりたかつた事でございませう。然し運命はそうは致してくれませんでした。先生の御最後は、ほんとに淋しかつた事でございませう。こういうのも愚痴であるとは知りながら何とも致しやうがございせん。先生

は學校の爲、卒業生のため、在校生の爲の努力を惜しまれなかつたのでございませう。御休みになる少し前の修身の時に秋田、山形、新潟等を御視察なされて御出になつた時の御話しをして下さいました。卒業生の子弟の爲、學校内に遊戯場を設けたいとの御考へから、その方面の事も御調べになつていらつしやつたさうで、子供は泥水遊びが好きであるから適當な泥を置き、又危険でない程度に池の如きものなど作つてみたいなど、おつしやつてをられました。この様に有益な事業も先生なき後はしばらく實現されないうせう。先生は又通學服、運動服に付いても諸先生と共に随分御骨折り下さつたのでございませう。その他卒業生と在校生との連絡等あらゆる方面に御努力下さいました。

又家庭に居られては御家の御忙しい時は御臺所の御仕事もなされた日など、慈しみ深い御父様でいらつしやいました。そして先生は常に御忙しい御身体の中にも昔の書物を研究なされて居りました。殊に浦島、兎と龜、舌切り雀、カチ／＼山等

その他たくさん御伽話をくわしく眞偽を御調べになつて居られました。そして修身の時など、その御話しをして下さいまして面白く一時間を過すこともございました。その方面の事で博士論文草稿

中である事など時々新聞に見えて居りました。先生がなくなるにしても博士論文が通つてからかさもなければ御長男の方なりとも御卒業でもなさつてからであつたならば先生もどんなにか御心を安めてあの世へ御出になる事ができた事でございませうに、いくらか御心のこりであつたでございませう。先生私達の御恩に報ゆるために學校の名を擧げる事に力を盡すつもりでございませう。此の土曜日に福島庭球大會に出場する選手の方々も先生の御心に報ゆるため夜はよく迄猛練習をつまけて居るのでございませう。先生どうぞこの學校と庭球選手と私達を御守り下さい。

噫！櫻井賢文先生

四年 堀川八重子
先生逝いて早や幾十有夜。

水の流れすら、行きてかへらざる者は人々にとりてこれ感傷の種なり。

まして逝く者よ！かくてかへらざる者よ！ここに亡び逝く者の前に、長き悲しみの涙あり。またどかへらぬ露の世なれど、在りし日の先生の御姿偲び参らす時、不覺にも落つるこの涙よ！

「あゝ、先生御座せしならば……」

線言告ぐるむべも早や絶を果てし今は、唯ほのかなる香の雰圍氣の中にみあかし見つめて、先生の佛遠く偲び参らすのみ。

靜かに天を仰ぎ見れば、在りし日の温容髣髴として、又警咳に接するに由なし。

いかに叫べばとて、なげまばとて、絶を果てし玉の緒の糸つぐすべはよもあらじ。

想へば果敢なき人の姿かな。

先生に師事してよりこゝに四とせ。

常に露々たる温情の下に育くまれ、今眼前に迎へし卒業の榮冠！

然るに、噫！先生。櫻井先生よ。春の朝日の今將に出でんとするこの曉、むらくも低う空を蓋は

ひ、我等が行手光なし。
のぞみの糸も今はすべなく胸に秘められ、唯く
さくしの想ひ出は、泉の如く湧き出て、涙と
むるに由なし。

あだし野の露、はかなくなりて、消えにし跡の
いと哀れに、凍れる月もいかに一掬の涙を惜しま
ん。鳥部山のふもと近く紫の煙の、幽明の境だに
明らかならざるが如く、すぎ行く時の影にさまよ
う。哀れ世の姿かな。

よどみに浮ぶうたかたの、はかなく消ゆるも哀
れなれど、結ぶすがのある故に、いみぢき程の
事もなし。然れども境を異にうつまぼろし、た
まゆらる想ひ出の泉にうかぶうたかたは、結ぶす
べとてなき程に、去にし昔のいと戀しく、たどる
糸さへ絶えくにて、涙にかはくひまこともなく、
唯々哀悼追慕の情、焰となりてすべてを焼きつく
さん程なり。心亂れてわきまへず。哀れ悲しき事
かな。

在天の師、櫻井先生のみたまよ。

とこしなへに安らげくませ。我等八百の乙女、

今は唯禮拜合掌するのみ。

我等が至情を享けさせ給へ。
あま！櫻井先生のみたまよ！！

櫻井先生を偲ぶ

四年 大柴 幸子

あま。櫻井先生。いくどころかお喜びしても、先
生はもう永久に私達にやさしい言葉をかけては
下らないのです。

先生のみ霊送りでいく日――。

いつもならはち切れ相な輝かしい喜びにみちて
ゐる二學期初めの校舎の空氣の何と云ふ淋しさな
のでせう。

一度別れたなら、又逢ふことも出来ませうに、
あま、けれど先生と私達とは、幽明境を異にして、
どんなことをしても、もう永久にお逢ふことは
出来ないのです。

火葬場へ先生のお柩をお送りする時、あの暗い
夜道を先生のお跡を守りながら、私達はどこまで
も、どこまでも歩いて行きたうございました。

お葬式の日――あの長いしめやかな列の中のど
こかに先生のお姿がある様な気がして、何の氣も
なしに先生のお姿を探さうとしても、その探す先
生のお葬式をみんなてしてゐるのだと思ふと、ま
た泣けて――仕方がないのです。

出席簿をお持ちになつた先生が、向ふの廊下の
角をまがつて校長室へ入つて行きさうな氣がしま
す。他の先生とお話をして笑ひながら校庭のどこ
かに一生懸命に作業してゐてなかつたお姿が目
にちらつきます。

シャツ一枚で弓と矢をお持ちになつて射的場へ
行らつしやる先生の後姿が見えるやうです。あま
けれど、どこを探しても、もう先生のお姿はあり
ません。誰もゐない校長室には先生のお寫眞が淋
しくかけてあるばかりです。そして先生が一生懸
命作業してゐなさるお姿が、射的場で皆と一緒に
弓を張つてゐなさるお姿があつたりと私達の頭
にこびりついて居ります。先生のおかたみとして
残された庭球場で選手の方達は十月の試合に負け

じと涙ぐましいまでに一生懸命、ラケットを振つ
て居られます。放課後、あそくまで、熱をこめた
ボールの音が着い高い秋の空にひびきます。

あま、櫻井先生、思ひ出はどこまで、どこま
でも櫻が丘の校舎をめぐつてくりひろげられてゆ
きます。そして先生は今、どこにどうしてゐて
でせう。

あま、なつかしい先生の御靈よ、永久に安らけ
くお眠り下さい。

櫻井先生を偲ぶ

四年 佐藤 千代

秋の夜半である。自分はふと目がさめた。

而し金屬性の物の様に情味をかきまない。そぞろ
哀愁をそめる様な虫の音を幽かながら意識した。
静かに立つて戸戸を練ると、月は煌々と照り、星
は莞爾として自分を迎へてくれた。しばしは只、
大自然の偉大さに黙するのみ、この沈黙を破つて
活動歸りの人でもあらうか、俗語じみたものを口
吟み乍ら、前の通りを過ぎて行つた。歌詞の全部

はよく聞きたれなかつたが「人の命は草葉の露よ……。」と云ふ一節は何故か自分の心に強い刺激をあたへた。ほんとうに昔の人の云つた通りだ。人の命は儚い、草葉にやどる朝露のやうに、否もつとはかないかも知れぬ。そして昨日まで共に遊び共にたはむれし人域も今日と云ふ時の判きの元には、はや幽明境を異にせぬばならぬのがこのうき世の定めかも知れない。

されど、櫻井先生の死は自分にとつてあまりに偶然であつた。あまりに残酷な仕打であつた。思へば七月二十三日の終業式にはいつもの様に種々と休中の注意をして下すつた先生であつた。あの時誰か、先生の死を豫感したものがあつたらうか。もし豫感するものが出来てあの日から介抱につとめたならば先生の尊い一命は取り止め得たのではあるまいか。そして今頃はすっかり回復されて、慈父の様な態度で再び自分達に接して下さつたのではあるまいか。さは云へど、神ならぬ身の誰が豫感し得よう、何と云つても今更しかたがない。すべては過去となつてしまつたのだ。人力で

は時の威力をどうすることも出来ない。人間は現在にもがくことさう許されて居ないのだ。一分後の將來も一分先の過去も人力のいかんともし難い世界なのだ。春秋は又めぐりくるとも、自分達には、故櫻井先生と再び逢ふことを許されてないのだ、もし許されるとすれば、それは唯追憶あるのみ。

先生は草木を愛せられた。そしてすべてのものを愛せられた。秋晴の日の午後などに、鋸を手にした。チョッキ姿の先生を防風林のあたりに見受けることも度々であつた。奉安庫の出来上つた時にあたりには木を植ゑ付けたり、垣をむすんだりされたのも先生であつた。こんな仕事をしていらつしやる先生に對しても自分達は常に威厳ある親昵を感ずる事ができた。先生の瞳には力強い輝きがあつた。そして尊い何物かぞひそんでゐた様に思はれてならない。その神秘的な何物かに愛撫された自分達の過去はほんとうに平和であつた。先生は修身の時間等によくおつしやられた。涼しい眼の所有者であれ、そして優しい而し外來物に反抗

するだけの強い力を持つた女であれ。」と。當時は何心なく聞いてゐたのであつたが今の自分には、非常に尊く思はれる。自分達はなぐさまい、そして尊い先生の言葉をモットーとして進むべき道に突進し、せめても先生の御霊をなぐさめしやう。月は冴え、夜は更けて行く、あの廣々とした櫻が丘もこの月に先生を慕ふてゐるのではなからうか。青白い薄あかりの中に廣大な姿をよこたへて。

さらば遙かなる師の君よ、安らげくあれ。

櫻井先生を偲ぶ

四年 鈴木 トヨ

校長先生がなくなりましたと。かなり遠くの私の家までわざわざしらして呉れた友人を迎へたのは、暗い憂鬱な夏の宵であつた。

あれから校葬の式を夢の様にすごした後も、また夢のやうなぼんやりした日が、ひとりてに來てひとりてに過ぎ去つた。

何かのまちがひであるようにと思つたのも幾た

び、夢であることを念じたのも數度。しかしすべてはくつがへされた。もうとりかへしのつかない夢ならぬ現實であつた。

悲しい校葬の式後、かなりの日を送つた今日此のごろですらありし日のみやさしい先生の面影は、ともすれば小さな教へ子の胸を打つた。

朝禮の式に胸をしづめて、じつと待つてゐる教へ子の心にしづかに重々しく歩んで來られる先生の靴の音はもう聞かれなくなつた。

先生のお顔を見、御聲を聞いて、はじめてその日を心強くすごすことも出来たものを。

廣いお庭の手入に餘念ない先生の氣高い御姿も、もう見ることは出来ないのだ。緑いや増す常緑木を、芝生のそれを見るにつけ、何ともいへぬ想が胸ねちを苦しく過ぎた。

一歩々々、光明の天地へ導かれるようにも思はれた先生の御講義も、もう望まれないことなのか。秋の運動會は近づいた。しかし先生はいらしやらない。

私達の卒業も間近なのだ。しかしやはり先生は

いらつしやらない。
みやさしい先生の微笑に護られながら、思ふさま跳びをどつた、過ぎし日の運動會は、何といふ祝福されたものだつたらう。

はな／＼しかるべき卒業も先生の笑顔に送られたのなら、無知の世界へも、どんなに力強く入れたらうと、今でもしみ／＼、思ふことがある。しかし總べては空に歸した。

絶望?!.....否!

私達はたゆまなかつた。勇ましくもふるひ立つた。しかもそれには萬動的の強さがあつた。

ありし日の先生の御をしへのまゝ何處かに先生の御霊が私達を守つてゐて下さる事を信じつゝ、勇敢に向上への道を進むべく努力の二字を見出した。

先生はなくなられても、私達は先生の無言の御をしへを目標として、たゆまず勵んでゐることを、私は先生に告げたい。

これからどんなに多くの日が来やうと、過ぎようと、私達はたと勵むばかり、高き目標への道を急

ぐばかり.....。
先生のやさしい微笑や、静かな御講義を偲ぶとき、私はこのような想の流れを、胸の奥底に感じた。

あゝ櫻井先生

四年 草野 セツ

先生!先生は逝かれたのだ。遠い天國に。不滅の都に、旅立たれたのだ。

あゝそれは現實であらうか、否!!違ふ。

今現に先生と自分はお會してゐるぢやないか。

今先生の瞳は自分を愛撫してゐる。

御聲は自分を頼つてゐるぢやないか。

あゝこれが現實であつたなら、

このまぼろしが實在であつたなら、

でもそれは架空事なのだ。

そして其は追憶といふ忌まはしい語にて永久に持ち去られて終ふのだ。あゝ惱しい。

それでも神は、造物師は。

人生に幸!!奇望!!嬉!!とを。

與へたと云へやうか、否!!違ふ。

神は人生に死!!絶望!!惱!!とを與へたのだ。

神は皮肉だ!!造物師を呪いたい。

死が普遍的でそうして.....。

必然的である事を呪いたい。

天國にお在す先生に幸あれかし!!

櫻井先生をしのびて

四年 吉田 富子

大いなる幸福は突然消えて行つた。そして其處にどうする事も出来ない暗い淋しい空虚がある。明るい光の朗かに湧き出づる青空の下に只無心に遊んで居る時、愛くるしい喜びを告げて鳴く鳥の歌に胸躍らして耳かたむける時、さうした楽しい現實にある時でも、時々どうにも出来ない淋しさが頭を掠めて行く。立去り兼ねて暗い過去は自分の頭を往來する。先生はもういらつしやらない!!呼べばとて叫べばとて.....。あゝ再び幸福な日が戻つて来やうか!。人間の手でどうにも出来ない思ひもかけぬ事だつたんだもの。呼べばとて先生

がそしてあの幸福の日が戻つて来やう筈はない。運命の神は人知れずその黒い翼を大らかに羽ばたいて落ちて来る。私達にはそれが見えなかつた。物の表面のみしか見えぬ瞳を持つた私達だつた。それ故にその黒い手を拂ひ退け様術もなく只惨たらしい運命の仕業を黙つて見てゐた愚かな私達、けれど愚と云つてどうしやう。私達は人間に過ぎなかつたんだから.....。自然の偉力の前に黙つて屈伏せねばならない力弱い人間だつたんだから.....。先生の白い霊は靜かに永遠の天國に召され行つたものとして諦め祈りはするものゝあゝ何故先生は私達を残して逝つて了はれたのだらう。先生故に慕へる乙女等の快活さ故にさながらエデンの園の様だつた櫻ヶ丘の何と云ふ淋れ様!こんな空しい今日の日があらうとかつて想像した事か。明日と云ふ日は楽しい、人はその一切の望を明日と云ふ未來の日にかける。そして今日よりも更に美しい明日ならん事を信じてゐる。感謝の今日と希望の明日とあつて人生は美しい。明日はそれ故に尊い。私達も矢張さうした楽しい明日を待つ人

間だつた。誰がその美しかるべき日の暗黒の今日となつて現はれやうと思はう。運命の手ある事を知つてはゐても昨日今日とは誰が思はう。思出の果は悲しい。返りもしない愚痴のみが出る。だが……矢張り一度先生の楽しい笑みに會ひたい。幸福の笑みに接したい。けれど私達は人間である……。

青空はどこまでも廣く碧くそして澄んでゐる。母様の瞳の様に。その下に海は矢張り美しく力強くそして廣い、父様の胸の様に……。その青空と海との間から幸福はしみんと湧いて来る。青く柔らかい清い息吹に、地平の彼方よりの美しいメロデーと共に、そして此の幸福に包まれて乙女等は只酔ひに酔ふ。碧空の奥深き神秘に憧れつゝ、海の不思議に驚きつゝ……、あゝその幸福の海邊小名濱の白しぶきに微笑ひて立つ先生の姿！。幼い友が先生に手を引かれて泳いで居る。そこに小鳥の様な楽しいさざめきが起る。泳ぐ度にぱつと白しぶきが立つ。先生の日に焼けた顔が快活に笑ふ。そしてその時あの印象深い黒いうつ

ろが齒並の中にチラと見えてなつかしく……。日は高くすべてが幸福に輝くもう一度バツと白しぶきが立つ……。はつと現實に返つた時それ等はすべて消え失せる。あゝ夢だつたんだ淡いはかない夢だつたんだ。さう思ふ時たまらない淋しさと空虚が自分を取巻く。そして暗い失望と涙のみ先生に接する誰もが幸福のあたゝかい光を感じたものをその温かさの今はない……。瞳を閉ぢると青白い月光をよぎつて天に召され行く一つの白い影が浮ぶ。追ひ縋つて捕へやうもないその影。けれど其時自分の心が叫ぶ。

「先生、静かに慈なく天にまかせ、先生の靈よ永久の幸のみ空の星と輝きませ！」

その後から又別の心が叫ぶ。
「先生、櫻ヶ丘の黒い土にも淋しい秋風が吹き初めました。けれども先生が再び歸つていらしたら私達は幸福でございます……。」

諦め様として諦められず美しい過去と暗い過去と入り組んで胸の中は思ひみだれる。けれど思出はなつかしい。涙のかげから美しかった過去を懐

しむ。思ひ出す、齒並の中にチラと見える黒いうつろを、なつかしい笑ふ、そして……遠い日の微笑よ、思ひ出の……。

思出は皆美しい。四年の夢の若草に、メロデーの美しく流るゝ青芝に、テニスコートの黒い土に昔の夢の一杯にこぼれては漂ふこの櫻ヶ岡……。

今も……青空はありし日を思はせて廣く深くコバルトに澄む、その蔭から聲が聞えはせぬか、白い雲の切れがボツカリと浮く、森の中で小鳥が愛らしく囁つてゐる。すべてが思出の種であるそれ等のもの！青空よ、海よ、小草よ、黒土よ、そして小鳥よ。

私と共に祈つてお呉れ、先生の幸福を。そして私の永久の思出の友であつてほしい……。

櫻井先生に捧ぐ

四年 菱 沼 貞 子

呪はしの日、あゝ二十八日！何てあそろしい日でございますたせう……。校長先生のはかなくなられしとかな……。私達七百餘人のおどろき、な

げさ……。私達は祈りました。其の事の夢である事を……。でも……遂に少女子達の清い祈りも取り上げられない……。あゝ夢であれかしとあれほど願つて居りましたのに、其れはあそろしい……眞實でございました。

あゝ校長先生！かぎりなく私達を愛し、いつくしんで下さいました先生、なつかしの慕はしのみ優しい先生よ！どうして私達教へ子を殘して唯一人て遠い……天國に行つてしまひになりまして……。いくら運命とは云へそれではあまりに……無情すぎます。後に殘された教へ子達は、淋しい……學び舎にすゝり泣きながら、開路を辿つて居るのを御存知ないのでせうか……。かぎりない貴きみ教への下に、やさしくお導き下さいました校長先生！。何故に此の世をお去りになつたのです。もう一度淋しくなつた學び舎に歸つてみ優しいほゝろみを見せて下さいませ。そして賑やかにして下さいませし、七百餘の少女子達はみやましいほゝろみとなつかしい先生のお言葉が欲しうございます。思へばあの終業式の日、慈父の如く温

和なほと多みを浮べて、私達の前に立になられ、呉々も体を大事にする様にと御注意下さいました。あの日か思ひもかけない最後の／＼永久にのお別れてございました。

終業式の日!! 楽しい夏休を前にひかへた此の日のお別れは、眞黒になつて体をきたへ、そして又二學期にお會ひ出来る輝かしい望をもつてお別れしたのでしたのに、誰が／＼最後の、永久にのお別れてあらう事を豫期しませう。

八月二日!!。それは悲しい／＼そしてほんとに最後の別れてした。あれほど凛々しい先生のお姿は小さな白木造りのお箱に、白い、ましろいみ骨となつて納められた、はかない／＼お姿に變つて居りました。校長先生!! 私達は其の時どんなに泣き悲しんだでせう。そして運命のいたづらを呪ひました、先生を返せ……とも叫びました。然しそれも皆はかない望み……。

あゝ先生、校長先生!!。もう一度こうお呼びしたい。でも／＼今は幻のはかない影のみでやつぱり此の世の先生ではございませんでした。

あゝ、思へば思ふほどあの七月二十八日は、何て呪はしい日なのでせう。私達は此の日を永久に忘れません。いゝえ、忘れないのではない。永久に私達にとつては呪ひの日なのです。私は呪ひます此の日を……。

せめて幾日なりともお床に臥していらしたのなら、七百餘人の教へ子達の眞心をめて、神にお祈りしておなほし出来たであらうに……。そして若しも私達の生のかぎりをつくしてもおなほし出来なかつたのなら、それは天命として淋しくあきらめもしました。けれど／＼唯の一夜の中に、いゝえ、一瞬間に、あれほど元氣でいらした先生を奪ひ去つてしまつたのですもの……どうして／＼泣かずに居られませう。

たとへ泣いたとて、どうにもなりはしないけど、その涙の一滴でも先生の心にとそぎたい、先生もさつと／＼天國で此の地上の學び舎に淋しく泣ける私達を思ひ出してともに泣いて居て下さるでせう。泣いて下さい先生。私達も泣きます／＼心ゆくまで今夜は泣きます。

先生、私は一思ひにこゝまで書きました。時計は今十一時を報じました。そして淋しい静かな月夜でございすの。空には一面に先生の御霊とも云ふべき無数の星がまた／＼いて居ります。

校長先生!!。いつも此の星達にまじつて、そして一掃光り輝いて下さいませ。残された私達は、はるかに輝く御空の星を唯一の望として又、先生と思つてこれからは雄々しく、進んで参ります。此れがせめてもの亡き先生への花向と存じますから……。

やみさしの先生!! どうぞ／＼遠い／＼天國から私達をお守り下さいませ。さらばなつかしき先生!! 永久にやすらかな夢路を辿る先生。どうぞ／＼天國に静かにやすみなさいませ。

櫻井先生を想ふ

四年 上 澤 せい

質素なおみなり。すらつとしたお姿で、にっこりとほく笑まれる時どんな悲しみも憂も忘れさせて下さる先生……。私等を三年餘の月日校長先生

としてお慕ひ申しました。或る時は教壇に、ある時は楽しい校庭に……。それが如何なる神の悪戯でせうか。皮肉でせうか。神はそのうるわしいお顔を、いつくしみ深いお顔を、遠い／＼天國の彼方に送つてしまひました。吹く風もなまぬるく青葉の繁みに吹きつけてありとあるものゝ暑さを語る其の時、私等の楽しくもあり、亦苦しくもあつた一學期も最後の日は來ました。校長先生はあくまでお健やかな御顔を以て終業式の御挨拶を述べ下さいました。おゝ思ひはそれが最後の言葉であり、最後の御顔であつたのです。先生にとつて私等にとつて魔にも譬へませうか。あの小名濱の水泳講習を……。私等生徒と御一緒に過しなざる、あ心でお楽しくお家を御出發なされたでせうが、はからずも冷たき体とお變り遊ばされて我が家に運び入れられるとはどうして知り得ませうか。長い病床ならいざ知らず、一夜にしてあの世の人となつてしまつた先生、ありし日のお健やかさを想ふにつけ、語るにつけ、私等はいくらなげいても、なげいてもなげきが盡きません。

櫻井先生を偲びて

四年 櫻井 敏子

思ひば昨年夏のことでございました。私等一同は小名濱の臨海學校に行つて水泳を練習することになりました。それは十日間といふことでした。その半分は涼しい日がつゞいて居りましたけれども、それは何時にもなく日のよく照つた日でございました。午前十時頃から、皆水着に着かへ海へ出ました。砂は足の裏に痛みを感ずるほど暑く焼けて居りました。色とりどりの水着が水の中に入つて一層美しさを増し、白い鉢巻に赤い線私等は誰にも劣るまいと一心不亂に泳いで居りました。それを御覧になつた櫻井先生は、皆の様子を眺めていらつしやいまして、出来ない人があれば手を取つて御親切にお教へ下さいました。私も幾度か先生のお教へを受けましたこととせう。

あの青い大海原の一角、校長先生は黒い水着に黒い鉢巻をし、小波にゆられながら愉快さうに、慈みの眼を私等にお注ぎになつていらつしやるお

姿は今も幻のやうにぼんやりと浮かび出ます。あの快活な先生が今年の夏昨年と同じくお出になつた臨海學校で亡くなりにならうとは、誰が思ひましたらう。此上は如何に悲しんでも詮方がありませんから先生の御教へをよく守り、先生の希望せられた女性となるの覺悟を以て、先生のみ靈に額づき誓ふ次第であります。

櫻井先生を偲びて

四年 船生 たか子

眞夏のやけつくやうな日に友達と濱邊で遊んでゐた其の時突然友の一人より櫻井先生の死を聞えたその時は氣を失はげかりに驚いた私は死と云ふ一字を聞えて眞實とは思はれなかつた「死」そんなことがあるものか心を上げまし打消したものの、然しそれはむだであつた先生の靈前に立つた時は何事も云ひなかつた只涙がにぢみ出るばかりであつた。

あゝ！私達はどうしたらよいとせう。光明の世界より突然暗の世界へ落ち込んだ其のいたましい

姿を見るとき私は胸に針をさされるよりも苦しかつた。我々は今此のやうな境遇である。只歎息を

もらすばかりである。生徒のために身を捨てゝと云ふ情深き心強き決心で何事もして下さつた先生、生徒から信用厚く生徒の心を理解して下さいた私達は父母以上に親しみを持つてゐた。いつも修身の時間には色々と社會の事について又私達の社會に踏出すに就ての覺悟等を話して下さいた。教壇にお立ちになつてゐる姿が眼にあり／＼と見える。あの丈高い先生、徐ろにお話しを始める。あの聲どうして我々は先生をお忘れすることがありませうか。あゝ、また運動會も近くなつたもう一ヶ月とはないのである。あのすつきりしたお姿で胸に徽章を附けて會長席に於て一人笑くぼを寄せ、ほろ／＼とゐるお姿どうして私達の心を奮ひ起さないで居りませう。

此の度の運動會にあつた雄々しいお姿が現はれないのか知らと思つた時は、眼には白露がふるへてゐた。先生の御在世中は生徒はどんなに快活で生々してゐたてせうに死後の私達の心は淋しく

先生の面影を浮べては手を合せるのみであります。

友へのたより

四年 遠藤 ヤツ

きり／＼すなく山里の夕亡き人を偲びつゝ、御懐しい昔々様へのみ便りに、たど／＼しい筆を運んでゐます。しどまな光に暮れて、宵闇はほのかに訪れました。晝のはげしい太陽が美しい晝の色を残してなごめば、後はなんて静かな色とせう。こんな平和そのものゝ光に接しますと、私の心には逝きませし先生の面影が涙ととも浮出ます。「先生どこへ……………」お葬式に……………」と屈託もなく笑はれた先生のみ聲が、これこの道の邊の小草にも、エンヂンの煙とともに、ひめられるぢやないでせうか……………」と耳かたむけて吐息しました。

「お葬式に……………」とのたまはれた先生が今は亡き人、空身の浮世をうらまねば、なんてこの悲しみの胸ねちがみちませか——。千草にすだく蟲の音さへ逝きませし人を、想ふが故にさみしく／＼

ふるへてゐます。
ふと私は紫の螢草を一輪つみとりました。途端、七月二十八日の追憶がしみ／＼と私の胸によみがへりました。

その日は八時頃御長逝を耳にしなければならませんでした。でも信じませんでした。はやる心を抑へてすぐ小名濱に向ひました。悲しいことは先生の御臨終を飾るは美しさをほこる眞紅のダリアのみでした。

師の君の逝きにし海は夕しづか

濱月見草ゆれて悲しも

先生の御宅ではかくて新な香の煙が立昇り、美しき花輪が飾られました。之を見るにつけても流るゝ涙はとめどもありません。あゝわれら乙女が永劫の痛手。

廿九日はふりの日。あくる朝の骨拾ひ。私はつく／＼離別の悲みを味へました。

二日の日すぐ古里にかへつて、なつかしの山に森になぐさめられて、しばしゆとりを見出すと、心のいつこかに今迄味つたことのない淋しさがひ

し／＼と打寄せてくるのでした。野邊に青む草が私の心を淋しくさせ、小川の水には先生の面影が浮び出ます。あゝ悲しんでも限りない悲しみに、涙を落して私達を、みなつかしい先生は、今何處の里で眺めていらつしやることとせうか。こほろぎの音を獨りし／＼聞く夜など、今更ながらはかない人生の淋しさが胸深くくひ入ります。皆さ先生のみたまが安らかに黄泉路を辿らせ給ふやうに祈りいたしませう。

櫻井先生を憶ふ

四年 只野サワ

薄すみ色のベールの様な夕闇が地上をこめてたど道端の街頭は夢見る様ほんやり輝いて居る。

空叩く雨の音も何となくねむたさう。

しつとりと重い空氣の中に金木犀はかすかな甘い花の香を物思はしげにたどよませて居る。何げなしに手に取つた課題の紙。

今は永遠の旅へと旅立たれた校長先生のみ手によつてなされたものを。

櫻井先生を偲びて

四年 生田豊子

あのデリケートな葉と花がよく静寂な秋をあらはして居るコスモスのそよ風にもたゆたう頃となつた。秋、秋、たどてさへなやましい秋のましてそれにふがまれる先生の笑顔。

永久の眠りにつかれた我等七百の師の君。

もう力強い慈愛に満ちたお聲を聞くよすがもな

く……………
青海の様に胸廣い先生のまはりに黒い死の手のたどつて居たとは誰が豫期した事でせう。先生のゐるまゝの學び舎の十月はほんとうに冷いのです。コッ／＼靴音してどうにもひらかれそうなのアをざつと見つめる今となつてしまひました。七月を最後として私達は幸福の絶頂をすてねばなりませんでした。皆夢でした。

白日のまどろみにも似た一瞬の夢の様に。

何といふはかない此の世のさだめ……………くり返す事の出来ないのが人生故、朝に夕に絶えず御心

白き紙片の幻想はたゞありし日の師の君が、ほろ／＼のみのみ……………臉に宿つた涙の露は灯の色はうるんでふるへさせました。

思へば何といふ人生は果敢ないものであるのかみ空の流れ星よりも尙早く——久遠に……………

かげらうにも似た人生！

始めて人生の果敢なさをしみ／＼味ふ事が出来ました。

今迄は樂かつた嬉かつた夏休、でも今年からは灰色の夢を秘めた夏休と變つてしまひました。

清くしほらしいコスモスの咲きこほろぎの、はかなげに聲する物淋しい秋、北風のはだをさす冷い冬、櫻咲く陽春の日、海に山に人々の騒ぐ夏が再びめぐり來ても私達にとつてはたゞ悲しい思出のみ。

いつも幸福のかげには悲哀のひそんで居る事を知らなかつた七百の子に忘れ得ぬ心の傷手をうゑつけた小名濱——懐しい學び舎にも先生の御姿は二度と……………

噫！なつかしい櫻井先生。

をおくばりになりましたらう。先生のありし日の
お姿を誰もゐない校長室にかまげた徳の高い賢明
な先生をおしのびするばかり。

呼べど叫べどもう再び先生は私達の胸にあのな
つかしいほゝろみをなげては下さらない。

幸福のかけにはいつも悲しみが秘められてある
のです。たゞ今はしみ／＼と薔薇色の光降る日を
幸多く過した七月前のあの楽しい夢の破片をさが
したい。思ひ出の小名濱の渚に或はあるかもしれ
ない先生の靈に對して安げくとしへにあの世に
眠られん事はかりを祈つてをります。

先生をお偲びして

四年 櫻田 サト

そんなに大して病氣でもなかつたのにわざ／＼
小名濱から見舞にきてくれた叔母が、いろ／＼の
話の末に漏らした『平の校長さんが亡くなつたさ
うで…………』の一言はギクツと私の胸をついた。
校長先生つて一体どなたぞらう。まさか私の學校
の先生ではあるまい。と思ひながら尋ねてみると、

いつもお優しく、ニコ／＼していらつしやつ
たお顔が、ぼんやりとした眼にうかんでくる。何
ともいへない苦しい思ひが胸一ぱいになつて、熱
いものが胸をおしつける様にせまつてくる。

その夜は先生の御姿や、學校のことなどを夢に
見たりして、ねぐるしかつた。そしてねむれぬま
ゝに過去の思ひ出に明したのであつた。

櫻井先生を偲ぶ

四年 馬目 文子

真白い歯を見せて、慈父の様な微笑を浮べつゝ、
あの低い力強い聲で、面白い御伽話などして下さ
つたありし日の優しい櫻井先生。

少し、伏目になつて考へる様にぢつと前の方
を見つめられる先生の嚴めしい顔……………微笑……………
見上げる様な長身を教壇に直立させて講義をな
さるときの御姿!! 悲しい追憶にありし日の先生を
偲んで涙するばかりです。

あまりに平和だつたこの學び舎から……………私達
から……………優しい先生を奪ひ去つて、私達を悲し

やはり櫻井先生のことであつた。

私はしばらく口を開くことができなかった。あ
まりに突然のことであつたから。そしてあまりに
意外なことであつたから。家の人も皆恐ろしくそ
ういふ氣持であつたのだらう。誰も直に話出するの
がなかつた。しばらくしてから叔母はお歸りにな
つた。

「まさかうそではないだらうね。」私はそれが事
實と知つてもうたがひたかつた。

その中に父兄會の方々があつたになつて何かお話
をして行かれた。あゝ、やはりおなくなりになつ
たのだ。

九月から學校へ行つても、もうお顔も、お姿も
拜見することができないのだ。ましてあの御聲も
おきこめないのだ。

二月も先生の御姿に接しない私は、私たち全生
徒への最後の御訓示である終業式のいろ／＼のお
話もつひうかゞうこともできなかつたのである。
病氣とはいひながら、今更どんなにくやんだつて、
悲しんだつて、いたし方がないけれども。

みの底につき落して冷たい嘲笑を残して去つて行
く運命の無慈悲さを怨まずには居られません。幸
福の頂上から不幸の底に落された私達教へ子は悲
しみの中にも心を引きしめて、先生の御教を胸深
く秘めて學びの道に進んで居ります。四年になつ
てこんな悲しみに逢はうとは思つてゐませ
んでしたのに、今更返らぬ戀病を繰返さずには居
られません。

先生!! 私達を優しくはげまして下さつた先生の
面影を抱いて懐かしい學び舎からはなれてまゐり
ます。あゝなつかしい櫻井先生!!
先生の御靈の上に永久に幸あれと祈るばかりで
御座います。

櫻井先生を偲ぶ

四年 今井 キクノ

雨のしよぼ／＼降る日だつた。「おはいりなさい
……………」あまりに優しいお聲が後から聞えました
そしてしつかりと脊高いその御体は何故か私達を
ぢつと見下ろしてお笑ひになつて居るのでした。

——慈愛に輝く御顔が笑のうるほひであふれるほどに。——私達は恥しみの爲、うなづく事も出来ませんでした。

「お頭がぬれますよ、お入りなさい……。」又一本ぬけた齒をあらはに白くお笑ひになりました。……あの御姿慈愛の外には何をもちたぬあの御姿、それは過去に於いての心情の蕾が美しく開いたその儘の御姿でした。否もつと、偉大なる花として咲かんとした蕾ある心情の持主で御座いました。あはれ文學を標榜して……あゝだのに開ききれない蕾として永遠に冷き地下へ沈み行つたのである。永遠に生きようとする心こそ即ちその蕾ある心情であり人類を導き育む若人の命であるのに……。

あゝどうしても先生は生きなければならなかつたのだとしてもつと、私達を善に導き下さる御約束であつたのに。あゝされど先生は死の際まで美しかつた。恰度弱々しい夕映が淋しく色どる様にあまりにはかなく美しく逝つて了つた。あの御姿——慈愛のひとみ。あゝ亦笑つて居らつしや

る白い齒を見せて、先生幾度呼べど返事をしてくださらないですか……。歸つてはくださらないですか。あゝ永劫に聲のない先生……。「淋しいから歌ふのだ。悲しいから歌ふのだ。怖しいからどるのだ。忘れたいから夢見るのだ。あゝ唯それだ。」ふといつか見た本にあつたこの言葉、私の心にしつかりとくつきて居てはなれませんでした。極も遠く去つて了つたのに思ひ出はいよ／＼のつて來ます。そしてありし世の追憶のなつかしさは清い／＼涙となつて報いられます。恰度鐘の餘韻が長く／＼傳はりひろがる様に追憶は果てないでも悲しむばかりが先生への眞の手向ではないのだ。冥福を祈らう眞心こめて祈らう。

日光見學記

第三學年 旅行 隊

五月十三日

午前六時五十九分、平驛頭の賑はしい聲々を後に、初旅への途に就く。磯原あたりからは乗込ひ友達も絶えだが車中は一入の賑しさを増して活

氣づく。

那珂川邊は瞬く間に過ぎて、汽車は段々南へ南へと走る。水戸で三十分の市内見學を終へ、此處から小山行に乗り、左手に筑波山を仰ぎつゝ小山で日光行に乘換へ、午後三時に程近い頃日光に着く。

曇つた空を打案しながら馬返して電車を乗乗てからは一同徒歩で、清らかな緑の葉に映える岩躑躅の紅を賞てながら、四十八曲りも難なく過ぎて、白樺の林に包まれた中禪寺湖畔の宿に六時半頃着。

夜間は此の大自然を背景に、空高く聳え立つた客舎の一隅に、愉快な茶話會が催され、一同思ふ存分胸襟を開いて興じ合ひ、寢に就く。

五月十四日

午前七時半宿を出て、二荒神社に賽し、男體山を左に仰ぎながら華嚴瀧に向ふ。

眞白い水がああ深い瀧壺に落ち込む物凄いの程の壯觀は一同の心膽を寒からしめた。

折悪しく雨が降りしきるので、合羽や油紙を纏

うて身を固め山を下る様は實に滑稽であつた。

馬返しよりは電車で歸詰にされて、十一時頃、定めめの紙半に着し、一時頃日光廟参拜、流石日本美術の粹をあつめたと言はるだけあつて、輪奐の美、今更の如く感嘆の外はなかつた。三時に旅亭に歸り、それから自由散策の時間を與へられたので、お土産など買ひに外出する者など大分見受けられた。

五月十五日

目を醒すと、昨日の雨は名残なく霽れ、空は氣持よく拭はれたやうに眞青に澄み渡り、山々の新緑に映えて快よく目にしみ込んで來る。

八時、神橋を背景に記念撮影し、憾ヶ淵に向ふ。九時半頃宿に戻り、お辨當を分配されて日光驛に。十一時の汽車で日光に別れを告げ、宇都宮で本線に乘換へ、北に走つて郡山で磐越線に移る。途中汽車に酔つたり、貧血したといふ人もあつたが、先生方の御心配で事なく過ぎた。

七時、平驛に着き、お出迎への諸先生、姉妹と連れだつて、驛前の廣場で、この旅の終りを告げ、

修學旅行 關西方面
通信

各々家路に向つた。……
惠まれた今日の日!! 私達は平の地を離れて東京へと向へました。窓から眺める景色……。晩春の光はうららかに空は青く、線路の両側にほく笑むたんぽぽさへ言ひ知れぬ喜びにふるひてます。躑躅は眞赤な姿で私達の旅先を祝つてくれる様です。勿來の海の青さ、なごやかな陽にてらされた海の面や白い波は、どんなに私達の旅行熱をさそつた事でせう。一面榮畑には黄金の波がたぎよつて果しない真空の下を、黒い長蛇はさんざめき乗せて走つてます。鐵をかついだ農夫は麥の青さ中を、うぬ／＼とねりあるいてます。帽子の先に黄色な蝶が軽やかに羽をやすめて、足下から鳥が一羽飛立つた後は静寂そのまゝの情景です。はるか連山が紫色にかすんでます。空の色が灰色になるにしたがつて東京は近づきました。多くの卒業生とに交はされた挨拶には親しさのみがこもつて、遙かの旅路に淋しさのやうな感じが芽生え

た私達の心を慰めて下さいました。
うららかな陽の光を浴び、眞赤な躑躅のほく笑みに迎へられながら、帝室博物館へゆき、古代文明をしみ／＼と偲びました。
四時すぎ東京日々新聞社參觀、かあい傳書鳩の白い胸毛のおのミきを眺めつゝ、バルコニーから高樓をのぞみ帝都の空氣を思ひさう深く呼吸しました。
五時頃丸ビル着……。今私は疲れた足をやすめておいしい夕食を頂かうとしてます。
これから愈々楽しい旅です。その時々色々通信いたしますから御待ち下さい。
紅、赤、緑の華かな色どりに飾られた、夜の深い都を後に夜の旅の途にのぼりました。でも車中はなか／＼皆はしやいてカルモチンの効果もなく、又今まで足を自由にのびして眠つて居つた私達には、ズク／＼する程と床の上のありがたさが身にしみました。
夜明方水分をもつた空氣が、やはらかな波の上をなめて居るやうな景色。富士を淡いもやの中か

ら見出された時、只あこがれの氣持でうつとりとみとれて居りました。

熱田に下車して神宮に詣てたのは第二日目の午前八時頃でした。古風の社殿の前に額づきました時、私達は景行天皇の御代を偲び、日本武尊の雄々しさを思ひ、境内の一木一草にもいひしれぬたふとさを感じました。これから電車で有名な金城のあたりまで行き、下車してお濠のほとりの道を經て城内に入り金鯢を見ました。流石有名な城だけあつて、天主閣といひ、櫓といひ依然として残れる眞に國寶であると思ひました。松坂でいしお辨當を買つて乗換を待つ間に皆々喜んで認めました。山田について外宮を拜し、間もなく宇治につき内宮に額づきました。神苑の塵一つない清さ五十鈴川の流のすめるさま、何れも私達の心を引きしめぬものはありませんでした。何事のおはしますかぬ知らねども一同泰なさにかしこみて額づき終り、五十鈴橋畔の鳥居前に整列して記念の撮影をいたしました。やがて再び電車にのつて二見につき所定の宿に疲を休めました。あくる朝日

の出を拜まんと早く宿を出て汀を歩いて夫婦岩のあたりへ向ひましたが、折あしく一天かき曇り雨さへ時たま降つて來たので目的を達し得なかつたのが残念でした。十一時發の豫定時までにはなほ多くの餘裕があるといふので鳥羽を見ることになりました。汽車で間もなく鳥羽へ行き日和田に登つて鳥羽港や、伊勢の海や、遠くは三河灣などを眺めました。なほ曇つてゐるので富士山は見えませんでした。かうしてあこがれの奈良についたのはこの日の午後二時過ぎでした。停車場前の旅館に携帶品を置いて、奈良の都の見學に出掛けました。猿澤の池衆女が衣をかけて投身したといふ岸邊の柳ほととに懷しさに堪へませんでした。春日神社に詣てる時、馴れ／＼しくより來る鹿の數多いのは此の世の外心地がしました。三笠山や若草山何といふよい山であらう。東大寺の大佛眞に大きい佛であり二月堂、三月堂の佛もいづれも天平時代の傑作であるとか。夢のやうにふりはりとしたやさしみのある奈良、いつまでも居て見たき心地のする奈良。奈良の夜は生憎雨でした。あくる日

は灰色にけふるしつとりとした懐しい奈良を後にして大阪へと向ひました。流石に豊公の雄圖の跡大阪城の天主閣のあとに登つて見れば、偉大さが窺はれる。されど時の力をいかにせんと皆々そろに涙ぐみました。阪神電車で神戸に向つた時には天候が險惡になつて來ました。布引瀧に向ふ頃にははやばつ／＼ふり出しました。布引瀧を見たのは極めて少數の人でその他の人々は途中で休んで待つてゐました。これから雨をついて湊川神社に詣て、港口を見るのを略して再び車中の人となつて京都に向ひました。京都では昔懐しい五條の橋際の辨慶樓にとまりました。つぎの日即ち五月十五日には先づ桃山御陵に参拜いたしました緑濃い木々の参道を折柄の熱いまでの陽に照されて小砂利をさく／＼とふみ行きました。それから乃木神社にも深く首垂れて詣てました。將軍御生立の家を見て、途にほゑんだつとちを輪とつとみ取りました。三十三間堂の觀音は私達に物靜かな感じを與へて下さいました。それから清水寺に詣て境内の溪流の岸邊にある茶亭に憩ふて御

晝飯を頂き足を水邊近く垂れて疲をいやしました。知恩院に詣て、鶯張の廊を力入れてふみまじたらきよ／＼と音がひびいて私達は思はず嬉しい叫びをあげました。

三時半頃期待と喜びとをのせて、電車が嵐山へと向ひました。清い水の面に遊覧船が浮んで、みづ／＼しい木々はそこに影をうつして、小波は絶えず私達に美しいさ／＼やきを送つてゐました。やつぱり嵐山は綺麗でした。それから北野天満宮に向ひ「學問出來ますやう」とぬかづきました。夜分は隊を組んで京極見物。目もくらむばかりの綺麗な賣店「お買ひやす／＼」の聲がなつかしく私達の胸に響きました。辨慶樓から見渡すと宵に入つた東山は寝たる姿を黒色に星もない空に浮んでゐます。岸邊の灯がゆれて加茂川の水面には低く霧がかかりました。その昔は櫻がざした大宮人の姿をうつした事でしたらう。あくる日は御所や護王神社などを拜し、出町驛から電車で八瀬驛に下車し、それからケエブルカーで比叡山に登り猶七八町徒歩してその頂上なる四明ヶ嶽に腰据ゑまし

らによし。

陽炎や汽車蜿蜒と野路を這ふ

陽炎や、太公望も 居眠れる

陽炎や 野中に眠る 牛一つ

日立銅山の煙突より立昇る煙動くとも見えず。

はつ夏の日のはどかなれば銅山の煙

十 大煙突のけむりうごかず

晝過ぐる頃上野につく、先づ博物館に入り、次

に春陽會の繪畫展覽會を見る。

三時省線電車に乗つて東京驛に向ひ下車するや

直に有樂町なる東京日々新聞社を見學し、總て丸

ビル地下室内の食堂に入りて夕食を喫し、休憩約

一時半の後ここを出て銀座街頭の夜景を眺む。

文明の利器のゆき／＼のしげ／＼れば

尾張町より日比谷公園に出て、青葉を洩るゝ夜

風の涼しさを十分に味ひつゝ休憩約一時間十時四

十分神戸行にのりて東京驛に立つ。

疲れ果てゝ車中の人となるや否

夜船こぐありいびきかくあり

修學旅行の記

只 野 清

五月十一日午前六時廿九分たひらかにと願ひ立つ、同僚の誰彼、生徒の父兄たちあまた停車場までおくりす、一行百二十一名なり。

衣更へて百二十名汽車の旅、日和はよし、野には陽炎燃え、山には青葉滴らんばかりの間々に躑躅の赤きが見え、心地さなが

駿河路を走る汽車の上に夜あけては
遙に見ゆる富士の高山
十二日午前八時十五分熱田驛につき、直に下車して神宮を拜す、古風の拜殿神殿の神々しさいはな方なし、境内は樹林鬱蒼として自ら神霊の地區々たるを思はしむ。ついで古の金城を見る。平城なれども宏壯偉大のさま自ら窺はる。十一時廿五分名古屋驛發、三時十四分山田につく。外宮を拜し、ついで宇治に至り内宮に類づく。社殿は素朴古雅、崇嚴比なく、神苑は清淨瀟灑、布置類なし。五十鈴の清流に口漱げば、清冷透徹の水底に、大小無數の鯉魚無心に唸鳴せり。

五十鈴川清き流れにすむ魚の

ゆたけき見れば此の世と思はれじ

神苑や青葉塵なき眺かな

やがて二見につく。こゝは遊覧の地、幾團體の男女學生兒童の宿泊したりけむ、街頭の雜閑殊の外なり。

初夏のいさごふみつゝ夫婦岩や

あさひ拜まんとつどふ學生

翌十三日朝まだき、夫婦岩のあたりにて日の出拜まんと宿を出てたれど折から雨少しふり出て、拜み得ざりき。

八時頃鐵路鳥羽へ向ひ間もなくつく。下車して日和山に登る。眼下に鳥羽の海を瞰下し、近くは伊勢の海、遠くは三河灣等を眺む、真に風光絶佳。鳥羽、富士北方に聳え、鳥羽港南方にかこまる。

日和山に登りて見ればいくさ船

うかびてゐたり伊勢の内海

日和山ゆ鳥羽の海面眺むれば

あまの小舟のいさりする見ゆ

日和山今日はなくもりそ遙なる

雲井にふじも見ゆといふものを

十時過ぐる頃、鳥羽驛を立ち、午後二時半奈良につく驛前の旅舎奥野へ携帶品をあき見物に出づ。

猿澤の池、春日野、春日神社、若草山、三笠山、三月堂、二月堂、大佛殿、南圓堂の順に巡り六時頃宿にかへる。

大佛はげに大きかりき拇指の

長さは四尺四寸ありと聞く

衣掛けしあとゝも見えず猿澤の

池の汀の青柳の糸

草若き春日の野べに小男鹿の

遊べる見れば物思もなし

十四日午前六時四分奈良驛を立ちて大阪に向ふ。此の日雨降り居り晴るべしと思はれず、されど昨夜の豪雨には似ぬぞやとよき。

五月雨のけぶるかなたに法隆寺

五重の塔は眺められけり

志賀山は彼方ぞと聞き毘沙門を

こゝろの中にあろがみにけり

七時八分天王寺に着き下車す。雨ふり居り歩行うるさし。天王寺公園をへて四天王寺に詣て、金堂竝に鐘樓を見る。明治三十五年に鏤たりといふ

大梵鐘は智恵院や東大寺のそれより遙に大なるには皆々一驚を喫したり。ついで大阪城内天主閣址に登る。礎石殘濠悉く昔の莊觀を偲ぶたねなり。

實に豊公は偉人なりき。難攻不落と謳はれし大阪城は堅固なりき。さはれ時の力をいかにせむ。一行は坐にその雄圖を偲びて感慨無量、流す涙に加

へて豪雨沛然として注ぎ來りたれば、暫し天主閣址の茶店に憩ふ。

名も高さ難攻不落堅城の

天主の址に昔偲ぶわれ

淀殿の自殺の處と立札の

よまれてあはれ廢城の畫

大阪の城址に上り古を

偲ぶ袂は雨にそぼちつ

阪神急行にて神戸に向ふ。

大阪の無二の忠臣片桐の

退隱せしは此地なりけり

間もなく神戸につきまづ布引瀑を見る。ついで湊川神社に詣づ、こゝは參詣の人日々絶えず。

湊川君が流し忠節の

名は末の代もつさせざりけり

長鳴呼忠臣楠子の墓はこれなりと、出雲山麓

三井の義公のたてし石文を拜す

それより鐵路京都に向ふ。

荷足船浮ける見えけり水深き瀬の音る。十六

淀の大川ゆるう流れて

午後五時五十五分京都につき辨慶樓に泊る。感
熱名にし負ふ五條の橋は残れども
東山夜はほの／＼と明けそめて
麓にかすむ五重塔かな
東山夜は明けたれど寝姿の
まゝそのまゝの三十六峰
加茂川の岸に並べる青柳の
木の間を走る電車自動車
京の夜は將に明けなんとすくつきりと
三十六峰姿見せけり
十五日京都めぐり、桃山御陵いと尊く拜まれ、
乃木神社また嚴に拜せらる。嵐山の青葉、保津川
の小舟、而して沿岸所々の石垣に躑躅咲けるさな
がら繪なり。清水寺、三十三間堂、御所、北野神
社、知恩院、圓山公園、八阪神社、豊國神社等を
巡覽し、十六日比叡山に登る。ケーブルカー珍し
く、將門岩懐しく思はる。四明ヶ嶽の眺心ゆくば
かり。鳩の浦を眼下に瞰下し、遙に京都を見渡し
つゝ晝食を喫したる心地いはん方なし。下山して

阪本に至り、汽船に乗りて湖上を巡覽し、石山を
訪ひ、三井寺に詣て、此の夜長等館に宿る。十六
夜の月今宵は明に照りて鳩海の眺一段よし。
三井の月比叡の雄姿や初夏の宵
長等館の望樓に上りて眺むれば近く比叡山聳え
たり。
大比叡の高く聳えて電燈の
さめくあたり今日わがこえし
十七日は沼津にとまる。汽車に乗ること約十
時間、疲れて外へは出でず、絹蒲團に身を包んで
すや／＼と眠る。
十八日上野を出て午後三時やゝ過ぐる頃隅田川
を渡る。恙なく八日間の旅程を了へしうれしさに
八日間の旅路も今日はすみた川
流れも清き心地なりけり
九時すぎ平驛前にて解散し、なつかしき古巢に
もどる子等待ちかねたる由なれど小さきは皆眠り
てあり、しばし旅の物語などして寝につく。夏の
短夜瞬く間に明けたれば、起出で、此の文を綴る。
（七月十六日）

詩華

櫻井先生の詞藻

板谷峠をこゆるとき（昭和二年七月十二日）
消えかゝる火だねひとつを力にて
怒濤澎湃の日本海を眺めて
浪荒き日本海や祖國思ふ
新發田にて
ふる里の越の新發田に來て見れば
旅行中の通信
車に乗れば金かゝる、てくれれば汗は流れて瀧の
如し。僅かなる暑さに、此の身一つをもてあつか
ひ煩ひ、それでもどうやら楽しい旅をつづけてゐ

ます。（その一）

酒田へ來てビールにひたる暑さかな
昨日當地着、山形縣に比べて涼しく候。けふ會
津に向ふ豫定なれど、どうなることやら自分にも
相分り申さず候、中川君はじめ各位によろしく。
（七月十六日）
一、稜威かしこき皇國の 深き恵に浴みしつゝ
二、學びの庭に集ひ來て 睦び合ふこそ樂しけれ
三、關ヶ井風の荒ぶとも 挽まぬ心われにあり
四、松ヶ岡邊の春の花 優しき心われにあり
五、希望の山は高くとも 強き身體し我なくば
六、いかに登らん術あらじ 共に鍛へむ此の身體
七、心ゝに意をこめて 學びの道をたどりつゝ
八、いそしめ勵み極みなき 御祖の國に盡さなむ
九、故松井秀簡大人の太前に
十、天照らすみちやの神のみ光に
十一、君がまごころあらはれにけり
十二、

俳句

一年 植頭 節
赤蜻蛉すい／＼飛ぶや川の端
秋の夜にコホロギ啼くや庭さみし
月冴えてビカリと光る露の玉

鯉船

一年 高野 美知
初秋の濱邊に出て見れば
沖からもどる鯉船
海の方からを山と積み
まねぎを高く潮風に
いさむ大魚の鯉船

呪はしき日

一年 和田 露子
おゝ呪はしき日よ。
永劫に胸より離れぬ二十八日。
我が學びの父上を、

奪ひたる日よ。
學び子達の胸深く、
巢くうたる思ひ出の日よ。

現實

三年 鹽ツルヨ
廣い々々平野だつたのに
急に險しい崖路に出ました。
危い！
誰かの聲がこだましました。
曉近い部屋ぬちに
すまり泣きが續きます。
先生が逝かれた……
夢だつた。
いえ、いえ夢だつたの
あまり寝苦しかつたから……
あー、それは矢張り、
冷たい悲しい、現實でした。

短歌

三年 鹽ツルヨ

おん父の在さぬ廣き學び舎に
ゆくりなくみたま去りにし師の君よ
果敢く消えし 朝露のごと

○ 三年 伊關 房子

うすれゆく曉き星のそれのごと
安らげく逝きませ吾が師の君よ
師の君のありし面影偲びつゝ
黄昏の山路一人行くなり

○ 三年 大坪 常子

喜びもはた悲しみも包みつゝ
黙して時は流れゆくかな
此の時よただ疾く去れと願ふかな
われ悲しみの極りに居て
時ありて仄かに浮ぶ思ひ出の
なつかしく又悲しかりけり

四年 大柴 幸子

たまゆらにふと浮びくる師の君の
明るき笑顔その白き齒よ
ふと仰ぐ空のさ中に浮びくる

懐かしき師のやさしほゝ笑み
思ひ出は涙なりけり射的場に
笑まひて立てる師の君なりき
星あまた空に輝くその中に

吾が師の君の在ますかと思ふ
一抹の雲のながれを送りつゝ
君を偲びぬ秋のたそがれ

蔓珠さ華紅く目にしむこの秋の
あまりに淋し師の在まさずば
いつしかに空に晩秋の雲たちぬ
師の君逝きて早やも幾日

○ 四年 堀川 八重子

師の君の俤遠く偲びつゝ
今宵淋しく夕月を見る
師の君の御柩に添ふ乙女子の
風も雨も 瞳にも哀し夕顔の花

形見ぐさ書見るごとの淡き香に
想ひ出づるは師の君のかげ

土の上

梧桐の葉ずれさきつつ
ピン取りて、

思はず書きぬ
土の上に、
なぜか私の胸ぬちは
悲しみのみが流れゆく、
あゝ秋訪れぬ校庭に、
「櫻井」の字の悲しさよ。

櫻井先生を想ふ

月よ 清く照せ
先生のみたまのゐる處をば
安かに眠らせ給ふやうに

風よ静かに吹け
先生の御魂の眠ります處をば
安かな上にも安らげくあるやうに



つた瞬間酒井先生の御命令がサツ降つた。一同は思ひ／＼に動き出した片附け、掃除が始まつたのである。間もなく荷物が各部各部に持ち運ばれた。座敷が廣くなつてサツパリした。履物が縁の下に入れられたり棚に藏められたりした。雨も何時かやんで居たので家の周りに掃き清められた。氣持がスツキリした。之で天氣にさへなつてくれたら……。



各部記事

水泳部だより

七月二十四日 雨
ドシヤ降りの朝だ。水泳に出かけると言ふのにどうした天氣なえだらう。とにかく監督の先生方長島先生、日野先生、菅波先生、江尻先生と生徒五十名の一隊は午前六時五十八分平勝の列車で小名濱へと向つた。泉驛に着いた後も未だ降つて居る。最初から「今年は調子が變だぞ。」日野先生や長島先生がシキリにおつしやる。皆の元氣も雨で幾分割かれた様な氣配だつた。泉驛から軌道に乗る事が出来なくて、何回かに分れて自動車に乗つた。雨の中水溜りの上をひどいスピードで自動車が進むのを時々車体が右、左にグラツク傾く。皆が一度にキヤツと悲鳴を上げる。次には泥が容赦なく窓から飛び込んで所縁は落付く。うたれたまこれの嫌だ。けれど皆で合宿所に顔を合せた時は酒井先生が昨日の中からぬらして大變に喜んで迎へて下さつたので、ホツト浮び上る思ひがした。合宿所は毎年の所、西町の大工さんのお家。七十人ものお荷物が室中に一ぱいに横ばられて居る。どうなる事かと思

つた瞬間酒井先生の御命令がサツ降つた。一同は思ひ／＼に動き出した片附け、掃除が始まつたのである。間もなく荷物が各部各部に持ち運ばれた。座敷が廣くなつてサツパリした。履物が縁の下に入れられたり棚に藏められたりした。雨も何時かやんで居たので家の周りに掃き清められた。氣持がスツキリした。之で天氣にさへなつてくれたら……。

晝には少し早いと思はれる頃から自炊生活の封切りがあつた。炊事當番の方が臺所に降り立つた。庖丁が忙しく動く。竈の下には火がたきつけられたらしい。石油の竈にも……。井戸のハネ釣瓶が面白く動いた。出来た御馳走は何？馬鈴薯と茄子の煮付けフツクとした御飯、それに福神漬。お幾縫用の襦袢が食卓代りとして十組分並べられて繕立てが出来れば御料理は砂鉢や井やらに分けられて各臺に配布された。いよ／＼食事、一年の方違は始めてなので嬉しそう、恥しそう、三四年の方違は御袖襟らしう優しく御世話なさる。七十名の大家族の食事はなか／＼に賑しかつた。途中で御飯の御盛りかへ等があつて炊事掛の方は足りなくなりはずまいかと心配させられた。けれどまあ何とか済んだ。

この時の御来は。升。大分御腹が空つて居つたらしい。

食後は酒井先生始め諸先生方から水泳講習期間中の諸規則や注意等があつた。之をやつと落付いた。午後は雨もやんだやうなので海に出掛けの方等もあつたやうだつたけど水が大變冷たくてよく泳げなかつたそう。

水泳講習期間中の規則

一、起床 午前五時

各部記事

一、朝食 午前六時三十分
二、自習 午前七時三十分—九時三十分
三、出 午前十時水泳場に向ふ
一、晝食 午前十一時
一、出 午後二時
一、夕食 午後六時
一、門限 午後六時三十分
一、就寝 午後九時
一、消燈 午後九時三十分

夕食後は散歩に出た方もあつたけど八時頃には就床の用意が始まつた。引き出された寝具は毛布一枚に枕に寝巻之が大部分の方の寝具であつた中には小さい「」を持つて来た方もあつたけれどやつとこのことと蚊帳が張られれば、一張の中に六人から八人、所によつては十人位も入つた。

始めて肉親の元を離れたといふ方もあつたもの、人に語られど孤り寂しい思ひに寝に入つた方もあつたやう。たどる夢路はなつかしい家の人々の上にと、願はずには居れなかつた。

七月二十五日
未だ降つて居るのよ。恨を含んだ聲。二十五日の朝だ。昨夜中の祈りのこころも響れられずに今日も雨か……？
「何時迄降るんだらう」口に出されど皆が齊しく胸に持つ不安の氣持だつたらう。空を氣づかふ體がさう語つて居つたもの。
「庭球の方達も御氣の毒れ。」と、誰彼の口からもれる。我が身

「次は誰？」手を取つて二年の方にお教へになつていらつしやるのは校長先生だつた。

「今日は随分小名演ビル飲んだわな」と云ふ元氣な聲も聞えて四時半頃引き揚げ、夕飯も待遠しく、夜になれば、早や床を敷きつめるの騒動の無い無心の寝顔さへ見やられるに、時は八時半頃。

一隊が小名演に來て始めて心好く過ぎた一日。

七月二十七日 晴

大分昨日の泳ぎで勞れたらしくて起床時間が來てもなか／＼起き出そうとはしなかつた。今日も良い天氣、空には一片の雲さへ見えなかつた。朝食の済んだ後の自習時間にはそれ／＼に思ひ思ひの事をした。或人は海の生活の便りを、或人は夏季課題の勉強を。誰かや校長先生から「驚く谷渡り」の解釋を伺つたものもこの時だつた。九時半には海に出かけた。喜々とし波に戯れながら汀傳ひに水泳場に向ふ一同の元氣な姿！若い人達にとつては昨日の勞れは、昨日中の勞れてあつて決して今日の勞れてはなほらしい。新しい力が身体中にみなぎつて見えたもの。先生方は御指導に御忙しそう。山崎先生は會津、白河、磐城と順に御廻りになつては泳ぎのホームを御教へになられた。泳ぎ勞れてはいかだの上に休む方もあつた時々は他校の姿もその上に見られた。十一時半頃一先づ晝食のため引き上げた。午後の晝食の時間には横になる方も多く、午後の泳ぎには落伍者も四五人あつた。多分新しい今日の勞れのためだらう。午後四時頃一足早く炊事掛りの方を引きつれて校長先生が舎に御歸りになつた。今晚も御馳走は饅頭の刺身だ

各部記事

110

に引き比べての思ひやりか？さすがに女子はやさしい。
「アッ！校長先生と山崎先生が。」と一同がよろこびの叫びを思はず舉げた。八時半頃だつた雨の中に御二人の先生の御姿を見出した時は……。皆は急に元氣に成つた。一同の顔にひらめいた一條の明るい光！どうして見逃し得よう。とうかうする中に雨もあがり、晝近くなれば太陽の光りさへ見え出した。天氣男が來たから大丈夫だよ。と校長先生御氣が高い。午後は晝食もそこそこに海へと一隊は降り立つ。赤に、緑に、黄に、黒に、水着姿の愛らしさ。
この夕、校長先生の御手料理で饅頭の刺身の御馳走。——但し一人五切れ。

七月二十六日

夜來の雨は残りなく晴れて美しい日は照れた。朝食の後は落付いての自習も出來ずに、「先生早く海に行きませう。」との聲がそここゝに起る。言葉のうちにばかりしきれぬ嬉しさが何れた。先の日の雨の二日を思へば無理からぬ事と察せられた。朝の中は少し風があつて寒かつたので砂浜に焚火等した。校長先生の煙にむせて汗ながらの火たきもなか／＼に難い光景であつたらう。午後は丁度風も止んで砂も焼付けく程熱かつたし、潮も温かだつたので泳ぐのには絶好の時だつた。皆は正直なものでイカダの上で震へてゐる方も無く、山崎先生大奮闘あつち、こつちで「先生横泳ぎ見て下さい」「假四級はまだ頂けませんでせうか」等々大騒ぎ。汀の方では「さあ、わしは大かきだ皆様に並んで、ソーウ今度は片手を離すから振いてごらん、ウん、そうなん、なか／＼うまいぞ」

つたので……。先刻求めた七本の壁の中四本は刺身に他は明日の晝の總菜として味噌漬に、校長先生其の他酒井、菅波、江尻の先生方の御働きに依つて手際よく料理が済んだ。御汁はアラ汁だつた。夕食は常よりも早く五時四十分頃だつた。食膳に一同が向つた時誰かの口からお刺身は之で二度れとあらされた。食後は何かと楽しそうだつた。町に外出する方、海岸散歩に由かける方、勉強する方。校長先生を中心にして質問の矢がソコ／＼から飛んで來る。先生少しもひるまずい／＼それを受けてゐた。常に先生が生徒を愛しつゝけてゐらつた美しい心の姿がこれの他にない。

外出から歸られた菅波先生が校長先生の御前に菓子な揚げた所板チョコの残をきれいはいて開けに居合はせた方に少しづつ分けさせたりなどなされた。八時近い頃「一年生が眠そうだから」とおつしやつて、先生は御室に歸られた。先生方の御室では十時頃迄樂しげな話しが續けられた。其處には卒業生の石坂さんや、狩谷さんも居合せて。山崎先生はこの夜平の御家にお歸りなされた。

二十七日の献立

朝 粥 夜 刺身

玉ねぎ味噌汁 豆 アラ汁

七月二十八日 晴

昨日仰ぎ見た太陽と、今朝仰ぎ見た太陽とは少しの變化もなく、空は美しく、海はおだやかに、そして静かな朝だつたのに……。校長先生が逝かれた。私達が師と仰ぎ、慈父と慕つて來て居た

1111

一同が食卓に向つた。食事の前に菅波先生から公式に校長先生のおくなりになられた事が發表された。廿八日午前三時頃急に瀾瀾血のたみにとゞまた外幾人さんが御呼びした肉親の御聲も醫師の手當も全てで眠れる先生の御靈を再び醒し得ずになりました。何とほかない御最後だったであらう。噓として聲なく、むせび泣きの聲のみがつやいた。

それから一切謹慎して先生の御命令を待つた。間もなく水泳中止。午前引き上げの命が降つた。皆悲しみの中に歸るべき荷造りを始めた。今にして思へば最初の日からの雨も或は今日の悲しい日を警告してたのではあるまいか？

十時近い頃あのように御元氣で最後まで生徒を愛しつづけてゐられた先生はしかも水泳の合宿所で、御死生となられて御長男様をはじめ、諸先生、町の方等に守られて自動車で平に向けて御歸り遊ばされたのである。一同は合宿所の門前に並んで永久に再び御案に接する事の出來ない先生を涙の中にお送りに申した。門前には津高女の水泳の方も見えて居られた。

校長先生の御家族の方が自動車で御歸りになつたあとには日野、

菅波南先生の御監督の下に果敢解散、各歸途に就いた。

庭球コート建設の記事

最近御存じの通り、一般に女子體育を重視するやうになつてきました。本校でも風にも心に留意し、庭球部の發達の爲めには大に力を盡して來ましたが、更に今一般向上活躍して見たいと思ひましたが、校友會の經費には限りがありまして、到底所期の成績をあげることは出来兼ねるため、同窓の御方の御力添へによつて舊コートを改造し周圍に金網を張り、徒に球拾ひに勞力を費すことなく眞に庭球を練習し得るやうに致したい積りで改造の計畫を立てたのであります。然るに多々の御同情と御寄附に預り寫眞の如き立派なるコートに設置されましたことは、廣くは當地方女子體育向上に直接には本校體育發達のため、深く感謝して惜かない所でありませう。猶御寄附者芳名は會計報告の部に下記載申上げ以て感謝の意を表したいと思ひます。何卒御留意置きをお願い致します。

建設工事は四月十二日着手、五月二十日竣成五月二十二日(日)曜日コート開き舉行 同日は關係者來賓等多數御招待申上げ、又模範試合をして頂く、磐城炭坑クラブ及び平ヶ丘クラブより二組宛、特に御願ひ致し、盛大な極めました。午後降雨のため中途にして中止、こゝにて二十九日後一時より模範試合を舉行し目出たく此の式を終へました。

會計報告 收入之部

—

一 金壹圓五拾錢 遠藤美惠、木村キミ、堀糠子、淺野キミ、佐藤タツ
一 金壹圓 富岡花子、齋藤松枝、樋口美代、鈴木つれ、鈴木とも、
吉田とく、和田フミ、阿部タケ、木村コウ、木村ノブ、新田目松
子、新田目竹子、山崎サト、西尾政代、堀サグ、木村ケイ、關内ハ
ル、鈴木みい、松崎マツ、鈴木光枝、波多野ハツエ、吉田ヨシエ、
長瀬久子、藤井和、鈴木カツ、松本秀子、縁川ヒデ、谷島ツル、大
和田コト、長瀬カチル、山崎タミ、高萩カツ、清水暎子、高木フ
ヤ、金子綾子、高木ユキ、渡邊コウ、久保ハツ子、江島節子、平野

井アサ、淺田タケヨ、鈴木節子、加藤千代、山

子 野崎ハツ子、清見ハツ子、鈴木ミツ子、大木タマ子、見上ノ子、加
治コト、明吉清子、青木知恵子、柏原美代、柏原さだ子、鈴木セ
イ、鈴木常子、鈴木ヒデア、木村壽恵、瀧トク、小島裕子、岡田真子
高崎愛子、柳内重世、青木節子、加藤シモ、川角カツ、山名フツ、
山崎みな、森ひさな、松本フミエ、渡邊ヒロ、叶多チエ子、齋
藤トキ、岡田花世、鈴木君子、村イサノ、兒玉エミ、高木チイ
高木ミツ、高木カズ、金成マス、村イサノ、渡邊フミ、高清水子、根
木子代、内藤ヒコ、大平ハツ、田山治、小野スミ、小野瀬靜子、川
端マツヨ、菊地キヨ、豊田菊枝、菅波セキ、佐々木光子、吉田密
枝、石川榮子、高木みつえ、星ミヨ、吉田スミ、木田キン、坂本
節子、正木芳子、越智ハナ、秋元美枝、鈴木もと子、高木テイ、橋
本ミチ、雄野シメタ、今平シズ、瀬田ウラ、木城巻子、金成壽子

各部記事

小林綾子、根本文子、猪狩イネ、猪狩ツル、棚田トキ、廣橋タツ
四牧タケ、熊谷隆子、柏原サト、渡邊コリ、篠原喜代、濱崎美代
子、阿部ひて子、額賀佳子、叶多徳子、大方公子、阿部貞子、杉崎
イシ子、岡宮雪子、山崎トメ、吉田チエ、小野静世、奥山ミヨシ、
赤津サタ、赤坂京子、小澤卓子、星ミチ、吉田かつ子、木崎トク、
今村トラ、宇佐神ミヨ、生田弘恵、芹澤キク、明村綾、佐藤てる
子、村田ナギサ、太田ちよ、佐藤キミ、大谷澤枝、大森茂子、若松
セト、皆川とみ、松本カワ、鈴木初代、上田ちやう子、小和口ト
ク、高階みち、高階イチ、高階マサ、山田ハツコ、田原春子、田原
芳子、永井姫子、吉田タツ、竹内ふせ、瀧節、阿部ヒデ、遠山菊江、
松崎久子、南キミ、門野菊子、瀬谷アサチ、齋藤八重、小林トミ
子、高木せい、大谷喜美、酒井キヨノ、矢野ハナ、石川春子、矢吹
のぶ、山崎チヨ、阿部シウ、馬目キエ、須田ノブ、藤野カネ、比佐
アキ、鯨岡ツヤ、三井愛、千葉ミチノ、中田カワコ、金成イチ、安
島アキ、根本キヨ、谷平ツノ、片桐セキ、河上ユツト、河上シヅ
鈴木キク子、水野安子、小野愛子、井上巳子、吉田サタ、牧原な
み子、小堤富美、飯島美代、小松翠、石井ツル、長谷川リエ、佐
藤ミツ子、新妻ヨシ、木村トクエ、草野政子、青山穂代、山内文
子、山内弘子、浅見愛子、篠塚サダ、高木キミ、沼田あや子、鴨澤
々、横田千代子、大平サダコ、門馬文子、小野マミ、織田シヅカ、三
浦ヒデ、松永ハル、草野千穂、助川トミ、中村アイ子、高萩アツ、
高橋マサヨ、伊藤モモヨ、櫻井そめ、経田可視、櫻村ハル、白
石静子、進藤ナチ、木田ヒデ、鈴木マサ、小室ナチ、松崎トリ、津
田春子、小野ハルエ、大津賀イチ、山崎サツコ、木村シン、櫻村

一一四

宮み子、打越淑子、山崎タル、箱崎トキヨ、金成キミ、佐藤ユリ、
山本クニ、齋藤タマノ、入江なつ子、木田久子、酒井昭、山崎ア
ル、鈴木アイ、比佐セツ、高濃サト、渡邊ツナ
一金七拾五錢、馬目とく子、馬目のぶ子
一金五拾貳錢、村田タケ子
一金五拾錢、小野セン、鈴木スガ、渡邊クニ、熊田文子、渡邊チト
セ、高濱君子、齋藤テイ、殿本壽美子、丹野ウメ、丹野ユキ子、
鈴木フサエ、大竹トヨ、齋藤マサ、杉山ツル、石坂順子、猪谷カ
ツ、石坂富美、江口光子、岡田トク、小島ふな、小野イシ、箱崎チ
ヨノ、箱崎カメヨ、正木タツ、正木チヨ、青木目光子、市原藤子、
齋谷マサコ、水竹ムメ、上遠野サキ、上遠野アキ、齋藤トシ子、
齋藤シメ、佐川マキ、諸橋ヒサ、諸橋マチ、若松勝子、瀬尾むめ、
上野サカイ、遠藤タカ、遠藤ヤエ、萩原ミツ子、萩原ヨシ子、小
川ミナ子、山口マサ子、永山竹子、中吉千代子、石井布子、森合
マサ、鈴木ヒデ、牛久サレ、湯山秀子、鈴木アイ、栗野英子、水野
常子、佐藤キミ、吉田由、吉田由、丹泉富美子、丹泉昌子、野
木ミエ、齋藤壽美、加藤フミ、白土眞琴、阿部キミ、荒井君代、青
木嘉子、天津よし、浅田演子、阿部ユキ、伊藤ヨリ、石川政子、飯
土井公子、五十嵐キノ、石川操、稻本ミイ、入江雪子、上野トクエ、
遠藤キミヨ、遠藤ハルノ、江戸玉江、大竹ユキ、大谷キミ、太田
ヨシ、岡田フサ子、小橋ウメ、小山藤枝、小谷テル、小橋千代、小
野麗子、小野ヨシ、小原フサ、上遠野キヨ、鴨タカ、今成アサコ、
神谷ハル、川角俊子、菊地泰代、木村ミヨ、北郷ハル、軍司玉枝、
草野幸子、棚田敦子、國井キヨ、小金泰演子、小松シツ、近藤ト

コ、金土孝子、佐藤幸、坂本静簡、佐川アサノ、佐藤ミサチ、里見
ヤエ子、佐川サヨ、平木ノア子、佐々木安子、佐藤ナチ、佐藤ミ
シ、酒井フミ、佐川會子、作山サト、柴田イヨ、清水アキ、志賀
婦美子、鈴木喜美、鈴木フミ、鈴木操、鈴木幸子、杉浦ナミ、鈴木
治江、鈴木節子、鈴木トシ、鈴木ミサチ、鈴木ヨシナ、高木千代、
高木フミ、高田千里、竹永トク、田村洋江、高木基子、高木久
子、瀧孝子、田子トヨ、田村イツ、丹野孝子、高萩松子、田中トク
島越美知枝、島居ミツ、長瀬シノブ、中野朝子、中村幸、仲本キ
ヨ、永井菊子、仲給スヅ、長瀬タキエ、中根千代、中根敏子、名畑
チヨ、鍋田文代、根本トセ、野上多美、羽賀トシ子、芳賀千歳、
芳賀八百、林シゲ、箱崎花子、藤村須磨子、古河キヨ子、堀房子、
松島スギ、松本リツ、馬目ツネヨ、正木コト、松本ミチ子、緑川
フミ、緑川喜美代、宮内キノ、宮内春乃、武藤初枝、村田静、村上
マツ、目崎八重、矢口スイ、矢吹キミヨ、山本安恵、矢野カネ、山
本初子、野内チヨ、湯山トシ、吉原貞子、吉田節、吉田秀子、吉田
英子、吉田八重子、若松喜代子、渡邊キヨ、齋谷壽子、齋谷桃子、
渡邊カネ、渡邊初子、渡邊ハツコ、渡邊政子、渡邊ミドリ、小室
つみ、淡輪敏子、笹川キチ、渡邊ハツ、神山光代、山部光子、三村
利子、中山嘉代、中山房子
一金五圓、榊本啓、植田ヒデ、外山キ、佐藤とし、宮本チヨ、後
藤キ、深谷ミヨ(右七人連名にて)

庭球部近況

新設コート落成以来、一段と練習に身が入り、毎日放課後意気

各部記事

ず今日迄至りました。願れば一學期中は、大内氏の親切なるコ
トを受け、七月初水戸高女、茨城女子師範と練習試合の爲めの水
戸遠征は、他縣の女子庭球の腕前を見聞し、大に得る處がありま
した。又七月二十四日より八月二日迄の十日間の夏季合宿練習に
は磐城クラブ、平泉樂部の方々の懇切なる御指導に預り、女子庭
球の技術上に一大進歩を來したことは特筆大書すべき事實であり
ませう。しかるに練習四日目に不幸にも横井校長の計に接し、
一時中止の止むなきに至り、又本校にて開催する筈の縣下女子中
等學校庭球大會も、福島高女で催すことになりました。八月十九
日より東京鐵道クラブの戸田、三井組をお迎へして再び合宿練習
を始め、二十四日に豫定の十日間を終へました。特に中川、田中
日野、土岐の諸先生には暑い日もお厭ひなく、毎日御監督下さい
ました。

合宿練習選手左の通り

四年 渡邊トヨ、鈴木操、菅原ユキ、長瀬品子

三年 瀬谷セイ、佐藤トモ、永山登美子、小宮歌子、四牧カワエ

比佐モト

二年 上澤まさ、長谷川キクエ(以上十二名)

新學期を迎へては縣下女子中等學校庭球大會も、十月九日と定
められたので練習も一層猛烈となり、コナは内氏と阿部氏の
兩氏最も御熱心に御指導下され、又日曜日には田村氏外平クラブ
の方々早朝より御來校御指導下され一同必勝の勢にて一日も休ま
ず練習を續けて來ましたが、九月中旬磐城中等學校教員クラブと試
合をして本校の大勝となり、意氣天を突くのを示し、益々技と

各部記事

心算とを練ることに注意して居ります。最後に此度は色々と同窓の御方々に一方ならぬ御同情に預り、又本校生徒一同よりも、色々と御力添へにあづかり庭球部としては御禮の言葉のないやうな次第であります。部としては出来る限り力を盡して皆様の御期待の一部なりとも果して見たいと思つてゐます。皆々様此後とて庭球部の爲めに何分御力添を御願申上げます。

縣下女子中等學校庭球

大會出場の記

涼風渡る九月も猛練習に過ぎ十月とはなりぬ阿部、大内コーチャの熱心なる指導に選手達の熱心に加へ更に校友諸氏の應援其の意氣當に機關も壓せられんばかりとなりぬ。されど、敵は老巧の猛者夢にだも氣をゆるすべき時に非ずと、コーチャ士岐部長を始め其の他部員も一入體魂の習練にと盡せり。何處ともなく可憐なる應援歌は溢れ出てぬ。

一、眞澄める 空の こき嶺 機關の名も 高し
嬉しき 今日よ 乙女ども 心雄々しく立て選手
二、堅き 信念 廣き 愛 汝が心の奥深く
秘めつ 今日や 戦はん 振へ努めよ我選手
三、明星 光る 榮冠は 我が學び舎に輝きつ
歡呼の 叫び いや高く 聲陽の空にこだません
地の利をこそ得され此の意氣いはんや故郷井先生の加護の深きあるを思へば。

十月七日午後一時より壯行會は催されぬ。生徒の壯行の辭に渡

長瀬、佐藤組もみんことに三對〇もて中村實踐の天沼、木桶組を屠り三回戦に入りては渡邊組は福島高女の龜山、鳴原組を三對〇にて敗り、長瀬組も亦福島高女持地、高組を三對二もて屠り、遂に準決勝にて同志打となりたり。

Bコートに於ては菅原組女師校佐藤、米本組と非常なる苦戦をなせしも三對一にて敗れたるは惜しみても猶餘りありたり。
Aコート準決勝は我が校の同志打作戦を秘めつ二對一となるや長瀬組棄權し愈々決勝戦となり、女師校兒島、竹内組と戦ふこととなりたり。

場内は其何れか皆手に汗して只みつゝるのみなりき。愈々決勝戦の開始さるや渡邊組の作戦奏功し五對三にて一ゲームを得、更に四對〇にて二ゲーム、次ぎは四對六にて敵に譲り四對一にて勝り、此處に三對一の優勝の位置を得たりしも〇對四に三對二となり、今此の一ゲームこそは關ヶ原なるぞと敵も味方も一生懸命闘は舞き出でしも風流くして戦ふにたく遂にジュースとなり氣のもむること甚しく渡邊組益々奮闘善戦し六對四もて優勝は我が校の手に歸せり、今迄心雄々しく戦ひし選手も互に手を取りつゝ聲をあげ感激の涙にむせぶのみなりき。

式は閉ぢられたれど優勝旗は我等が胸に輝き學び舎の先生初め生徒の喜び地下の故郷井先生如何に喜びおぼすかと思へば又涙吾妻を後に優勝旗を朝風になびかせ口々に應援歌を歌ひつゝ平驛には十一時下車中川先生始め諸先生の輝きたる笑顔に迎へられは涙靜かに小鎌倉社頭に頼づき學び舎に入るや早や祭壇は設けられ懐しき櫻井先生の寫し始めに捧げては一同わつとばかり感激の

各部記事

逸代表の答辭應援歌一として感激せざるはなく選手一同涙を呑み必らずや勝つて歸るべきことか胸中深く誓ひたり。

十月八日九時出發一行は選手四組に土岐、田中、佐々教諭、阿部コーチャの四人自重に自重我が聲陽の空を後に意氣高く出發したり。二時福島着二部諸氏の盛なる出迎を受け揚々として大平館に着き小憩の後會場に行き練習を始め。天我れに幸せざるか雨降り來りしため中止して豪雨沛然たる中を宿に歸る。三井コーチャ突如として來援されしに感謝の意を表しつゝある折柄大内コーチャ又來援、選手の意氣は止めどもなく高まりぬ。されど此の雨明日と思ふ心もなく早く床に入り熟睡せり。

明ければ九日天はと望めば暗き雲は雨へ南へと急ぐ、風甚だ強けれ共雨は止み居たり。

九時宿を出て會場に戻り込み練習選手服する所もなく意氣高く練習すること十一時迄、愈々試合の幕は落されぬ。最初我が渡邊鈴木組は安積の森合、中村組とAコートにて戦ふ。初二ゲームを失ひしも何のものは續きて三ゲームを得、三對二にて一回戦に勝つ。Bコートにては菅原、潮谷組、相馬高女の光井、石橋組と戦ふ。菅原の確實さに潮谷のスマッシュ並にボールの手際に觀衆一同歡聲を挙げ三對〇もて見事勝利を得たり。續いて第二回戦見指す強敵女師校の大將五十嵐、片山組と、我が渡邊組と戦ふ。渡邊組確實に善戦し遂に三對一にて勝利。飛電々々、キョクフルヘアガセンシュ。

我が縁の絆愈の向ふ所敵なきが如く、第二回戦にて菅原組と善戦し三對一にて安積の永山、渡邊組を敗れば、先に不戦一勝たりし

涙にむせびたり。

過去には幾度か敗慘 其の都度慰めと激勵をなれ給ひし先生は在らず木靜かならんと愁て風止まずの嘆深うして只感涙あるのみ。

願ふに此の光輝ある我が校の歴史を飾り得しはコーチャ、先生、選手の熱心、同窓、校友諸氏の聲援はもとより顧問界を異にせる故郷井先生の加護にまつ所甚大。此の稿を終るに際し謹みて故郷井先生の靈に謝意を表し奉る。

圖書部だより

最近社會事情の激變や諸種の新思想が混沌として錯綜するやうになつて讀書熱の益々深刻になつて來たやうな傾向が仄見えることは、我が精神文化の促進の上に誠に喜ぶべき現象であらうと思はれる。

この秋に際し本部は從來の方針を飽く迄も繼承して、名著、珍籍の蒐集に専ら努力を抑ふことを吝まなかつた結果として、部門的にも數量的にも異常の進展を示して参りました。特に本部の二大秘庫としての記念文庫が備へ付けらるゝ事となりましたので、一層深み行く秋と共に幾多の讀書子を喜ばして居ります。

(一)熊谷文庫 熊谷照子嬢のあの世に旅立たれた傷しい追憶記念として、五十金を御遺族の方から御寄贈になりましたので、近代思想の粹を寛め然かも權威ある珍籍數部を購入し、熊谷文庫と命名して永く其の芳志を傳ふことになりました。

(二)櫻井文庫 校友會長として、崇高な人格の持主として偉大な

各部記事

教育家として、將た各部の大恩人として風に崇敬の目標を押し、故郷井先生の御遺族から、葬儀其の他の費目を節せられ、二百金を本部に贈られましたので、直ちに役員會を開き、永く先生の面影を偲ぶと同時に智識演義の泉として定評ある友朋堂出版の書籍百部を購入して圖書室に備付け、絶好の記念として讀書子の目を樂ましめる事となりました。

茲に記して深く御芳情を感謝する次第であります。(O、S生)

職員送迎

第一學期中法制經濟御受持の高増先生、第二學期に入りては化學數學御受持の木村先生に御別れして、人生離合の常なきを歎じただけかりか。七月の末にはこまなう墓ひまわらせし櫻井先生に永訣して、愈々人世の果敢なき、現世のあぢけなきを感じました。然るにその後高増先生のお代りに三笠先生、木村先生のお代りに杉本先生、而して櫻井校長先生のお代りとして、教育上に深遠な御經驗をお持ちの木村校長先生をお迎へすることが出来。又久しく缺員であつた國語科に慶應大學卒業の山崎先生をお迎へしてわれらは茲に心機一轉、明るき氣持で再び學問に、運動に、いそむことが出来るやうになりましたことを深く喜びます。

第十五回同窓會總集會記事

今年は秋の涼しき日を選んで總集會を開くことにしようとの議が起つたので、年々夏季に開いてゐた例なのを延して居つたところ、相會會長櫻井先生の計に接したのて後任會長の御見えになつ

てからと又々延してたう、十一月六日に開いたのであつた。會場は本校の屋内體操場に設けられ、午前九時半開會の幕は切つて落された。その順序は左の通りであつた。

- 一、開會の辭(會員金成キミ)
- 一、弔祭(櫻井故會長に會員柏木フミ、田久ミキ、奥山ミツシ、四牧タケ、小林ミツイ、佐川マサ)
- 一、會長挨拶(新任木村會長)
- 一、會務報告(只野理事)
- 一、協議(總集會期日の件、春に決定、委員選任法、未決)
- 一、櫻井先生追悼提題

餘興

- 一、童謡遊戯(小學一年生四名)
- 一、川崎先生のお伽話
- 一、ラヂオドラマ
- 一、三絃、琴合奏
- 一、落語……
- 一、准會員餘興(澤キクヨ、野木トキ、各獨唱)
- 一、田中先生獨唱
- 一、開會の辭(會員山崎サト)
- 出席者左の通り(出席順)

新田目竹子、樋口美代子、神谷ハル、瀧ツルヨ、鈴木愛子、佐藤タツ、松崎マツ、鈴木ミイ、平塚ムス、佐々木八重子、瀧簡、金成マス、根本キヨ、芹澤キク、加藤トミ子、猪狩ツル、山崎アル

子、石坂順子、大和田コト、山崎里子、藁谷マサ子、小野うめ、水野市子、渡邊ハツコ、箱崎ハナ子、小原フミ、酒井フミ、高田千里、酒井ナホ、草野千穂、佐藤ユウ、菅田ハツ、諸橋チヤウ、金成キミ、青沼トモ子、岡田フサ子、鈴木喜美子、淺野キミ、清水アキ、仲本キヨ、叶多ちよ、谷島ツル、渡邊かれ、柏原美代、松本道子、草野幸子、正木コト、志賀フミ子、石川エイ、酒井アル、關内品、鈴木トモ、青木節子、鈴木ミイ、比佐セツ、原八重子、渡邊つな、大平美喜、市原静子、野崎千恵、佐藤キム、吉田美代子、入江ナツ、市原藤子、田村文子、小野愛子(以上六十七名)

准會員二十二名、特別會員約二十五名
尙ほ當日は相續石城教育會の總集會のありし日であつた爲め會員中小學校に奉職して居らるる者の出席の少かつたのは止むを得ないことであつた。

大正十五年度同窓會經常費決算

収入之部	
前年度繰越高	三八一、四〇〇
十四年度一四二名會費	五六八、〇〇〇
利子	二六、二二〇
總集會費正會員八八名(内子供一人)	七〇、一〇〇
准會員 三六名	一八、〇〇〇
合 計	一、〇六三、七二〇
支出之部	
卒業生賞品代	一〇二、九〇〇
各部記事	

講習會費用 三四、〇五〇
會誌印刷代及送料 一四九、八〇〇
總集會費用 一三六、〇八〇
錢 別 五四、〇〇〇
香 花 料 二、〇〇〇
通 信 費 五五、〇〇〇
講演者謝禮 二〇、〇〇〇
選手慰勞會へ補助 四二、二五〇
雜 費 一一、五五〇
校友會へ貸與 一七五、〇〇〇
合 計 七九二、六三〇
高 二七、一〇八〇

大正十五年度創立二十週年記念事業費

前年度繰越高	
大正十五年四月分入一四二名分	一三四、〇〇〇
利子	一四二、〇〇〇
合 計	二〇、〇五〇
子	二九六、〇五〇



現
職
員

擔任學科	現住所	氏名	會計	森運吉
修身	平町字八幡小路七五	木村寅三	庶務弓道	松浦昌
修身博物	平町字八幡小路六〇	中川完一	英語	佐藤與吉郎
國語	平町字胡摩澤二八	只野清	裁縫	森山さみ
圖書歷史	平町字杉平二一	酒井英吉	本校寄宿舍内	石硯利子
体操	平町字舊城跡四	永島磯物太	体操	本校寄宿舍内
音樂	平町字八幡小路七六	田中金三朗	化學	平町字八幡小路五七
英語	平町字舊城跡六間門三	吉松茂夫	歷史	平町字揚土三〇
物理教學	平町字柳町九	土岐昇	茶儀	平町字舊城跡二ノ毛
修身教育	平町字柳町四	佐藤清	生花	平町字田町四
國語	平窪村字平窪三九	鈴木應善	校醫	平町字南町四四
裁縫	平町字四軒町一八	佐々木クマ	法制經濟	平町字二丁目
			割差助手	平町字五丁目一一
				江尻ふみ子

舊
職
員

舊職員		新職員	
平町四軒町	愛知縣津島町瑠璃小路	岩崎てつゑ	廣田德行
長崎港外端島炭礦社宅	平町仲間町	目黒方	小出トミ
仙臺市木町一三	阿部サヲ	鈴木アヤ	杉立ルイ
東京市外平塚町杉立高等女學校	平町	宮城縣立白石中學校	秋田縣立秋田高女
岡山縣笠岡町川部屋町	大垣ゼン	姫路市日本女學校	平町胡摩澤
宇都宮高等女學校	金川テイ	平町南町	東京市芝區神谷町一七
死	中野久子	沼知キク	大山カツ
大阪市外中津町下三番四四〇	飯田	北條猛次郎	長岡恒喜
茨城縣立土浦高女	細見	河津啓太郎	佐藤マキ
山口縣三田尻	仲野	濱名ヅル	池上久麿
水戸市上市向井町三丁目	佐々木	宮地貞一	須藤リツ
廣島縣福山中學校	須藤	須藤	須藤
兵庫縣水上郡國領町	須藤	須藤	須藤
大阪市女子師範	須藤	須藤	須藤
新潟市學校町通三番町	須藤	須藤	須藤
長野縣伊那町	須藤	須藤	須藤
山形縣立山形中學校	須藤	須藤	須藤
東京市本郷區東片町三六	須藤	須藤	須藤

平町新町 三六
静岡縣庵原中學校
京都市上御靈前下ル宮本町六〇
安積高女
福島縣女子師範
朝鮮京城黃金町三丁目三〇二二
死 亡
大阪地方裁判所檢事局
横濱市役所
兵庫縣
福島中學校
四倉町
盛岡地方裁判所檢事局
宮城縣立第二高女
静岡地方裁判所檢事局
死 亡
内郷村

桑原ナカ
大竹義吉
秋山角彌
小針よね
高木ミツ
石川ささよ
柴野銀一郎
梅村 馨
大地義治
箱崎イシ
大河原四郎
中山ユキ
中里健夫
菊澤銳子
高増貞治郎
櫻井賢文
木村ケイ

卒業生

第一回卒業生 (四十名)

大正二年三月

又葉郡大野村大川原字上平
内郷村宮原嶺
東京市外大森源藏原二七七三
石城郡錦村
東京府下池袋一〇八九
湯木町表町
川前村川前驛前
内郷村小島字新町三
調査中
調査中
大阪市中津町下三番四四〇
平町銀治町
豊岡尋常高等小學校
名古屋市中區榮場町五五
(石田) 渡邊キヨ
(市原) 野口キヨ
(木間) 清水シゲ
(大出) 小林富士
大橋ハマ
渡邊リツ
(舊谷) 小菅ヤス
(上遠野) 赤津キヨ
(川角) 牧原ナミ
(金成) 箱崎トキ
(柏原) 森本キク
(吉田) 波多野ハツ子
(吉田) 高橋トキ
(中村) 小河スミ
◎ (中野) 久子
(野田) 伊坂ケイ
久保木チトセ
(山田) 山根カヲ
山崎ヨシ

平町白銀町

静岡縣濱松市三組町九三

入山第四坑小學校

朝鮮京城府南山町二ノ一八

平町田町七〇

調査中

平町研町

調査中

平町北白銀町

北海道空知郡岩見澤町七ノ八

石川郡蓬田村

若松市外北村大字石堂臺二號四戸

豊岡尋常高等小學校

死 亡
死 亡
死 亡
死 亡
死 亡
死 亡
死 亡

第二回卒業生

(四十名)

大正三年三月

調査中
好岡村

(山本) 大原クラ
(眞木) 佐川テヲ
小林タカ
(國府田) 武川フサ
遠藤眞咲
(味岡) 佐藤トシ
齋藤トシ
(齋田) 中野ウタ
酒井ツネ
◎ 水町トク
(瀬谷) 佐藤三千代
沼田タケ
(石川) 渡邊セイ
(島海) 金川テイ
(松本) 鍋田リヤウ
福王寺ハヤ
森ウメ
(松本) 柏木フミ
大正三年三月
(服部) 甘粕ミネ
(西山) 遠藤ヨシ

高久村下高久字若宮二〇
愛知縣津島町瑞瑞小路
樺太大泊郵便局下キミナイ
鹿島村大字久保
兵庫縣武庫郡住吉村梅木八二四
調査中
上小川村大字高崎一二一
茨城縣土浦高等女學校
群馬縣桐生高等女學校
調査中
内郷村大字綴
平町大工町
朝鮮馬山陸軍官舎
内郷村大字宮
平町新川町
神谷村
平町田町五七
調査中
磐崎村下湯長
臺灣新竹州大溪郡三坑
上遠野村上遠野
東京市外四葉堀ノ内三〇
横須賀市阪本二〇八

(本島) 瀬谷タマ
(島海) 河上コト
渡邊フサ
(舊谷) 鈴木ヒサ
(横内) 小堤富貴
(吉田) 泉信子
(吉田) 高木智恵子
高木テイ
丹吳富美子
(中村) 杉下キク
(植頭) 山崎チカ
(草野) 多田非カネ
(山崎) 吉田ハナ
山崎トメ
(山下) 浅井キク
(山下) 吉木キヨ
(山本) 菅田ハツ
(松本) 林イシ
(齋藤) 久田レシ
(齋藤) 渡邊シシ
(佐川) 久野八重
(酒井) 三崎チヨ
(水田) 佐藤モト

(四十三名) 大正四年三月

(大谷)	猪狩	ッラ	
(小野)	中吉千代子	上小川村上平	
(大谷)	鈴木ヨシノ	東京市本郷區駒込千駄木町四六	
(大谷)	猪狩	ッラ	
(御代)	吉田	シナ	
(木田)	吉田	文	
(渡邊)	杉野千枝子	川島好	
(木村)	トクエ	木村ヒサ	
(板垣)	喜久	小野テル	
(三井)	久村花子	木田キン	
(柴田)	大本タマロ	(伊藤)	永山フツロ
(自土)	伊藤モロハ	(遠藤)	和田フミヨ
(比佐)	グニ	(比佐)	アキ
(諸橋)	金成キミ	(石島)	音壽
(橋木)	大須賀キクロ	(山田)	香代
(杉山)	茂登子	(水戸市下市裡)	四丁目
(郡山市桑野南町)	平町白銀町一〇	(小川村三島字桐瀬)	一四
(平町長橋町)	二丁目	(東京府下千住町五丁目二一)	福島市腰ヶ濱霞ヶ内二
(相馬郡小高町大字南小高字荒町二六八二北野)	今村秀子	(佐藤)	カヲ
(木田)	吉田	文	
(渡邊)	杉野千枝子	川島好	
(木村)	トクエ	木村ヒサ	
(板垣)	喜久	小野テル	
(三井)	久村花子	木田キン	
(柴田)	大本タマロ	(伊藤)	永山フツロ
(自土)	伊藤モロハ	(遠藤)	和田フミヨ
(比佐)	グニ	(比佐)	アキ
(諸橋)	金成キミ	(石島)	音壽
(橋木)	大須賀キクロ	(山田)	香代
(杉山)	茂登子	(水戸市下市裡)	四丁目
(郡山市桑野南町)	平町白銀町一〇	(小川村三島字桐瀬)	一四
(平町長橋町)	二丁目	(東京府下千住町五丁目二一)	福島市腰ヶ濱霞ヶ内二
(相馬郡小高町大字南小高字荒町二六八二北野)	今村秀子	(佐藤)	カヲ
(木田)	吉田	文	
(渡邊)	杉野千枝子	川島好	
(木村)	トクエ	木村ヒサ	
(板垣)	喜久	小野テル	
(三井)	久村花子	木田キン	
(柴田)	大本タマロ	(伊藤)	永山フツロ
(自土)	伊藤モロハ	(遠藤)	和田フミヨ
(比佐)	グニ	(比佐)	アキ
(諸橋)	金成キミ	(石島)	音壽
(橋木)	大須賀キクロ	(山田)	香代
(杉山)	茂登子	(水戸市下市裡)	四丁目
(郡山市桑野南町)	平町白銀町一〇	(小川村三島字桐瀬)	一四
(平町長橋町)	二丁目	(東京府下千住町五丁目二一)	福島市腰ヶ濱霞ヶ内二
(相馬郡小高町大字南小高字荒町二六八二北野)	今村秀子	(佐藤)	カヲ
(木田)	吉田	文	
(渡邊)	杉野千枝子	川島好	
(木村)	トクエ	木村ヒサ	
(板垣)	喜久	小野テル	
(三井)	久村花子	木田キン	
(柴田)	大本タマロ	(伊藤)	永山フツロ
(自土)	伊藤モロハ	(遠藤)	和田フミヨ
(比佐)	グニ	(比佐)	アキ
(諸橋)	金成キミ	(石島)	音壽
(橋木)	大須賀キクロ	(山田)	香代
(杉山)	茂登子	(水戸市下市裡)	四丁目
(郡山市桑野南町)	平町白銀町一〇	(小川村三島字桐瀬)	一四
(平町長橋町)	二丁目	(東京府下千住町五丁目二一)	福島市腰ヶ濱霞ヶ内二
(相馬郡小高町大字南小高字荒町二六八二北野)	今村秀子	(佐藤)	カヲ
(木田)	吉田	文	
(渡邊)	杉野千枝子	川島好	
(木村)	トクエ	木村ヒサ	
(板垣)	喜久	小野テル	
(三井)	久村花子	木田キン	
(柴田)	大本タマロ	(伊藤)	永山フツロ
(自土)	伊藤モロハ	(遠藤)	和田フミヨ
(比佐)	グニ	(比佐)	アキ
(諸橋)	金成キミ	(石島)	音壽
(橋木)	大須賀キクロ	(山田)	香代
(杉山)	茂登子	(水戸市下市裡)	四丁目
(郡山市桑野南町)	平町白銀町一〇	(小川村三島字桐瀬)	一四
(平町長橋町)	二丁目	(東京府下千住町五丁目二一)	福島市腰ヶ濱霞ヶ内二
(相馬郡小高町大字南小高字荒町二六八二北野)	今村秀子	(佐藤)	カヲ
(木田)	吉田	文	
(渡邊)	杉野千枝子	川島好	
(木村)	トクエ	木村ヒサ	
(板垣)	喜久	小野テル	
(三井)	久村花子	木田キン	
(柴田)	大本タマロ	(伊藤)	永山フツロ
(自土)	伊藤モロハ	(遠藤)	和田フミヨ
(比佐)	グニ	(比佐)	アキ
(諸橋)	金成キミ	(石島)	音壽
(橋木)	大須賀キクロ	(山田)	香代
(杉山)	茂登子	(水戸市下市裡)	四丁目
(郡山市桑野南町)	平町白銀町一〇	(小川村三島字桐瀬)	一四
(平町長橋町)	二丁目	(東京府下千住町五丁目二一)	福島市腰ヶ濱霞ヶ内二
(相馬郡小高町大字南小高字荒町二六八二北野)	今村秀子	(佐藤)	カヲ
(木田)	吉田	文	
(渡邊)	杉野千枝子	川島好	
(木村)	トクエ	木村ヒサ	
(板垣)	喜久	小野テル	
(三井)	久村花子	木田キン	
(柴田)	大本タマロ	(伊藤)	永山フツロ
(自土)	伊藤モロハ	(遠藤)	和田フミヨ
(比佐)	グニ	(比佐)	アキ
(諸橋)	金成キミ	(石島)	音壽
(橋木)	大須賀キクロ	(山田)	香代
(杉山)	茂登子	(水戸市下市裡)	四丁目
(郡山市桑野南町)	平町白銀町一〇	(小川村三島字桐瀬)	一四
(平町長橋町)	二丁目	(東京府下千住町五丁目二一)	福島市腰ヶ濱霞ヶ内二
(相馬郡小高町大字南小高字荒町二六八二北野)	今村秀子	(佐藤)	カヲ
(木田)	吉田	文	
(渡邊)	杉野千枝子	川島好	
(木村)	トクエ	木村ヒサ	
(板垣)	喜久	小野テル	
(三井)	久村花子	木田キン	
(柴田)	大本タマロ	(伊藤)	永山フツロ
(自土)	伊藤モロハ	(遠藤)	和田フミヨ
(比佐)	グニ	(比佐	

(七十三名) 大正五年三月

[illegible]

第五回卒業生

(關口)	小山モト	(須藤)	關原ユウ	(鈴木)	新妻トシ	(永山)	佐々木トク	齋藤ミツ	山崎フミ	山崎ミツ	古山ミユキ	坂田フミ	萩トキ	中野ナナ	(諸橋)	大正六年三月	(市原)	福島芳子	(飯野)	鈴木元子	(西内)	佐々木キク	(四野)	佐々木キク	(大平)	古市イト	大森しげ	鈴木トモ	(太田)	鈴木トモ	大須賀光井
------	------	------	------	------	------	------	-------	------	------	------	-------	------	-----	------	------	--------	------	------	------	------	------	-------	------	-------	------	------	------	------	------	------	-------

草野 藤木ミチ
(山下) 海老原ヨネ
(山田) 紺野シメナ
(岡野) 畑江リカ
(松井) 香宗我部 忍
(松崎) 松本アサ
(松本) 赤羽 梅代
(松本) 永山ヤエ
◎ 馬目ヨシ
(眞木) 江尻 精子
(古澤) 高木ソメ
(兒玉) 工藤 藤春
◎ 赤塚ヒサノ
青木シゲ
安藤シゲ
◎ 佐々木 みさか
◎ 佐藤チトセ
(齋藤) 太田 榮
齋藤タキ
(齋藤) 猪狩サグ
(酒井) 酒井久子
(酒井) 磯邊ハル
(坂田) 青沼トモ
(水町) 萩 敏子

泉 村

双葉郡上岡村上平岡(全村小學校)
石城郡植田町木町
茨城縣多賀郡平潟町

鄂山市第二小學校
平町新川町
茨城縣多賀郡高萩

死 亡
死 亡
死 亡
死 亡
死 亡
死 亡
死 亡

双葉郡幾世橋村字殿町
平町二丁目
田村郡大瀧根村神俣驛前
平町一丁目
東京市下谷區池ノ端七軒町二三

第六回卒業生

第六回卒業生 (五十九名) 大正七年三月

○(猪狩) 市原藤子 四岡敏子	○(石川) 佐藤ミヤ 石川エイ	○(織田) 林貞子 西原若枝	(白土) 坂本養子 星増男	(佐藤) 片岡テツ 駒塚八重	(鈴木) 鈴木初子 阿部イク	(助川) 徳田トミ 岩動ツフ	(土方) 小林俊子 蛭田クラ	(島) 植松イシ 小松イシ	(志賀) 小松ユキ 徐原緑	白土ヤス 平町八幡小路九 石城郡小名濱町 湯本町三園
----------------------------	----------------------------	---------------------------	--------------------------	---------------------------	---------------------------	---------------------------	---------------------------	--------------------------	--------------------------	---

大正七年三月

石城郡好間村川原子(全村小學校)
 石城郡草野村大字下神谷
 平町城山六間門(茨城縣磯原小學校)
 平町鍛冶町
 平町南町六五
 茨城縣助川舍瀨海岸
 秋田市築地西町六
 平町才樋小路
 平町才樋小路一六
 大坂市四湊川區蒲江町三八五
 平町四丁目
 京都市上京區鉄屋町通り丸太町南入
 平町紺屋町
 石城郡錦村(尋高校)

大河原	(大平)	本多サノ	富樫ヤス	小笠原シヅ	高濱キミ	荻野サツコ	松本フミエ	瀧澤百代	龜井徳	谷サツノ	吉田たう	酒井昭	大和田コト	樫村ハル	目澤ハナイ	田村キミ	酒井サチ	根本シ	阿部スミ	石森滋子	青天日光子	阿部カサル
-----	------	------	------	-------	------	-------	-------	------	-----	------	------	-----	-------	------	-------	------	------	-----	------	------	-------	-------

小名濱町
 東京市外西巢鴨町池袋五二六
 東京市本郷區千駄木町五二
 平町三丁目五六
 大阪市目（泉小學校）
 大阪市住吉區天王寺町大阪高女連
 平町紺屋町
 東京府下瀧ノ川四原八〇二中村方
 永戸村合戸
 磐崎村湯長谷
 西白河郡小田川小學校
 磐城高等女學校
 桑折町南町三六
 東京市本郷區駒込富士前町一九
 青森縣三戶郡浪崎セメント會社工
 平町二丁目
 石城郡磐崎村藤原小學校
 湯本尋常小學校
 仙臺市東通リ三〇
 亡

[illegible]

第七回卒業生（七十六名） 大正八年三月

村 上 愛	阿 部 ヨ シ エ	宮 川 チ エ	諸 橋 シ シ	鈴 木 ヨ シ	助 川 ノ ブ	十六名)	大正八年三月	(石島)	小野 ヨ シ エ	(石崎)	堀 サ ク	(井出)	齋 藤 タ マ ノ	(猪狩)	門 馬 ハ ル ヨ	(西牧)	矢 吹 ノ ア	◎	星 野 信 子	志 賀 エ サ ノ	沼 田 キ ス	小 野 セ ン	大 澤 ツ ル	(小野)	永 山 サ ダ 子	(奥山)	浅 田 タ ケ ヨ	◎	渡 邊 シ マ	◎	渡 邊 ツ ナ	(富谷)	中 田 カ ツ ヲ	(加藤)	小 野 キ ク
-------	-----------	---------	---------	---------	---------	------	--------	------	----------	------	-------	------	-----------	------	-----------	------	---------	---	---------	-----------	---------	---------	---------	------	-----------	------	-----------	---	---------	---	---------	------	-----------	------	---------

[illegible]

大和田	新妻ヒツ	大和田モト	小野イト	渡邊ヒロ	若松	綠川敏子	谷ヒデ	吉原	清水松枝	高木	志賀アツ	高濃サト	丹橋コウ	玉橋シゲ	根本ナツ	根木	佐々木チエ	永山	潮谷アサチ	永山セツ	永山静枝	内藤ヒデア	横山フミ	村上	宗川イチ	佐々ハル	遠藤	郡司エイ
-----	------	-------	------	------	----	------	-----	----	------	----	------	------	------	------	------	----	-------	----	-------	------	------	-------	------	----	------	------	----	------

石城郡田村松本屋
四ツ倉町仲町
平町古銀治町

内郷村御殿小學校

平町銀治町

神谷小學校

宮城縣白石町小路四八

内郷村鐵道城邊鐵道宅

札幌市登平小學校

草野村泉崎

磐崎村大字西郷

東京市下谷區西町三十ノ十

相馬郡中村町三ノ九

平町四丁目

内郷村高坂

好間村大字北好間

平町白銀町

大野村柳生

内郷村宮澤入宅

内郷村松宮字竹之内
名古屋市東區杉村町南苑田

平町北目町

双葉郡富岡町

双葉郡長森村鴻草

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

徑原喜代
吉田アサ

鈴木スズ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

鈴木シヅ

(草野) 緑川エイ
(山田) 新妻ツネ
◎ 山崎喜代子
山口初子
(矢部) 井上千代子
山下喜久衛
松崎悦榮
小關榮井
(見山) 小島みや子
權田すず
(酒井) 猪狩ミサ子
佐川マキ
佐々木英
齋藤タカヨ
(佐藤) 岡部キヨ
◎ 佐藤キク
(木村) 四家ケイ
◎ 木田ヒサオ
◎ 水野市子
◎ 水野愛子
◎ 水野谷キヨ
(白石) 木田ヒサ子
(鈴木) 四家ヒサ
篠塚

第九回卒業生 (八十四名) 大正十年三月
平町四丁目(内郷第一小學校)
札幌市北五條四十六丁目一
草野村泉崎
東京府下南品川東廣町五〇〇
東京府下神奈川東廣町二一七
東京府下三河島蓬田二二四
東京府下瀧ノ川九七印刷局官舎内河島方
相馬郡原ノ町南新田字町

淺野キミ
若松シシ
猪狩喜美
黒澤マサ子
(池田) 市川スミ
(市原) 赤津勝子
(伊藤) 高野マサ子
井戸川せい
今村イマ

平町五丁目
平町古銀治町
東京市下谷區島町一ノ三號
四倉町木町關口方(四倉校)
平町十五丁目

東京市麻布區章町五五清野方

茨城縣石岡町

東京市京橋區明石町三七

茨城縣多賀郡磯原町

平町六間門

愛知縣海部郡津島町米ノ里

茨城縣久慈郡高倉村大字上高倉

石城郡植田町佐藤

東京市

赤井第一小學校

平町材木町六

大阪市東區上辻町二七

植田町八幡町

東京市神田區駿河臺鈴木町一五

平町新町(平第一校)

好間村

名簿

(江尻) 諸橋ヒサ
遠藤榮子
(織田) 石山クニ
(岡田) 兒山ツネ
(岡田) 吉田ラウ
(岡田) 太田ちよ
(大竹) 秋山カツ
大谷麗子
大西ヨシエ
大平たか
大和田安子
(香取) 猪狩梅子
河上シヅ
菊地まさ
(堀田) 布地ウラ
鯨岡ヨシノ
栗城アイコ
(兒玉) 瓜田エミ
齋藤ハルエ
酒井キヨノ
(作田) 片桐セキノ
佐藤タツ

大阪市東區區見町四一二
東京市外東大久保五一二遠藤方
東京市
横濱市神奈川町中川二四二〇
内郷村鐵道ノ内二(内郷第二學校)
東京府下千住町二丁目七四
東京府下中野
茨城縣多賀郡南中郷村石岡一〇二
好間村下好間沼田二九(好間校)
東京市
好間尋常高等小學校
茨城縣日立町諏訪臺社宅ノ四
平町南町(平第二校)
東京市四谷區番町
湯本町表町松栢館
北米合衆國ネパタ洲ウエルズ町
ホックス三一
泉村八木屋
福島市新町一九
平町新川町一〇
石城郡上小川村
石城郡鹿島村蔵持
赤井第一小學校
平町四丁目
安達郡本宮町中條三六

(佐藤) 高橋ハルエ
佐藤ヨシエ
志賀ヨシエ
白井静子
菅本アサ子
(鈴木) 緒方カネ
(鈴木) 松本キヨ
鈴木キヨ
鈴木定子
(鈴木) 渡邊スエ
鈴木田たけ子
(鈴木) 鈴木みい
(鈴木) 植木ヤイ
(鈴木) 比佐やす
(鈴木) 根内ヨネ
(高橋) 鈴木キヨ
(高橋) 鈴木キヨ
(橋) 高島貞子
(丹野) 松崎マツ
(仲里) 永井姫子
(永山) 三島タマ
(根木) 關内キヨ子
(根木) 前田麗子

双葉郡久ノ濱小學校
東京府下荏原郡碑文谷一七七
福岡縣田川郡伊田町白鳥三井住宅
飯野村北白土
東京市神田區東松下町五
上野野村上野野木町
東京市龜町區土手三番町廿一嘉悦孝子方
廣島市細工町一七清七方
金澤醫科大學眼科醫局
双葉郡浪江町
仙臺市北山町二二四ノ三
神戶市
東京
東京府下蒲田町新宿六〇〇
玉川小學校
田村郡小野新町小學校
群馬縣高崎
茨城縣多賀郡北中鄉村車置
双葉郡木戸村大字前原
高久村下高久牛輦
下小川村大字上平
内郷第三尋常小學校
窪田村大字九面
湯本小學校

根本ハル
西山シゲヨ
小野ツネ
鹽テ
齋藤松枝
久野ヤツ
平澤ミネ子
廣瀬富美子
廣橋タツ
（星）午來ツネヨ
（盆山）永口キクイ
松崎キヨ
松木カヲ
（三浦）白土タキ
（三島）新花千代
宮川とみ
宮原光
古川ヨシ子
矢内タツ
矢吹タノ
吉田三喜子
吉田ミサヲ
渡邊イタ
渡邊キク

死 亡
死 亡
死 亡
第十回卒業生（八十四名） 大正十一年三月
草野村（阿部醫院内）
平町五色町
平町田町
好間村北好間字籠
東京
相馬郡原ノ町南新田
平町三丁目
平町仲町
東京府下大森瀨藏屋二八六四小林方
高久村
上野野村上野野木町
茨城縣
双葉郡木戸村
小名濱町古港榮屋商店内
好間尋常小學校
田町一八
東京
江名町

國府田 貞
古山サユリ
田久ミキ子
（阿部）佐々木ヤエ
阿部ヨシヲ
石川サト
牛久サト
内山ハツ
上野サカイ
江尻ハナ
（遠藤）熊テ
大出光
（大谷）木田トヲ
小澤卓子
岡田チヨ
岡田ユキ
太田ユキ
大和田愛子
小谷ノア
柏原多彌子
柏原マサ
金成イチ

平町北目通九（好間尋常高校）
飯野村白土
平町土橋二八（平第二校）
福島市堂ノ前一九
好間村中好間田中
平町田町一九
東京市牛込區東京女子醫專
臺灣臺中市臺灣病院官舎
湯本三陽
平町五丁目
東京府下四里鴨町池袋一〇二二
平町鎌田
平町四丁目和泉屋
京都府土寺島場町七三（神樂市場下ル西側）（佐川）
大浦東風橋字出口
四倉町字新町
東京本郷區駒込神明町二六九
双葉郡澁田村上繁岡
好間村北好間字屋敷前
飯野村白土（高久尋常高校）
平町研町一六
双葉郡浪江町
東京市小石川區初音町一〇
平町北目町

片寄ミヤ
加藤千代
加治コト
菊田ヒデア
木田ヒサ子
木村キミ
木村コウ
山宮多磨子
鯨岡ツヤ
熊谷君子
清水キミ
小泉キヨ
齋藤ハル
新妻香
酒井ヒサ
佐藤キミ
佐藤アル子
佐藤マス
志賀シン
白土ツルヨ
鈴木喜美子
鈴木ケラ
大井ケイ
鈴木セイ

東京府下荏原郡碑文谷
茨城縣津川村上小津田
伊達郡桑折町（小學校）
好間尋常高校
横濱市
好間村神現堂六〇
在米國
平町鎌田小路（平第二校）
湯本村（磐崎尋常小學校）
四倉仲町
平町八幡小路
平町
東京市下谷區櫻木町一七
草野村下神谷主場（四倉小學校）
平町一丁目
平町白銀町鐵道官舎（神谷尋常高校）
東京
横濱市澁田町大東住宅十六號
双葉郡木戸村大字上堀
東京
長野縣立大町高等女學校
草野村下神谷字澤帶
平町城山下

鈴木テ
鈴木のぶ
鈴木マユ
岡部ヨシ子
高木カヅ
高木セイ
田村フミ子
田山治
戸田ミチ子
殿本壽美子
富田愈喜
（新妻）宮澤仁知英
（西郡）新妻タマヨ
額賀公子
野上愛子
野崎ハツ子
（花澤）根本タケ
（藤田）宇佐神ヨ
（古市）赤城喜久子
（馬目）豊田マス
（丸山）大嶺ミチ

飯田	山添サ 五十嵐幸枝	石坂	細井順子	泉田シキア	江尻仁子	遠藤タカ	大越テル	大須賀ハルノ	緑川ヨネ	大平美喜	大森秀	大森レイ	岡部	松本捷	小野静也	加澤英子	加藤登美	加藤巳代子	石井ゆり	金成マス	菊地キヨ	北郷しづ	木村ヒデ
----	--------------	----	------	-------	------	------	------	--------	------	------	-----	------	----	-----	------	------	------	-------	------	------	------	------	------

大正十二年三月

[illegible]

明村	安島	阿部	有川	安瀬	松木	佐藤	菊地	井月	今村	今村	江尻	遠藤	遠藤	上田	植田	佐久間	押田	田中	大竹	大竹	大谷	大平
アキ	ウメ	コヤマ	ヤエ	波	常代	ミツ	ナミ	和	トク	キヌ	チヨ	チヨ	ウ	ヒサ	クイ	チ	チ	ク	ク	ク	ク	ハツ

大正十三年三月

(佐藤)	市川きり	佐藤キヨシ	佐藤竹枝	佐藤ヨシ	澤久子	志賀綾子	◎大越サヲ	(志賀)	草野藤子	(白土)	吉田義枝	菅波セキ	(鈴木)	鈴木カツ	鈴木きみ	相樂君子	(鈴木)	鈴木節子	(高木)	園田タヤ	(高松)	竹内こと	武田秀子	觀賀光子	(田代)	田中貴保子	田村ミツ
------	------	-------	------	------	-----	------	-------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	-------	------

[illegible]

(吉田)

岡田花世 岡田ツネ 小野ウメ 片寄鐵子 上達野ケチ 上達野アキ 上達野マツ江 川島靜江 狩谷綾子 金子綾子 櫻村とみ子 木村雅 草野千穂 熊田フミ 小島あな 小島裕子 小松浪子 小松ミドリ 小西ハル 小泉チイ 上坂靜子

四ッ倉町仲町六
平町綿屋町六七
平町綿屋小路二四
小木津鐵道官舎内
双葉郡廣野村北迫(廣野小學校)
平鎮村下平鎮
神谷村中神谷
双葉郡上岡村上手岡字杉内五三
東京府下豊多摩郡代々幡町字櫛ヶ谷五二
東京府下南千住八九五村山方
東京市麹町區家政學院
東京市神田區共立女子職業學校
茨城縣茨城郡常盤村屋敷
湯本町湯本三箇一八一
東京日本女子大學
赤井村日渡
平町仲町一七
平町柳町三
東京市神田區共立女子職業學校
東京市本郷區女子美術學校
湯本町三箇七六
大浦村上仁井田南濱三二二
平町鎌田町四六
湯本町日渡

阿部ひで子
安藤 喬子
新田目竹子
飯島美代
石井布子
江尻モト
江島節子
石山佐久
井關しげ
關通キミ
遠藤ヤエ
大川ロシ子
大高喜代壽
大竹トヨ
岡田瓦子
小川フミ
小川ミヤ子
萩原敏子
越智ハナ
小野ハルエ
小野アツエ
加澤シゲノ
加澤 春子
加澤ヤイ
東京市神田區共立女子職業學校
磐崎村上湯長谷長倉七二
平町四丁目三六
平町三丁目三
錦村中田字上中田一一五
東京市外下流谷實踐女學校
大浦村上仁井田
平町古銀治町
東京市京橋區東港町一丁目二
平町材木町八
平町五丁目一
調査中
湯本町三箇二二一
小川村
不 明
泉 村
四ッ倉町新町(東京府下大森帝國醫專)
湯本町辰口二五
赤井村辰口二六
鎌田村鎌田道山一〇三
東京府下荏原郡荏原町中延四九二
湯本町日渡六〇
湯本町字天王崎三

柏原サダ
加藤カネ
加藤シモ
加藤フミ
金成壽子
鴨 壽子
河田ハル
木村ノア
木村壽恵
草野政子
棚田トキ
熊谷隆子
黒澤シヅ
小井川ツタ
上坂武子
木橋トヨ
小林綾子
小林トミ子
小西キヨ
小松チヨ
小峰 春子
齋藤ヤイ子
坂本壽子

夏井村下大越根摩二五
内郷村高倉一
茨城縣多賀郡松原村高萩一六一七
湯本町三箇一
平町白銀町二〇
内郷村一ノ坪一〇
四ッ倉町仲町一四七
入道野村入道野(大浦小學校)
平町三丁目一八
東京市麹町區家政學院
東京市麹町區家政學院
双葉郡上岡村上手岡
湯本町三箇一七二
下小川村下小川上ノ臺六三
平町六箇門一
東京市麹町區家政學院
湯本町湯本八仙一九
四ッ倉町鮫川五六
好間村上好間
上小川村上小川
赤井村畑子澤一〇一
湯本町辰ノ口二五
郡山市本町三丁目
大浦村孤塚

坂本三枝
坂本ミツエ
櫻井恭子
佐藤キヨ子
佐藤キミ
佐藤トキ
佐藤ミツコ
佐藤 緑
磯崎ツヨ
志賀ハナ
白土眞琴
白土リエ
鈴木アイ
鈴木常子
鈴木ヒデア
鈴木ミツイ
須田ノア
高木生子
高木キミ
高木スギ子
高階マサ
高崎マサ
高崎愛子
高崎竹子
内郷村字安瀧
湯本町日渡
双葉郡木戸村坂下
磐崎村藤原大畑
磐崎村藤原松本二一
東京市浅草區地方今月町三六
東京市外下流谷實踐女學校
植田町後田源道(在東京府)
大浦村大森民野
双葉郡久之濱町未綴
平町仲町六七(水戸女子師範二部)
四ッ倉町仲町三九
平町鎌田小路三〇
玉川村林城塚前(水戸女子師範二部)
平町古銀治町七五
飯野村谷川瀬
茨城縣多賀郡藤川村小豆畑二〇四四
好間村上好間島場前
大野村玉山林崎
東京市
東京市神田區共立職業學校
夏井村大越
夏井村管波
平鎮村下平鎮

高萩カツ
高萩シヅ
高原シズ
瀧 ツル
瀧 トク
武内梅子
田 中 俊
丹 邊 芳子
丹野ユキ子
千葉ミチノ
津田春子
圓谷清子
富澤富子
永井シヲ
永山初子
永山竹子
中村アイ子
新妻マサノ
額賀佳子
野木ミエ
箱崎カメ
箱崎チヨノ
萩原ミツ子

平窪村下平窪
平町古銀治町
泉村泉五一
四ッ倉町新町
神奈川縣横須賀市旭町三一
平町田町三八(上遠野村)
長崎縣北松浦郡江迎村
湯本町三編一八六
平町番匠町五
平町四軒町一九
錦村大倉大島
東京府下北豊島郡下練馬村羽澤三四八一最上方
錦村大倉大島二三
上遠野村瀬房林
東京府下戸塚伊勢ヶ原八五〇
平町四丁目五
草野村細谷
双葉郡木戸村前原
赤井村三島仲通
湯本町三編
平町古銀治町二
勿來町窪田
東京市麹町區家政學院
東京市麹町區和洋裁縫女學校

(根本)

萩原ヨシ子 東京府下杉並町阿佐ヶ谷七一四
橋本二三子 平町橋本小路一
蓮見壽満子 東京市麹町區紀尾井町女子藥學校
長谷川孝子 内郷村綴秋山
春木三枝 平町道匠小路二一(神谷小學校)
廣川あさ 雙葉郡久之濱町北町
古川千代子 湯本町二二二
古山キミヨ 不 明
堀江雪子 茨城縣多賀郡大津
木多春江 東京市麹町區家政學院
正木タツ 平町長橋町一二
木多ヒデ 平町長橋町一二
正木千代 平町長橋町一二
増井幸 死 亡
松井薫 死 亡
松崎イシ子 大宮市大宮
松崎ハル 平町南町六二
松原 綾 多賀郡大津町四町
松本シゲ子 植田町金畑一二
松本ヒテロ 平町白銀町一
間宮雪子 茨城縣北相馬郡山王大字岡九七七
三浦ひて子 石城郡内郷村白水
三井タケ子 双葉郡富岡村字驛
水竹ムネ

第十五回卒業生 (百四十五名)

三原トシ 昭和二年三月
門傳さみ
柳内重世
山崎サツ子
山名フジ
山野逸春子
湯山秀子
若松夏子
渡邊アルロ
渡邊ちとせ
渡邊ミキ
山内弘子
山内文子
佐川マサ
鷺フタ
青木嘉子
淺田濱子
阿部キミ
阿部雪子
天津露子
荒井君代
飯土井公子

植田町七二米
平町三丁目一四
平町新川町二
多賀郡平沼町
内郷村宮町田
平町鎌田四六
平町大工町二六
多賀郡大津町
双葉郡廣野村字館
川前村字堀本二九
平町鎌田町一一
好間村字八方屋
平町三丁目四
植田町字本町一八
平町久保町四一
内郷村大字御殿
平町四丁目一四
小名濱町米野八七
平町新町二二
好間村堂田
泉村字根之町
平窪村字眞似井
平町長橋町四八
平町古銀治町九一

五十嵐きの 錦村中田王
石川政子 多賀郡關南村神岡上
石川千操 双葉郡湯本村字館
伊藤ユウ 神谷村字倫村
稲本ミイ 平町鎌田町四三六
入江雪子 上遠野村字根岸
上野トクエ 平町葛城三ノ丸
江村玉江 平町白銀町一〇
遠藤キミ 赤井村四小川
遠藤ル 好間村當田
岡田フサ子 安積郡山王町一〇八
小谷ワル 石城縣神谷村鎌田字岸二七
小原スガ 茨城縣多賀郡磯原町
太田ヨシ 湯本町字諏訪下
太田ヨシ 平町胡摩澤二二三
大谷キミ 平町一丁目五
小野麗子 入遠野村字落合
小野ヨシ 平町道匠小路二五
小幡千代 山田村下山田
小山藤枝 植田町五一三
上遠野キミ 内郷村白水
金成アサ子 泉村大字井戸内
川角俊子 平町新町一一八
神谷ハル 双葉郡富岡町毛登

鴨々カ
菊地春代
北郷ハル
木村ミヨ
草野幸子
徳田敦子
國井清子
軍司玉枝
小金森濱子
小幡ウメ
小堀政子
小松シツ
小室ツマ
金土琴子
近藤トモ
酒井フミ
佐川アサノ
佐川會子
佐川サト
坂本静緒
佐山サト
佐川キチ
佐々木安子
佐藤ナナ

四倉町新町一四
多賀郡關南村仁井田
平町鐵道會舍一三
盤崎村大字上湯
奴業郡能町村
湯本町天王崎九〇
平町三丁目三七
好間村字上ノ原
平町鎌田町三七
上小川村字古屋
赤井村字田中
渡村字中寺富
平町田町一六
平町北目町九
平町紺屋町二六
內郷村字廣畑
平町餅町九
奴業郡久之濱町
好間村観現堂
平窪村字四左衛門
平窪村字高橋
磐崎村字松本

佐藤サチ	四倉町新町(和洋裁縫女學校)
佐藤幸	泉村八木屋七八
佐藤よし	平町二丁目二八
里見ヤエ子	湯木町關船大平
志賀婦美子	平町南町三三ノ二
柴田イヨ	平町南町四七
清水アキ	湯木町關船
杉浦ナミ	北目町一一
鈴木喜美	多賀郡平湯町三
鈴木節子	内郷村級森山三二
鈴木トシ	神谷村下村寄野々目
鈴木泊江	平町字材木町三六
鈴木フミ	平町字觀治町七(仙臺第二高女)
鈴木ミサ子	平町四丁目一五
鈴木操	平町鎌田字下間原
鈴木幸	内郷村級一之坪
鈴木シナ	平町材木町九
鈴木恵子	平町田中一三
高木千代	湯木町辰ノ口社宅
高木久子	平町八幡小路七六
高木フミ	双葉郡廣野村下淺見川
高田千里	平町一丁目二〇
高萩松子	川部村沼部字鳴澤
瀧孝子	湯木町天玉崎一

川部村沼部字鳴澤
平町字北目町
平町紺屋町一九
赤井村西小川淵澤
多賀郡華川小豆畑山下三一
四倉町仲町
好間村今新田
平町六丁目九一
好間村駱駝下
平窪村辰ノ口
飯野村南白土八ッ坂
平町新川町二二
內郷村經一九
植田町金畑二四
平町舊城跡三
四倉町新町
赤井村赤井大門
又兼郡富岡町驛
平町南町二五
多賀郡大津町二〇
四倉町米河岸
赤井村高萩鹿野一八
平窪村下平窪
石城郡山田村富津時内

芳賀八百 箱崎花子 平木ノブ子 藤村須磨子 古河清子 顯フサ子 正木コト 松島スギ 松本ミチ子 松木ツネヨ 馬目ツネヨ 縁川喜美代 縁川フミ 宮崎英子 宮内キノ 宮内春乃 武藤初枝 村上マツ 村田 目崎八重子 矢口スイ 矢吹キミ 野内チヨ

赤井村字田町
多賀郡磯原町
勿來町
久之濱町北町
好間村小谷作
平町播磨小路一
好間村馬場前
平町白銀町一一
双葉郡上岡村日
湯木町表町一九
平町四丁目八
相馬郡原町新町
平町一丁目
平町胡謨澤一〇
湯木町入仙
赤井村高萩
平窪村古館



編輯餘錄

本縣教育界に一大なる投影を残して、彼の鴻飛が交ふ海濱の客舎に幾多の教へ子に擲せられ、靜かに永遠の眠りに就かれた「偉大なる教育者としての櫻井先生」といふ以外に、極めて忍耐力に強き人、常識の發達したる人、勤儉力行身か以て人を率ゐたる人、小さき「己」を減して大なる「己」に生きたる人、熱烈燦爛が如き信仰の人、感恩の精神に燃え立つた人として、我々に幾多の教訓、無形の感化を残したる「大恩人としての先生を、長へに忘れる事は、どうしても出来得ないのであります。

そこで、此の度同窓會並に校友會が、一致協力して先生の芳躰を永久に記念し、幾分にも先生の面影を偲ぶことがたらしめ、且つ此の食しい冊子を先生の靈前に獻げたいとの微衷から、追悼號出版の計畫が成立したやうな譯であります。ところが、皆さまから先生に關する数々の思出深き御感想をお寄せ下さいましたので、亡き先生の靈を慰むるに十分のことと思ひ、茲に玉稿をお寄せ下されたお方々の御芳情に對して、厚くお禮を申し上げて置きます。地下の先生、語らざる墓碑は幾期波む閻連井の水にも増して心頭更に朗然たるものがあるであらうと思はれる。(O、S生)



昭和二年十二月五日印刷
昭和二年十二月十日發行

【非賣品】

編輯 磐城高等女學校内
發行 只 野 清

印刷 新潟縣長岡市表町三丁目
岩 瀬 直 藏

印刷所 新潟縣長岡市坂之上町二丁目
株式會社 北越新報社

發行所 福島磐城高等女學校々友會

